

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和53年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

序

京都大学構内遺跡の調査は、まがりなりにも、敷かれた軌道の上を歩きはじめたが、その成果はかなりのものであった。従来から知られている資料と関連するもの以外に、本年度は、弥生時代の方形周溝墓群と、平安時代の火葬塚の発見が注目される。とくに後者は、考古学的に発掘調査された初めての遺跡である。その火葬塚を現地保存することになったのは、当センターの本来の目的の一つを具体的に実行したのものとして、高く評価されよう。当該遺跡保存について、深い理解を示された理学部当局、本部事務局に対し、深甚の敬意を表するとともに、本官が海外出張のための不在期間中に、センター長の職務を代行して下さった西川幸治工学部教授、京都大学構内遺跡調査会会長の亀井節夫理学部教授ならびに当センター運営協議会委員、京都大学構内遺跡調査会委員らが本件の解決に努力して下さったことに対し、感謝にたえないところである。

なお本年度の調査の実施と本年報の作成にあたっては、また多くの人々の御協力をいただいた。上記両機関の委員の諸先生には、それぞれの専門分野からの御教示を得たし、それ以外にも、小林行雄、福山敏男、杉山信三、小野山節の諸先生からは、有益な御指導をいただいた。また、宮内庁書陵部、文化庁文化財保護部、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、京都府教育委員会、兵庫県教育委員会、岡山県教育委員会、京都市文化観光局、向日市教育委員会、倉敷考古館、服部遺跡調査団などの多くの機関の方々から御助言をいただいた。また、京都大学施設部、経理部、庶務部と各原因部局の御協力を得た。ここに、厚く御礼申しあげる次第である。

昭和 54 年 1 月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

樋 口 隆 康

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で昭和53年1月から同12月末日までに現場作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告、およびそれに関する研究をまとめたものである。
- 2 国土座標に従って1辺50mの方形の地区割をし、遺跡の位置を表示した(図版1)。
- 3 層位と遺構の位置は、国土座標第Ⅱ座標系($x=-108,000$ $y=-20,000$)が($X=2,000$ $Y=2,000$)となる京都大学構内座標によって表示し、標高の基準は理学部地質学教室地階重力原点(TP:60.82m)によった。方位Nは真北をさす。
- 4 遺構の略号を使う場合は、奈良国立文化財研究所の方式に従って、溝(SD)、井戸(SE)のように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物番号は本文、実測図、写真を通して表示を統一した。遺跡の調査名であるローマ数字のあとに、調査ごとの通し番号を1から付した。
I：京大医学部遺跡 AO18 区発掘調査。
II：京大理学部遺跡 BE 29 区発掘調査。
III：京大農学部遺跡 BG32 区発掘調査。
IV：白河北殿跡比定地 AA18 区試掘調査。
V：Ⅱを除く京大吉田キャンパスの試掘調査。
(例 I1：京大医学部遺跡 AO18 区出土遺物1番)
- 6 参考文献は、本文中に〔著者名、発表年次〕の形式で表わし、本文末に一括した。
- 7 遺物整理は京都大学構内遺跡調査会調査員と調査補助員があたった。
- 8 遺物の実測と製図は、泉拓良、宇野隆夫、岡田保良、吉野治雄、浜崎一志、西野素生、原充、山口理子が担当した。遺物の写真撮影は泉拓良が担当した。
- 9 本文は、樋口隆康、亀井節夫、泉拓良、宇野隆夫、岡田保良、吉野治雄、中堀謙二が各章を分担執筆し、執筆者名は章の初めに記した。
- 10 編集は樋口の指導のもとに岡田がおこない、泉、宇野、吉野が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度

目 次

第1部 昭和53年度京都大学構内遺跡の調査

第1章 昭和53年度京都大学構内遺跡調査の概要と成果	1
1 調査の概要	1
2 調査の成果	2
第2章 京大医学部遺跡 AO18 区の発掘調査	7
1 層位	7
2 遺構	8
3 遺物	12
4 小結	16
第3章 京大理学部遺跡 BE29 区の発掘調査	17
1 遺跡の立地と調査経過	17
2 層位	18
3 遺構	19
4 遺物	25
5 考察	32
第4章 京大農学部遺跡 BG32 区の発掘調査	39
1 層位	39
2 遺構	40
3 遺物	41
4 小結	42
第5章 白河北殿跡比定地 AA18 区の試掘調査	43
1 調査の目的	43

2	層位と遺構	43
3	遺物	44
4	小結	46
第6章 京都大学吉田キャンパスの試掘調査		47
1	教養部エレベーター新営予定地の試掘調査(AN23・AQ23区)	47
2	本部構内排水ポンプ新営予定地の試掘調査(AT27区)	50
3	工学部電気工学科等校舎新営予定地の試掘調査(AW28・AX28区)	52
4	環境保全センター重金属処理装置室新営予定地の試掘調査(AY25区)	53
5	医学部附属病院西構内電気管理設予定地の試掘調査(AI14区ほか)	54
第7章 京都大学構内遺跡の花粉分析		55
1	試料	55
2	分析方法	55
3	分析結果と考察	56
4	小結	59
第2部 京都大学構内遺跡の研究		
第8章 京都大学構内遺跡と京・白河		61
1	はじめに	61
2	京都大学構内遺跡検出の遺構	61
3	白河条坊の検証	66
4	京都大学構内遺跡の北と南	69
5	まとめ	70
第9章 鴨東の開発——平安京と京近郊——		71
1	文献に現われた山城国愛宕郡	71
2	鴨東の遺跡	76
3	まとめ	78
参考文献		81
京都大学構内遺跡調査要項		84

図版目次

- 1 京都大学吉田キャンパス地区割図
- 2 京大医学部遺跡 AO18 区 1. 第5層発掘後全景 2. 土壘状遺構 SA1 と溝 SD1
- 3 京大医学部遺跡 AO18 区 1. 井戸 SE6 2. 井戸 SE8 3. 土坑 SK11
4. 土器溜 SK15
- 4 京大医学部遺跡 AO18 区 1. 土器溜 SK16 2. 瓦溜 SK12 3. 集石 SX2
4. 石段状遺構 SX3
- 5 京大医学部遺跡 AO18 区 井戸 SE8 出土の須恵器と陶器
- 6 京大医学部遺跡 AO18 区 軒瓦
- 7 京大理学部遺跡 BE29 区 1. 発掘前全景 2. 第1検出面の遺構全景
- 8 京大理学部遺跡 BE29 区 1. 第2検出面の遺構全景 2. 第3検出面の遺構全景
- 9 京大理学部遺跡 BE29 区 1. 発掘区南壁東部の層位と方形周溝墓Ⅲ東辺断面
2. 発掘区北壁西部の層位と方形周溝墓Ⅰ西辺断面
- 10 京大理学部遺跡 BE29 区 1. 火葬塚 SX1 検出 2. 土坑 SK2 断ち割り
3. 火葬塚 SX1
- 11 京大理学部遺跡 BE29 区 1. 方形周溝墓Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ 2. 方形周溝墓Ⅰ南周溝内の
土器 3. 方形周溝墓Ⅲ東周溝内の土器
- 12 京大理学部遺跡 BE29 区 弥生土器, 縄文土器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 瓦
- 13 京大農学部遺跡 BG32 区 1. 土坑 SK1 と溝 SD1 2. B区西壁 a 地点の層位
- 14 京大農学部遺跡 BG32 区 1. C区東端南壁の層位 2. C区西部南壁の層位
3. 縄文土器 4. 黒色土器, 土師器
- 15 白河北殿跡比定地 AA18 区 1. 調査地全景 2. 南トレンチ南壁層位 3. 南トレン
チの遺構 4. 土師器, 灰釉系陶器, 軒平瓦
- 16 京都大学吉田キャンパスの試掘調査 1. 教養部 AQ23 区 TP1 第10層出土の弥生土器
2. 教養部 AN23 区 TP2 溝 SD1 出土の瓦と羽口
3. 本部構内 AT27 区出土の須恵器, 陶磁器, 土師器
4. 工学部 AW28 区 TP3 西壁の道路断面

挿 図 目 次

1	施設部給水センター建物新営予定地の層位	6
2	南壁と西壁の層位	8
3	発掘区のおもな遺構	9
4	土坑 SK4 の上部集石	11
5	土坑 SK4 の遺物出土状況	11
6	土器溜 SK16 出土の土器	13
7	井戸 SE5 出土の土器	14
8	土器溜 SK14 出土の土器	14
9	土坑 SK11 出土の土器	14
10	土器溜 SK2・SK3 出土の土器	15
11	TP4 北壁の層位	17
12	西壁と南壁の層位	19
13	第1検出面の遺構	20
14	土坑 SK1 の断面	20
15	第2・第3検出面の遺構	21
16	土坑 SK2 の断面	22
17	第3検出面の弥生時代遺構	23
18	方形周溝墓Ⅰの土器出土状況	24
19	北壁にみる方形周溝墓Ⅰの西辺断面	24
20	方形周溝墓Ⅲの土器出土状況	24
21	縄文土器と弥生土器	25
22	弥生土器	26
23	弥生土器Ⅱ9の頸部擬口縁	26
24	弥生土器Ⅱ9の胴部文様	27
25	土師器	28
26	黒色土器と瓦器	29
27	須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 中世陶器	30

28	輸入磁器	31
29	瓦	31
30	銭貨	32
31	BE30 区出土の土器	33
32	調査区域	39
33	B 区東壁の層位	40
34	D 区東壁の層位	40
35	縄文土器	41
36	土坑 SK1 出土の土器	42
37	溝 SD1 出土の土器	42
38	遺構平面	44
39	南トレンチ西壁・南壁，北トレンチ北壁の層位	45
40	第7・8 層出土の土器	45
41	瓦と弥生土器	46
42	TP1 東壁の層位	47
43	TP1 黒褐色土Ⅳ(第10層)出土の弥生土器	48
44	TP2 遺構平面	48
45	TP2 東壁の層位	49
46	TP2 溝 SD1 出土の土器	49
47	調査区域	50
48	TP1 南壁の層位	50
49	TP2 北壁の層位	51
50	溝 SD2 出土の須恵器	51
51	試掘坑位置図	52
52	TP1 北壁の層位	52
53	TP3・TP2・TP4 の層位	53
54	TP1 西壁の層位	54
55	TP5 東壁の層位	54
56	花粉分析試料 2・3 の採取層位	57
57	花粉分析試料 5・6 の採取層位	57

58	京都大学構内遺跡のおもな調査地点と遺構	64・65
59	白河条坊とおもな調査地点	67
60	平安時代の鴨東	73

表 目 次

1	理学部遺跡 BE29 区出土遺物対照表	35
2	花粉分析表	56
3	京都大学構内遺跡のおもな検出遺構	63
4	白河地域におけるおもな検出遺構	67
5	京都大学構内遺跡調査の歴史	89

第1章 昭和53年度京都大学構内遺跡調査の概要と成果

樋口隆康 亀井節夫

1 調査の概要

本年度の調査は、以下の方針の下に実施した。まず、京都大学吉田キャンパスで、近い将来に建物を新営する予定地を試掘調査し、来年度に工事が予定されている地区については、過去の予備調査によって本格的調査が必要であると判断した地区の発掘調査をおこなうこととした。また、本年度の埋設管工事予定地については、過去の調査資料が少ない地点について試掘調査をし、管路掘削方法の指導をする。吉田キャンパス外の附属施設では、周知の遺跡に近い場所での建物新営工事について、原因部局と施設部との協力によって、工事開始時に機械で試し掘りをし、立合調査をおこなうこととした。

その結果、昭和53年度におこなった京都大学構内の埋蔵文化財関係調査は、以下の16件である。立合調査については、昭和53年12月末日現在実施済みのもののみを記した。なお、理学部琵琶湖古環境実験施設新営工事の立合調査は、滋賀県高島郡高島町教育委員会と合同でおこなった。

試掘調査	工学部電気工学科等校舎新営予定地(本部構内遺跡 AW28 区) (第6章, 図版 1-51a~d)
	環境保全センター重金属処理装置室新営予定地(AY25 区) (第6章, 図版 1-52a・b)
	病院西構内電気管理設予定地(京大病院遺跡) (第6章, 図版 1-53a~f)
発掘調査	理学部宇宙物理学科等校舎新営予定地(理学部遺跡 BE29 区) (第3章, 図版 1-54)
	農学部農林生物学科硝子温室改築予定地(農学部遺跡 BG32 区)(第4章, 図版 1-55)
	理学部物理学科校舎新営予定地(農学部遺跡 BG31 区) (実施中, 図版 1-56)
	工学部イオン工学実験施設新営予定地(本部構内遺跡 AW28 区)(実施予定, 図版 1-57)
立合調査	医学部基礎医学校舎新営工事(医学部遺跡 AN18 区) (第1章, 図版 1-58)
	理学部附属琵琶湖古環境実験施設新営工事(滋賀県高島町) (第1章)
	農学部附属高原牧場宿舍等新営工事(京都府丹波町) (第1章)
	宇治地区研究所実験棟新営工事(京都府宇治市) (第1章)
	東南アジア研究センター建物新営工事(AK10 区) (第1章, 図版 1-59)
	施設部給水センター建物新営工事(AY22 区) (第1章, 図版 1-60)
	北部構内ガス管理設工事(農学部遺跡) (第1章, 図版 1-61)
	教養部構内ガス管理設工事(教養部遺跡) (第1章, 図版 1-62)
	病院西構内電気管理設工事(京大病院遺跡) (第1章, 図版 1-63)
	医学部構内電気管理設工事(医学部遺跡) (第1章, 図版 1-64)

工学部電気工学科等校舎新営予定地の試掘調査では、中世の「白川道」路面を検出できた。そのため、工学部と施設部との協議の結果、建物工事を2期に分けることにし、本年度は「白川道」からはずれるイオン工学実験施設新営予定地(第1期工事分)だけを発掘調査の対象とした。また、理学部宇宙物理学科等校舎(合同建物)新営予定地の発掘調査では、平安後期頃の火葬塚を検出したため、京都大学構内遺跡調査会は、調査会各委員と学外研究者の助言を得て、遺構の保存について中間報告を作成し、京都大学埋蔵文化財研究センターに提出した。この中間報告をもとに、センターは運営協議会を開催し、火葬塚の現地保存を希望することとし、そのことについて理学部と本部事務局の協力を要請した。その結果、建物新営は設計変更され、遺構をそのまま保存するという決定がなされ、とりあえず火葬塚を穿孔ビニールシートで被い砂で埋め戻すことになった。そのため、最初に合同建物の中に予定されていた理学部物理学科校舎を、別の地区に建設することになり、その予定地について昭和53年11月1日から急拠発掘調査を実施することになった。

以上のような結果から、発掘調査と試掘調査、および概要報告の作成は京都大学構内遺跡調査会に委託された。このようにして本年度に実施した調査の報告とともに、昭和52年度に実施した医学部基礎医学校舎新営予定地の発掘調査(医学部遺跡 AO18 区, 第2章)、白河北殿跡比定地 AA18 区の試掘調査(第5章)、教養部エレベーター新営予定地の試掘調査(教養部遺跡 AQ23・AN23 区, 第6章)、本部構内排水ポンプ新営予定地の試掘調査(本部構内遺跡 AT27 区, 第6章)の報告をもとにして、⁽¹⁾本年報の第1部を作成した。

京都大学埋蔵文化財研究センターと京都大学構内遺跡調査会の規約と構成、調査面積と期間などについては本文末の要項に一括してある。京都大学吉田キャンパスの地区割と土器の種類を示す用語については『京都大学構内遺跡調査研究年報一昭和52年度一』を参照されたい〔京大埋文研78a〕。

2 調査の成果

昭和53年度の調査によって、いくつかの新しい知見を得たが、詳細は第2章以下で述べるとし、本節では、それらを各時代ごとに整理して本年度の成果の全体像を明らかにすることを目的とした。

縄文時代 北部構内では BE29 区(第3章)と、BG32 区(第4章)の発掘調査、ならびに現在発掘中の BG31 区の調査によって、農学部遺跡のひろがり確認できたといえよう。縄文中・後期では、BE29 区が川の中にあたり、BG32 区の中央が旧微高地から後背低地にかけての北斜面を示し、BG31 区の南東隅が前記北西斜面であったことが判明した。

BE29 区の川は、晩期に流路を西へ変えたらしく、BG32 区から BE29 区まで、その時期の堆積物として暗灰色ないし黒褐色の土が見られる。

遺物については、BG32 区 SK2 出土の一括遺物が、中期末のまとまった資料である。BE29 区では、中期から晩期の土器が少量あり、医学部電気管理設工事の立合調査(図版 1-64)でも、後期中葉の土器が少量出土しているが、両者とも他の地点から流れ込んできたものであると考えられる。かつて、藤岡謙二郎現京都大学名誉教授が縄文土器を採集した教養部構内の地点(図版 1-7)の西約 10m で、ガス管理設工事の立合調査(図版 1-62)をおこなったが、地表下 1.2m までの間に表土層と黄砂層を検出しただけで、縄文時代の遺跡は確認できなかった。昭和 52 年度に実施した BG31 区の試掘調査〔京大埋文研 78a pp. 18~19〕で出土した植物遺体の調査と花粉分析の結果によると、中期には比較的安定した常緑広葉樹林がひろがっていたが、晩期には草地が多くなり、森林がやや荒れた状態になっていたことが判明した。さらに、この樹林の中に落葉広葉樹であるトチが生えていたという結果が出ている。詳細については別冊として報告する。そのほか今年度も縄文時代から平安時代までの花粉分析をおこない、環境復原の基礎資料を得た(第 7 章)。

弥生時代 理学部遺跡 BE29 区の黄砂上面で弥生中期の方形周溝墓 4 基と、それらを区画する 2 本の溝を検出した(第 3 章)。方形周溝墓からは中期前葉、溝からは中期中葉から後葉頃の遺物が出土している。北部構内中央の東西道路付近にあった旧微高地(泉 78)の末端から方形周溝墓群を切り離すように、2 本の溝はつくられている。追分地蔵遺跡 BA 30 区(図版 1-6)では、比較的まとまった前期末の遺物が出土しており、集落が近くにあったと予想できるが、中期の遺物は、今回の調査によって得られたもの以外には出土したことがなく、北部構内に当時の集落があったかどうかは今後の課題として残されている。一方医学部電気管理設工事の立合調査(図版 1-64)で、後期の壺と甕が数十片、白河北殿跡比定地の試掘調査(第 5 章)で、同じく後期の甕 1 片が出土した。教養部遺跡 AQ23 区の遺物整理で、前期末畿内第 I 様式(新)と東海地方の水神平Ⅲ式が共存することが判明し(第 6 章 1)、BE29 区の中期の土器は琵琶湖地方と近い内容をもつことも明らかになった。中期前葉の京都市深草遺跡の土器や、京都市岡崎遺跡の後期の土器についても同様のことが指摘されており〔円勝寺発掘調査団 71〕、京都盆地の土器様式の変遷と、畿内と琵琶湖地方との関係を今後の調査によって明らかにする必要があると考えられる。

古墳時代と奈良時代 本年度の発掘調査では、医学部遺跡 AO18 区で、7 世紀前半の須恵器杯と奈良時代の須恵器蓋・杯が出土しているだけで、新たな知見は得られなかった。

平安時代 前期の遺構は、理学部遺跡 BE29 区(第 3 章)で土坑、本部構内遺跡 AT27 区(第 6 章 2)で幅 9.8m の南北方向の道路面と東西の側溝を検出した。中期の遺構は BE 29 区と農学部遺跡 BG32 区(第 4 章)で溝や土坑を検出した。後期の遺構は、BE29 区で火葬塚、BG32 区で土坑、医学部遺跡 AO18 区(第 2 章)で井戸、柵、土器溜などを検出した。前・中期の遺構はこれまで検出した例が少なく、今回の調査結果は鴨東の開発を考えるうえで基礎的な資料となるものであろう。火葬塚とは、火葬をおこなった地に方形の溝をめぐらせて造作した塚である。上部が削平されているとはいえ、火葬塚の全容を知る上で、この時期の遺構としては唯一の貴重な発掘資料でもあり、現地で保存することに決定された。この付近に比定されている「神楽岡吉田寺」と合わせて、平安時代の葬地のひとつであった神楽岡(吉田山)周辺の景観を復原するうえで、重要な構築物であることはいうまでもない(第 3 章)。遺物としては、AT27 区道路側溝出土の 9 世紀後葉の須恵器、BG32 区溝出土の 10 世紀後葉～11 世紀初頭の一括遺物が重要で、昭和 52 年度におこなった土器編年〔宇野 78〕に追加すべき資料である。後期の遺物は、ほとんどの調査で得ることができたが、AO18 区井戸出土の 7 個体の大甕が生産地との関係を示す良い資料である。すべて完形に復原可能で、そのうちわけは、常滑大甕 4 点、篋削り丸底の須恵質大甕 2 点、格子叩き須恵質大甕 1 点である。

以上のほかに、発掘調査の成果により、京都大学構内の遺構と六勝寺関係の遺構とを比較し、鴨東の景観形成についての研究をおこなった(岡田「京都大学構内遺跡と京・白河」本年報第 8 章)。また平安時代の文献資料と遺跡から鴨東の開発についての研究をおこなった(宇野「鴨東の開発」本年報第 9 章)。

鎌倉時代と室町時代 医学部遺跡 AO18 区で、鎌倉時代の建物、柵、井戸、土器溜、瓦溜と、室町時代の土壘状遺構、検出長 40m の溝、石段状の遺構、土坑、土器溜などを発掘した(第 2 章)。本部構内遺跡 AW28 区では鎌倉時代から室町時代に至る「白川道」路面とその北側に小川を検出した(第 6 章 3)。また、病院西構内電気管理設工事の立合調査(図版 1-63)で礫中の灰色シルトブロックから鎌倉前期頃の土器片を採集した。AO18 区の鎌倉時代の遺構と室町時代の遺構とは方位が異なっていて、京都大学構内の遺跡群の大別と、遺跡群の拡大、縮小を考察するために役立つ資料である(第 7・8 章)。遺物は AO18 区の土器溜と瓦溜から出土した一括遺物が、京都大学構内から出土した鎌倉・室町時代の土器と瓦の編年基準となる資料である。また備前焼Ⅲ期末のすり鉢が N 字状口縁の常滑甕や土師器へソ皿とともに出土している。備前焼Ⅰ・Ⅱ期の陶器も京都へ搬入されている可能性が

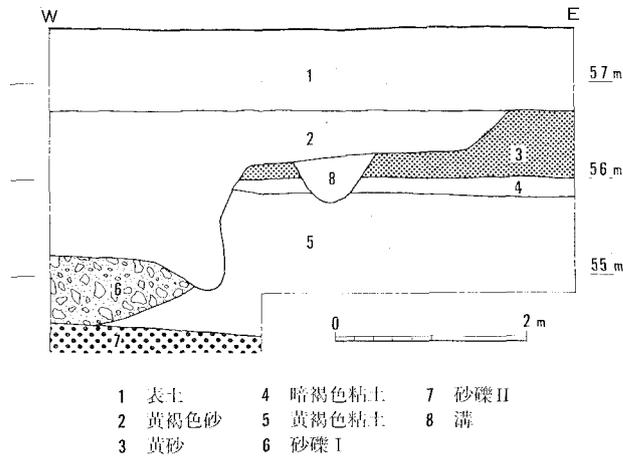
あり、各種陶磁器の生産地同定について再検討する必要がある。北部構内ガス管理設工事の立合調査(図版 1-61) BG36 区では室町後期の石仏 2 体と石卒塔婆 1 基が出土した。

江戸時代 北部構内で、水田耕土とそれに伴う柵や溝を検出した地点は、BG32 区北半、BG31 区西北部、BE29 区で、旧微高地上にある BG32 区南半と BG31 区東南部にはそのような堆積や遺構はなかった。BG31 区東南部では溝や土坑が検出され、水田とは異なった土地利用が推測できたが、明治 20 年測図の『京阪地方仮製 2 万分の 1 地形図京都』によると当地は茶畑だったことが判る。本部構内では、AT27 区で土坑と野壺、畑土を検出し、一方医学部構内では AO18 区で、水田耕土と柵と溝を検出した。遺物は、AT27 区の土坑と野壺出土の江戸末期から明治時代にかけての土師器と陶磁器が良好な資料である。

BE29 区、BG31 区では、水田を埋めて畑が作られたことが判ったが、その年代は明治・大正時代である。また環境保全センター予定地の試掘調査(第 6 章 4)では、金相学実験炉を置くためのレンガ造りの土台が出土した。花崗岩の切石で縁取りし、整然とレンガが敷きつめてあり、明治から大正にかけての仕事の緻密さが窺えた。

吉田キャンパス外の立合調査 京都府船井郡丹波町富田蒲生野所在の農学部附属高原牧場は、付近に 7 基よりなる蒲生野古墳群と古墳時代の散布地があったため、宿舎等新営工事の立合調査をおこなった。地表から 2.5m まで掘り下げたが、地表下に腐植土が厚く堆積し、以下砂礫層とシルト層が続き、遺物は発見できなかった。滋賀県高島郡高島町大字永田字大源 8 番地先所在の琵琶湖古環境実験施設は、付近に「伝三矢千軒」湖底遺跡や高島郡条里の遺跡があったため、施設新営工事の立合調査をおこなった。地表から 3.0m まで掘り下げたが、地表下 1.5m までコンクリート塊を含む盛土、それ以下には粘土、シルト、砂の堆積があり、これらの中からヨシ類などの植物遺体を多量に発見したが、遺物は出土しなかった。宇治市五ヶ庄所在の宇治地区は、北に二子塚古墳、南に瓦塚古墳と窯跡があったため、研究所実験棟新営工事の立合調査をおこなった。地表から 4.0m まで掘り下げたが、最下層が砂礫、その上に青灰色粘土、黒色粘質土が堆積していて遺物は出土しなかった。

地形 北部構内と本部構内と教養部構内には、独特の色調をした黄砂層が広く堆積している。この黄砂層が堆積を始めた年代は、北部構内と教養部の資料から弥生前期末とみて間違いはない。本年度の理学部遺跡 BE29 区の発掘調査で、この黄砂層上面から弥生中期前葉の方形周溝墓を検出した。したがって、黄砂層の堆積は旧河道周辺を除いて、弥生中期前葉頃に堆積を終えたと考えられることができる。さらに本部構内では、施設部給水センタ



第1図 施設部給水センター建物新営予定地の層位

再び段が作られる。現在、本部構内は東大路の路面より1.5~2.5m高いが、この段差は高野川の侵蝕による段を基礎に、江戸時代に造成されたものであって、本部構内には盛土がほとんどないことを明らかにできた。現地形で観察できる段もしくは急傾斜地は、北部構内西側と教養部構内中央に認めることができ、弥生時代以後に高野川の侵蝕がこのあたりまで及んでいたことを推測できる。

以上のように、縄文時代から近世、近代に至るまで、吉田キャンパス内には遺跡が存続していたという実体が、昨年度の調査結果よりもさらに明確にできたことは一つの大きな成果といえよう。このような成果をもとに、地形や植物遺体・花粉の分析結果と検出した遺構とを合わせて、それぞれの時代における人間の生活とこの土地とのかかわりを明らかにしていく必要がある。一方、吉田キャンパス外の遺跡との比較をおこない、他の地方との交流の変遷を研究する必要がある。とくに、縄文・弥生時代の琵琶湖西岸地方との交流については注意を要するであろう。平安時代以後の遺跡については、本年報の第2部で述べるように、鴨東の開発を平安京の展開の中に位置付ける視点から、遺跡を総体的に把握した。今後さらに緻密な検討を加えていく予定である。

〔注〕

- (1) 医学部遺跡 AO18 区については、昭和54年度におこなう予定の第2次調査と合わせて正式な報告書を作成する。
- (2) 真壁忠彦・真壁霞子両氏の御教示による。

一建物新営工事の立合調査(図版1-60)で、この弥生前・中期の黄砂層を切る旧河道とその攻撃面を検出した(第1図)。砂礫Iは高野川系の堆積であり、したがって、旧河道とは高野川であった可能性が強い。この侵蝕によって生じた段は徐々に埋まってなだらかになったが、江戸時代に人工的に

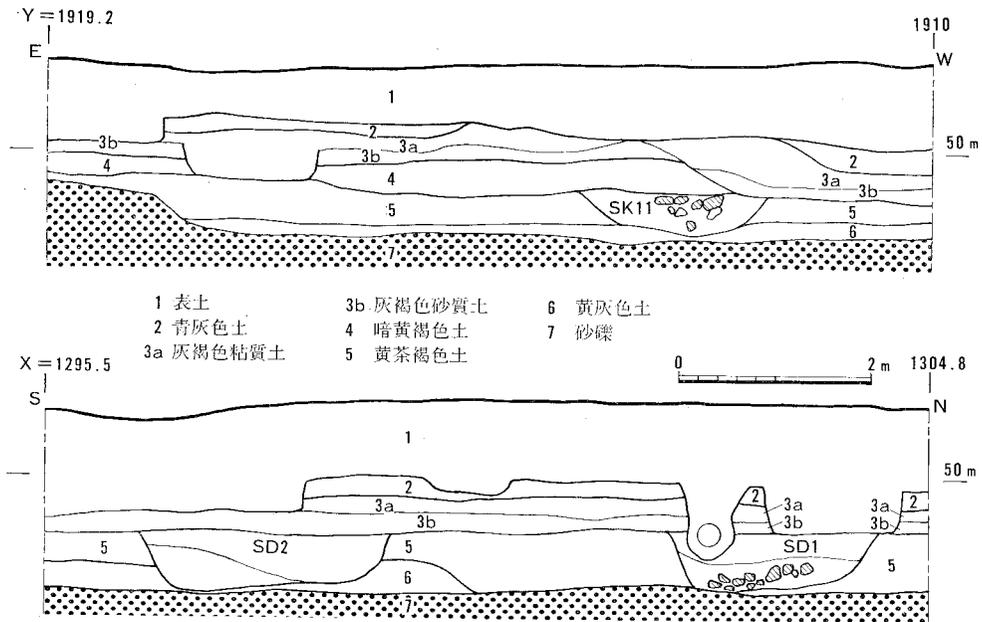
第2章 京大医学部遺跡 AO18 区の発掘調査

泉拓良 吉野治雄

京大教養部遺跡と京大病院遺跡の間に位置する医学部構内に、医学部基礎医学研究室実験室新営工事が計画されたため、昭和52年6月に遺跡確認の試掘調査をおこなった〔京大埋文研78a p. 17〕。その結果、中世の土壌と溝とを検出したので、新営予定地全域の発掘調査をおこなうこととなり、同年11月1日から調査を開始し昭和53年2月28日に現場作業を終了した。本調査地は旧薬学部研究室跡地約1,200m²で、鴨川乃至高野川と白川とが運んできた砂礫によって形成された扇状地上に立地する〔藤岡78〕。調査地域を構内地区割に基づいて、構内座標 $X=1,290, 1,300, 1,310$ の東西方向基準線と、 $Y=1,880, 1,890, 1,900, 1,910, 1,920$ の南北方向基準線とで21の小地区に区分し、発掘を進めた(図版1, 第3図)。表土、旧建物基礎および近世以後の耕土を機械によって掘削し、それ以下の堆積層を分層発掘した。全体の平面図は構内座標を割り付けて50分の1の図面を作成し、壁面層位と各遺構の詳細とはその性格に応じて5分の1から20分の1の図面を作成した。

1 層位

地表は標高50.8mで調査地全域でほとんど平坦である。地表から2m下の砂礫層まで7層に分層した(第2図)。基本的には上から、表土(第1層)、青灰色土(第2層)、灰褐色土(第3層)、暗黄褐色土(第4層)、黄茶褐色土(第5層)、黄灰色土(第6層)、砂礫(第7層)である。第1層は旧建物の基礎を含む現代層で、コンクリート基礎の下から栗石に転用した室町後期の石仏が約10体出土した。第2・3層は近世以後の水田耕土・床土層で、 $Y=1,915$ 付近で段をなして西へ下がる。第3層は粘質の上層(第3a層)と砂質の下層(第3b層)とに分けることができる。第4層は前述の段の高い部分すなわち調査地域の東半にあり、室町時代の遺物を包含する。西半では第3層の下ですぐ第5層が検出できた(第2図南壁の層位)。第5層は調査地域のほぼ全域に存在する土層である。上面は平坦であって、第6・7層の凹凸をならすように堆積しているため、砂礫層の高い東半では薄くなる。鎌倉時代の遺物をおもに包含する。第6層は砂礫層の凹地に堆積した土層で、土師器の小片を若干包含する。平安前期には遡らない。第7層は高野川系の砂礫層で、平安時代頃では、この地が加茂川と高野川の合流点より北に位置していたことがわかる〔藤岡78 p. 40〕。砂礫層の上面は $Y=1,918$ 付近で急傾斜をなすが、そのほかの所では緩やかな傾斜で西へ下



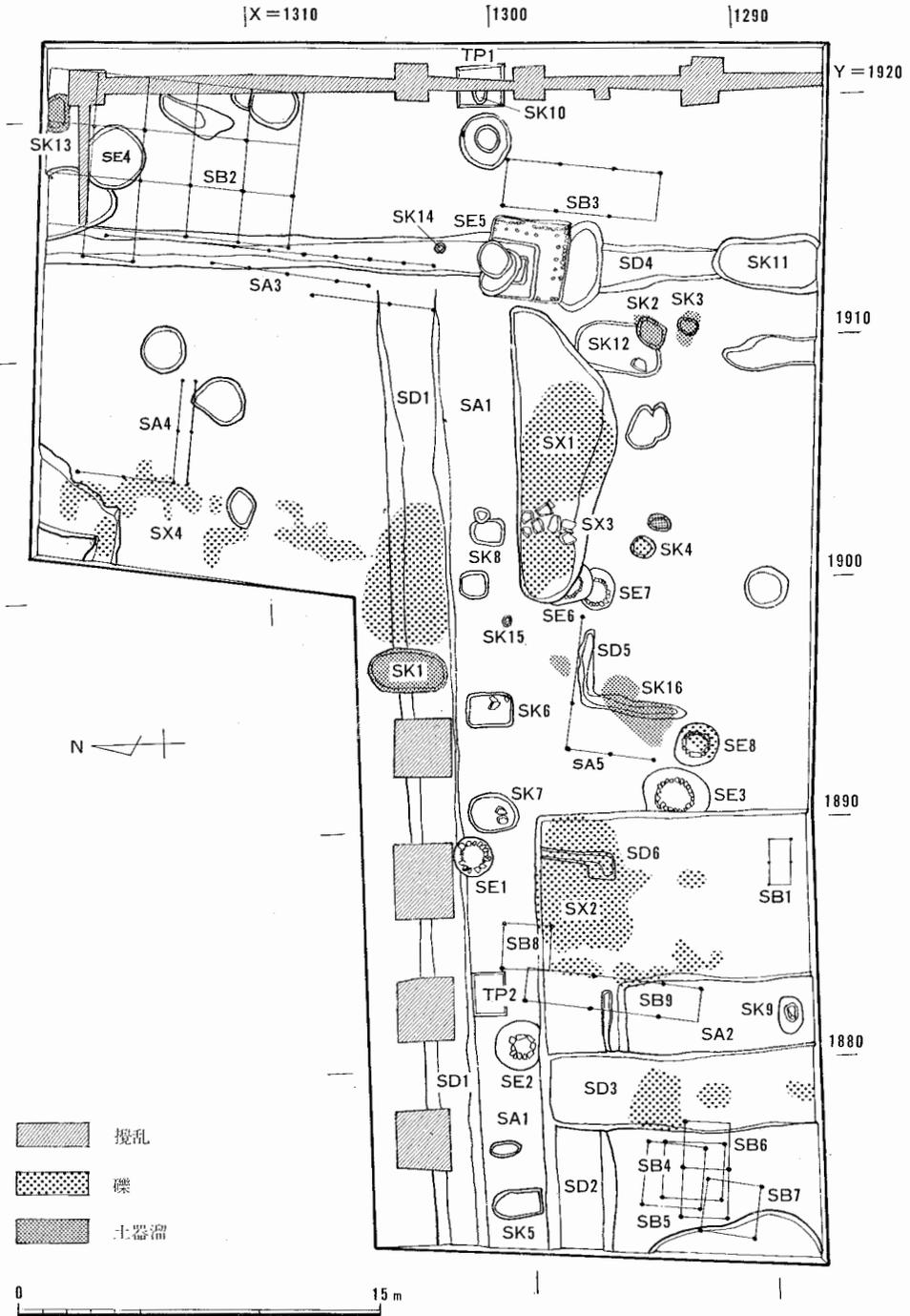
第2図 南壁(上)と西壁の層位

がる。砂礫層上面は高い所で49.7m、低い所で48.8mである。以上の層位のうち第4層は試掘調査の赤褐色土に、第5層は同じく黄褐色土に相当する。

2 遺構

検出したおもな遺構は、土壘状遺構(SA1・2)、柵(SA3~5)、建物(SB1~9)、溝(SD1~6)、井戸(SE1~8)、土坑・土器溜・瓦溜(SK1~16)、石段状遺構(SX3)、集石遺構(SX1・2・4)である。(図版2-1、第3図)。

平安末期~鎌倉前期の遺構は、SA4・5、SB4~9、SD5、SE6~8、SK16で、そのうち調査地域の中央にまとまっている井戸SE6~8、柵SA5、溝SD5、土器溜SK16は相互に関連する遺構である。鎌倉中期~後期の遺構は、SA3、SB2・3、SD4、SE4・5、SK12~15、SX4で、うち調査地域東部の柵SA3、建物SB2・3、井戸SE5は、方位を真北から東へ8°振るひとまとまりの遺構と考えている。室町前期の遺構は、SA1・2、SB1、SD1~3、SE2・3、SK5~11、SX1~3で、このうち土壘状遺構SA1・2、溝SD1~3、建物SB1、SA1・2の中央に並ぶ土坑SK5~9、石段状遺構SX3は方位を真北にするひとまとまりの遺構である。室町中期の遺構は、SE1、SK1~4で、この時期以後は近世の水田に伴う南北方向の柵以外に遺構を検出していない。以下遺構の種類ごとに概略を記す。



第3図 発掘区のおもな遺構

土塁状遺構 SA1 は幅 3 m、高さ 0.5 m、長さ 40 m 以上の土塁状遺構で、溝と掘り込みによって造り出されている。方位は真東西。Y=1,890 以東で南にひろがる壇に接続し、Y=1,900 以東で再び土塁状の遺構となっている(図版 2-2)。Y=1,910 より東には続かない。

SA2 も SA1 と同様の幅 3 m、高さ 0.5 m の土塁状の遺構で、方位は真南北。長さ 8 m までを確認している。

柵 SA3 は方位を真北から東へ 8° 振る 3 列の掘立柱列である。柱間は 1.4 m。3 列が同時に存在していたものではない。SB2 に伴う施設と推測できる。

SA4 は SX4 の下で検出した掘立柱の柵または建物で柱間は 1.9 m である。

建物 SB1 は径 0.15 m の礎石を伴う 1 間×2 間の建物で、柱間は 0.9 m。方位は真北である。

SB2 は径 0.2 m 前後の礎石を伴う東西 3 間の建物で、南北は 5 間まで確認し、建物の西側 1 間分の所に半間の張出しがある。柱間は 2.1 m。方位を真北から東へ 8° 振る。

SB3 は径 0.2 m 前後の礎石を伴う 1 間×3 間の SB2 と同様の建物。

SB4~SB7 は調査地域の西南隅に重複して検出した掘立柱の建物群である。方位を真北から東へ 5°~8° 振る。柱間は SB6・7 が 2.1 m で、SB4・5 は 2.4 m である。

SB8 は掘立柱の 1 間四方の建物で、SX2 の下で検出した。方位を真北から東へ 5° 振る。柱間は 1.9 m。

SB9 は掘立柱の 1 間×5 間の細長い建物で、方位を真北から 10° 東へ振る。梁間には 1.4 m または 1.6 m の柱間をもつ。

溝 SD1 は SA1 の北側を東西にはしる溝で、幅 3 m、深さ 0.5~0.8 m、長さは 40 m 以上である。Y=1,910 付近で溝の底が上がって終わる。SA1 側の南壁は垂直に近いが、北壁は崩れて緩やかな斜面をなす。その斜面に北側から投げ込まれたように径 0.2 m 前後の礫が集中している所が 2ヶ所ある(図版 2-2、第 3 図)。

SD2 は、SA1 の南側を東西にはしる溝で、溝の幅、深さ、方位は SD1 と同じである。Y=1,876 以西約 5 m まで検出した。

SD3 は SA1 に直交、SA2 に並行し、SD2 を切る南北の溝で、幅 3 m、深さ 0.5 m、SA1 を北端とし南へ 11.5 m まで検出した。方位は真北で SD1 と同様に土塁状遺構と反対の側から礫が投げ込まれている。

SD4 は幅 1.5 m、深さ 0.4 m の南北にはしる溝で、SA3 と SE5 に切られる。調査地域

の東半を区画している。方位を真北から東へ4°振る。

SD5はSK16の下で検出したL字形の溝。断面はV字形で方位はSD4と同じである。

井戸 SE1はSA1・SD1を切る掘形径1.5m、内径0.7mの円形石組井戸。井戸底は標高47.1m。石組は円筒形を呈する。

SE2はSA1に切られる掘形径2.0m、内径0.7mの円形石組井戸。井戸底の標高は47.6m。石組は検出面から1.2m下にあり、2乃至3段遺存していた。

SE3はSA1に連なる壇に切られる掘形径2.6m、内径0.9mの円形石組井戸。井戸底の標高は47.5m。石組は底のほうで少しすばまる。

SE4はSB2の礎石の下で検出した井戸で、構造はSE2と同じである。

SE5はSD7を切る井戸で1辺3.5mの正方形をなす。3段に掘り込んでいて、第1段の東壁と南壁に沿って石列がある。井戸底は標高48.0mである。

SE6はSE7を切る掘形径2.1m、内径1.0mの円形石組井戸。井戸底の標高は47.6m。石組は円筒形だが、底1段の枠石だけ横長の石を用いて方形に組む(図版3-1)。

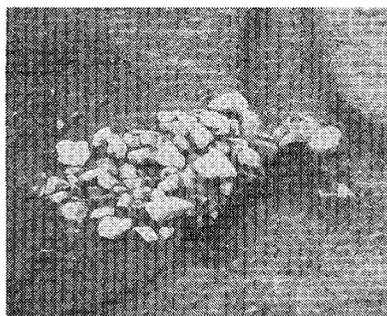
SE7は掘形径2.1m、内径1.0mの円形石組井戸。底の標高47.8m、石組は底のほうで少しすばまる。

SE8は掘形径1.7m、内径1.0mの円形石組井戸で、石組は底すばまりの朝顔形、底の標高は47.7mである。約7個体分の中世陶器の破片と礫とで井戸を埋め、その上に礫を積み上げている(図版3-2)。

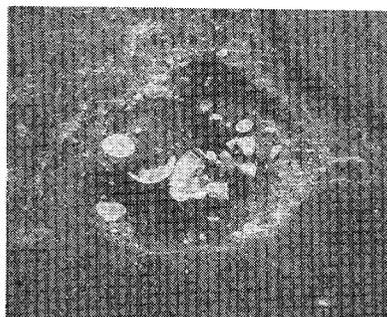
土坑 SK4は径0.9m、深さ0.2mの円形の土坑で、上部に集石をもつ(第4図)。土坑内から完形の瓦器土鍋と土師器皿が出土した(第5図)。

SK5～SK8はSA1の中軸上にある土坑で、SK5とSK6とは径0.5m前後の礎石様の石を伴う。両者の石を結び、その方位はSA1と同じになり、またこの南はSA1に連なる壇の部分にあたることから、土塁に伴う門の礎石の可能性がある。

SK11は長さ4.5m、深さ0.2mの平面が瓢箪形の土坑である。埋土に焼土や礫が多く、N字状



第4図 土坑SK4の上部集石



第5図 土坑SK4の遺物出土状況

口縁の甕 1 個体分が細片で出土した(図版 3-3)。2 つの土坑の重複かもしれない。

土器溜 SK1 は SD1 を切る長径 3.5 m、深さ 0.5 m の楕円形の土坑で、東肩ははっきりしない。多量の土師器皿と完形の軒丸瓦 1 点とが出土した。

SK2・SK3 は、当初掘形が判らず 1 個の土器溜と考えていたが、発掘の結果径約 1 m で深さ 0.2 m の不整形土坑 2 個であることを確認した。多量の土師器皿が出土したが、そのほかの種類の土器はほとんどない。

SK13 は長辺 1.5 m の長方形の土坑で、多量の土師器皿が出土した。

SK14・SK15 は直径 0.4 m、深さ 0.1~0.2 m の柱穴状の土坑で、土師器皿が出土したが、そのほかの種類の土器はまったく含まれていない(図版 3-4)。

SK16 は 3.5 m×1.5 m の不定形な土器溜で、掘形は検出できなかった。土器は主として土師器皿である(図版 4-1)。

瓦溜 SK12 は 3.5 m×2.0 m、深さ 0.5 m の長方形の土坑に、瓦をまとめて埋めた遺構である。土師器や礫はほとんど混じらない。一時期の瓦だけで構成されており、瓦が放棄されて間もないうちに埋めたものである(図版 4-2)。

集石遺構 SX1・SX2 は SA1 の南壁ぎわに集められた径 0.2 m 前後の礫群で、厚さは厚い所で 0.5 m を計る(図版 4-3)。

SX3 は径 0.5 m 前後の河原石を南から北へ少しずつ高くなるように並べた石段状の遺構で、北端の石は SA1 に接している(図版 4-4)。

SX4 は幅約 0.7 m の石敷で、南北方向に帯状にひろがる。

3 遺物

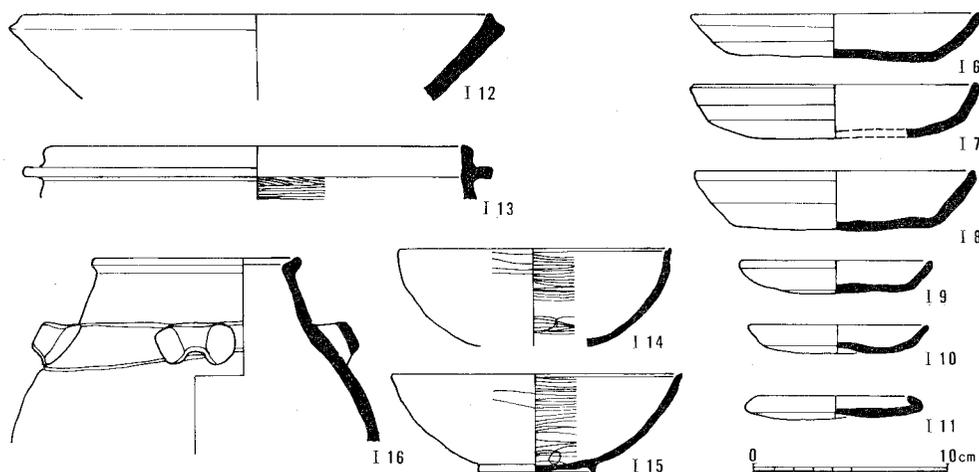
コンテナ 168 箱分の遺物が出土した。大量の完形品があり、現在もなお整理中であるため、このうち土器・陶磁器の主要なものを遺構別に、瓦は別にまとめて記述する。

SE8 中世陶器大甕 7 個、須恵器長頸壺 1 個、須恵質大平鉢 1 個、土師器皿細片少量が出土した(図版 5)。I1 は口径 29 cm、胴部最大径 48 cm、底径 15 cm、高さ 52 cm の常滑大甕である。口縁端部をやや上方につまみ出し、横撫でを施して面を作っている。器壁は赤紫色に発色し、口頸部と肩部に淡黄緑色の釉がかかる。I2 は口径 28 cm、胴部最大径 50 cm、底部径 15 cm、高さ 65 cm の大甕である。口縁端部は凸帯状に肥厚する。胴部全面に格子叩きを施し、口頸部の調整は横撫でによる。胴部と頸部の接合部内面を帯状に削る特徴がある。焼きは軟質で、器壁は淡褐色を呈す。器形と叩きと口縁部の肥厚とは香川県十瓶山窯の製品〔森・伊藤 71〕に類似している。I3 は口径 29 cm、胴部最大径 48 cm、高さ 62 cm の大甕で

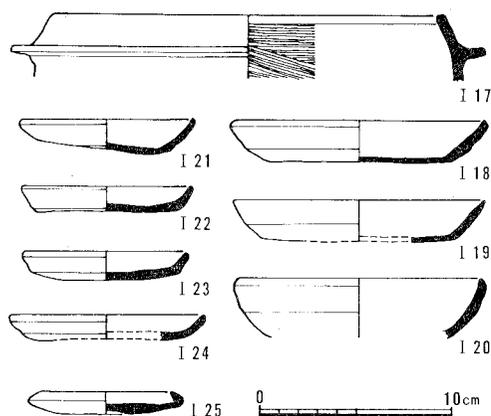
ある。底部は丸底で径約20cm。口縁端部はわずかに外反して薄くなる。調整は胴部外面が篋削り、内面が刷毛目である。胴部と底部の境に、胴部を削る時生じた粘土の残りが帯状に付着している。また胴部と頸部の接合部内面を帯状に削る特徴がある。色調は灰青色を呈す。I 4は口径30cm、胴部最大径44cm、高さ64cm、底部は丸底で径20cm。I 3と同じ産地の大甕である。I 3・4は本遺跡周辺では京都市常盤井殿町遺跡SK401〔同志社調査会78図版1〕に類例がある。そして口縁端部の形状は岡山県大内東山窯址出土品〔真壁66図1〕に、胴部と底部の境の特徴と、胴部と頸部内面を帯状に削る特徴とは岡山県大が池南窯址に類例がある。最も可能性のある生産地は、備前乃至その周辺と考えることができるが、今後更に検討を加える必要がある。I 5は口径約13cm、胴部最大径16cm、底部径9.5cm、高さ約25cmの須恵器の長頸壺である。肩の張りが弱く、胴部が直線的に底部につながる器形で、須恵器の長頸壺としては退化した形態をしている。

以上のほかに、常滑大甕3個と、口縁端部の肥厚しない須恵質大平鉢1個が出土している。常滑大甕と須恵質大平鉢は平安末期の特徴を示すものである。

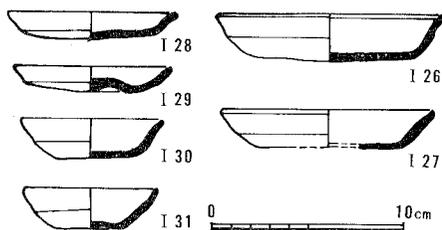
SK16 出土遺物の大部分は土師器皿で、ほかに瓦器、褐釉陶器も少量ある(第6図)。I 6~11は土師器皿で、I 6・7は口縁部外面に2段、I 8・9は1段の横撫でを施し、I 7~9は口縁端部に面取りをおこなう。I 6~8は口径約15cm、I 9~11は10cm弱である。I 6・9は淡褐色、I 7・8・10・11は明褐色である。I 12は口縁端部が体部に対して直角をなす須恵質大平鉢である。I 13は口縁部が直立し、水平な鏝がつく瓦器羽釜である。I 14・15は瓦器碗で、口径は約15cm、口縁内面に1条の凹線がある。体部内面に篋磨き、外面



第6図 土器溜 SK16 出土の土器



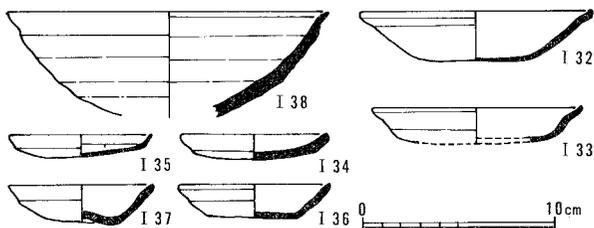
第7図 井戸 SE5 出土の土器



第8図 土器溜 SK14 出土の土器

縁部に水平に鑿がつく瓦器羽釜である。SK16 と比べて土師器皿全体の口径が小さくなり、口縁部1段横撫でと平底の底部が多くなる。平底が一般化することは、板状の台の上で製作することによるものであるが、この手法による板状圧痕は少なくとも平安後期に遡る。

SK14 土師器皿だけが出土した(第8図)。すべて口縁部1段横撫でを施す土師器皿で、I 26・27は口径約12cm、I 28・29は約9cm、I 30・31は約7cmである。I 26・27は口縁端部に面取りを施す。I 26~29は明褐色、I 30・31は白色である。I 30・31はいわゆるヘソ皿の初期の形態である。京都市常盤井殿町遺跡 SK305〔同志社調査会78第2図〕と同じ内



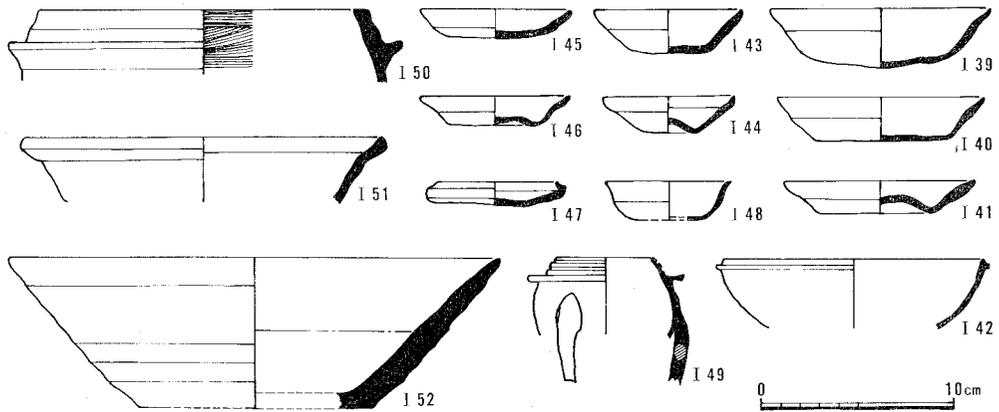
第9図 土坑 SK11 出土の土器

上部に粗い篋磨きを施す。I 15には見込み部分に粗い螺旋状の暗文があり、断面三角形の低い高台がつく。I 16は褐釉四耳壺で、口径11cm、内傾する頸部からつまみ出すように口縁部をつくる。頸部と胴部の境に2条の沈線がある。褐釉四耳壺をはじめとして、京大病院遺跡 AF14区暗灰色シルト出土遺物〔京大埋文研78a第12図〕よりやや新しい資料である。

SE5 土師器皿、瓦器羽釜が出土した(第7図)。I 18~25は土師器皿で、I 18~24は口縁部外面に1段の横撫でを施し、このうちI 19以外はすべて口縁端部に面取りをおこなう。I 18~20は口径約13cm、I 21~25は9cm弱である。I 19・21・22は淡褐色、I 18・23は明褐色、I 20・24・25は白色である。I 17は内傾する口

縁部である。

SK11 土師器皿、白磁碗、N字状口縁の常滑甕が出土した(第9図)。土師器皿はすべての口縁部に1段の横撫でを施す。I 32・33は口縁端



第10図 土器溜 SK2・SK3 出土の土器

部をつまみ上げ、I 36は面取りを施す。I 35は器壁が薄く底が平らで、I 37は底部中央が少し盛り上がる。I 33・34は明褐色、I 35は淡褐色、I 32・36・37は白色である。I 38は白磁碗で、体部はやや内彎ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。釉は底部を除く全面に施す。

SK2・SK3 土師器皿・碗、瓦器小碗・羽釜、陶器が出土した(第10図)。土師器皿はI 39~41が口径約11cm、I 43~47が7~8cmである。I 47を除き口縁部に1段の横撫でを施す。I 44は口縁部つまみ上げで、底部中央が大きく盛り上がる典型的なヘソ皿である。I 41・46は指押えによって体部が外反し、底部中央が盛り上がる。I 42は口径14cmの土師器の罌付鉢で白色を呈す。I 48は口径6.5cmの口縁部が外反する瓦器小碗で、体部内外面とも調整は横撫でである。I 49は瓦器羽釜のミニチュア、I 50は内傾する口縁部にやや上向きの罌がつく瓦器羽釜である。I 51は淡緑色の釉を内外面に施した瀬戸皿、I 52は体部下半に篋削りを施した猿投片口鉢である。京大病院遺跡出土の皿A₁₀類・B₁₀類〔宇野78〕時期の資料である。SK1では皿の口径に13.5cm、12cm、10cm、8cmの四種があり、また口縁端部をつまみ上げなくなる土師器皿が出土している。本遺構よりやや新しい。

瓦 軒瓦と平・丸瓦が多数出土した。ここでは軒瓦のうちおもなものを取り上げて記述する(図版6)。軒丸瓦は丸瓦部凸面と瓦当裏面の調整、瓦当裏面と丸瓦部の接合部の形態で分類できる。I 53は丸瓦部凸面に縄目の叩き痕、瓦当裏面には篋を押しつける時の指圧痕が明確に残り、接合部は鈍角をなしなだらかである。I 54は丸瓦部凸面に撫で調整を施すが縄目の叩き痕が若干残り、瓦当裏面は指圧痕を撫で消して、接合部は鈍角をなす。I 55は、丸瓦部凸面が削り、瓦当裏面は平滑で、接合部は削り取りによって直角をなす。軒平瓦は、平瓦部凹面と凸面の調整、瓦当顎部の幅で分類できる。I 56は、平瓦部凹

面と瓦当面に粗い布目、凸面は凹凸の残る粗い撫で、顎部の幅約 1.3cm である。I 57 は、平瓦部凹面と瓦当面に細かい布目、凸面は撫で、顎部の幅約 1.6cm である。I 59 は平瓦部凹面に細かい布目、凸面は削り、顎部の幅 1.9cm である。

I 53 と I 56 は対をなし、平安末期から鎌倉初期の中央官衙系瓦屋の製品である〔上原 78a p. 11〕。I 54 と I 57 は瓦溜 SK12 出土の瓦で、ほかに同様の技法をもつ中房に「卍」字文を置く蓮華文軒丸瓦や唐草文軒平瓦がある。法性寺出土例〔浪貝 77〕や建仁寺出土例からみて鎌倉時代である〔京大調査会 77 p. 34〕。I 55 と I 58 は、胎土と焼成からみて対をなすものである。珠文帯のある菊花文は四天王寺に類例がある〔文化庁 76 p. 63〕。出土した遺構の年代からみて、室町前期の瓦であろう。以上の軒瓦の変遷は文様も含め漸次的なものであり、中央官衙系瓦窯が規模を縮小しながらも、室町前期まで存続していた可能性を示している。

4 小 結

今回の調査で、完形の土器が数多く出土したが、その多くは土師器皿である。土師器皿を中心に遺構出土の一括遺物を考察し、おおよその編年を考えた。SE8 と SK16 を平安末期～鎌倉前期、SE5 を鎌倉中期、SK14 を鎌倉後期、SK11 を室町前期、SK2・3 を室町中期と考えている。これらの一括遺物は、鴨東での鎌倉時代と室町時代の資料として貴重であり、院政期におこなわれた川東の開発が、中世に展開する様相を知るうえでの基礎資料となる。この年代の把握によって、今回の調査で出土した遺構が室町前期を境として方位を変えることが判った。室町前期と江戸時代の遺構は真北をさすのに対し、鎌倉後期以前の遺構は方位を真北から東へ約 8° 振る。院政期の開発地域内にある京大病院遺跡のほとんどの遺構はほぼ真北をさし、北白川扇状地上の京大農学部遺跡の遺構は方位を真北から東へ振る。したがって、本遺跡での方位の変化は、個別の遺跡の問題より、鴨東開発すなわち、平安京とその周辺との関係の問題として理解できるであろう(第 8 章参照)。

個別の遺構に関しては井戸と土坑について考察した。井戸底の標高が、平安末期～鎌倉前期は約 47.7m、鎌倉中・後期約 47.5m、室町中期は約 47.1m と低くなり、徐々にではあるが地下水位が低下したことが判る。墓と考えている遺構は、室町前期の SK11 から室町中期の SK4 という変化、土器溜も平安後期の SK16、鎌倉後期の SK14・15、室町中期の SK1～3 という変化が考えられるが、今後の比較検討が必要である。

なお、瓦について京都大学大学院考古学専攻上原真人氏から御教示をいただいた。

第3章 京大理学部遺跡 BE29 区の発掘調査

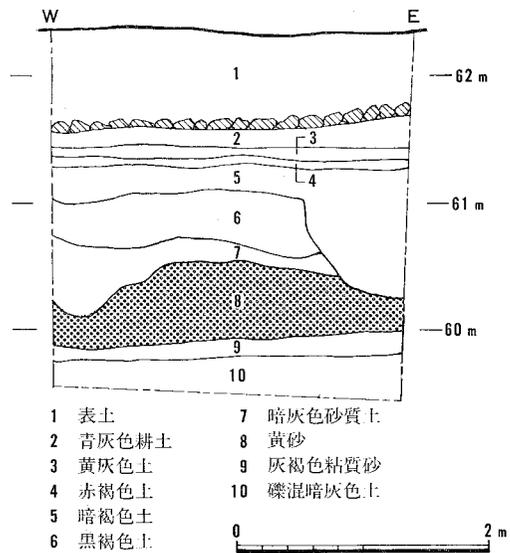
岡田保良 吉野治雄

1 遺跡の立地と調査経過

本調査は、理学部合同建物の新宮に先立つ事前調査である(図版1-54)。昨年度、建物予定地内に5ヶ所の試掘坑(TP1~5)を設けて試掘調査をおこなった。その結果TP4において、地表下1.5m以下に堆積する黄砂層をはさんで、その上には平安時代から鎌倉時代の溝状遺構を、黄砂層の下には、わずかながら縄文土器を包含する粘質土層を検出した(第11図)。他の試掘坑でも同様の層序であった。取り壊す予定の宇宙物理学教室棟は地階をもつため、その部分の遺跡調査は必要がないとみなし、地球物理学・数学教室棟との間の空地のみ発掘調査を実施することになったものである。

この土地は、大正6年に京都大学に施入されたもので、現在は平坦地で標高62.4m前後をはかるが、元来白川扇状地の末端で、微高地が最も西に張り出した部分にあたる。従前の調査では、北部構内における奈良時代以降の遺構として、BG36区における平安後期の瓦溜(京大埋文研78b)、BE33区で発掘された東西溝(京大調査会77)などがあり、先史時代遺跡のうち、大正12年に浜田耕作が発見した縄文時代遺跡はBF32区に〔梅原23、島田24〕、昭和48年に発見の縄文後期の配石遺構〔中村74a、泉77〕はBD35区にあたる。このように北部構内における主要な調査は、その中央部から東にかけて多く実施されているが、西半では、遺跡の様相を十分に把握できてはいなかった。ただ本調査地点の南約200mのBA30区で、黄砂層の下から弥生前期の土器が比較的まとまって出土したことがあり(図版1-6)〔中村・石田72〕、東50mほどの農学部総合館建設工事中にも弥生前期とみられる土器の底部が2点ばかり採集されたことがあった(図版1-4、第31図)。

今回の調査は、予定面積が501m²、

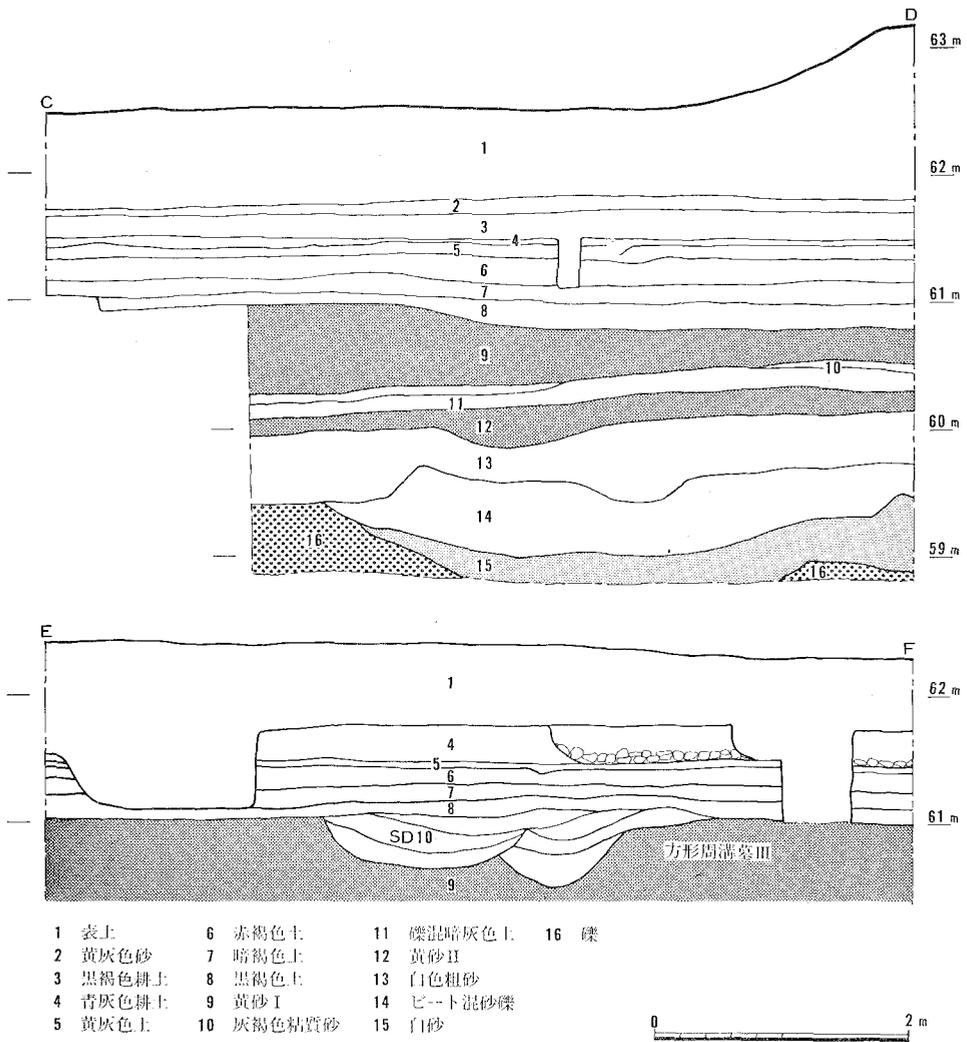


第11図 TP4 北壁の層位

7月中に表土掘削および基準点設置作業を終え、8月1日より発掘作業を開始した。第2検出面の遺構発掘を終えた8月下旬の時点で、火葬塚と推定される遺構について、当センターはその重要性をみとめ、保存処置をとるよう大学当局に要請した。関係部局ではこれを受け、予定していた建築計画を大幅に変更し、縮小面積分を別に建設することによって本遺構をそのまま保存するという結論に達した。ただし保存の対象となる225㎡を除く周囲については調査を継続し、発掘作業がほぼ終了した9月29日には現地説明会を開催した。そののち遺構を穿孔ビニールシートで覆って砂を入れ、10月7日、現場作業を完了した。

2 層位

発掘区西壁北部(CD間)と南壁東部(EF間)の層位を図示する(第12図)。現地表面は標高62.4m前後ではほぼ平坦であるが、西北端のみ高い盛土部分にかかり、0.6mほどの段がある。第2層とした黄灰色砂は、大正6年にこの土地が京都大学に施入された直後の整地のために入れられたもので、これより上を表土とした。第3・第4層は耕作土で、前者は畑作、後者は水田耕作に伴う土である。幕末から明治維新にかけて、土佐山内藩京屋敷がこの地にあり、水田から畑作への転換はその時期を介してのものと思われる。機械力による掘削はこの第4層までとし、以下を分層発掘した。第5層(黄褐色土)は、水田の床土となっていた土層で、近世初期の客土と考えている。第6層(赤褐色土)は室町時代中頃、第7層(暗褐色土)は室町時代初め頃の堆積であるが、ともに平安時代の遺物も多数出土する。第8層(黒褐色土)は黄砂(第9層)の上のり、黄砂の高いところでは厚みがなく灰褐色を呈し、凹地では暗黒色を呈する。出土する遺物は、9世紀を中心とする平安前期のものが多い。火葬塚はこの上面において検出した。第9層は、白川水系の氾濫による砂層で、北部構内から本部構内にかけて広く堆積し、遺物は含まない。弥生中期の方形周溝墓が、この層を掘りこんで営まれている。第8層と第9層との間には大きな年代差があり、平安時代の初め頃にこの地がかなり削平されたと考えている。第10層、第11層はやや粘質を帯びた土層で、縄文後・晩期の土器小片が若干出土した。したがって、第9層の黄砂の堆積が、縄文晩期から弥生中期までのものであることは確実で、しかもすでに述べたように、付近の黄砂直下からは畿内第Ⅰ様式(新)の弥生土器が出土しており、かつ今回発掘した方形周溝墓に供献された弥生土器が第Ⅲ様式までは降らないことから、この黄砂層は弥生前期末から中期初めというごく短期間の氾濫による堆積である可能性が強い。第12層は黄砂で、第9層と同質のものである。第13層は粒子の粗い白砂、第14層は黒色有機成分の付着した礫、第15層は白色の粗砂または細砂、第16層はこぶし大の礫が多い砂礫である。

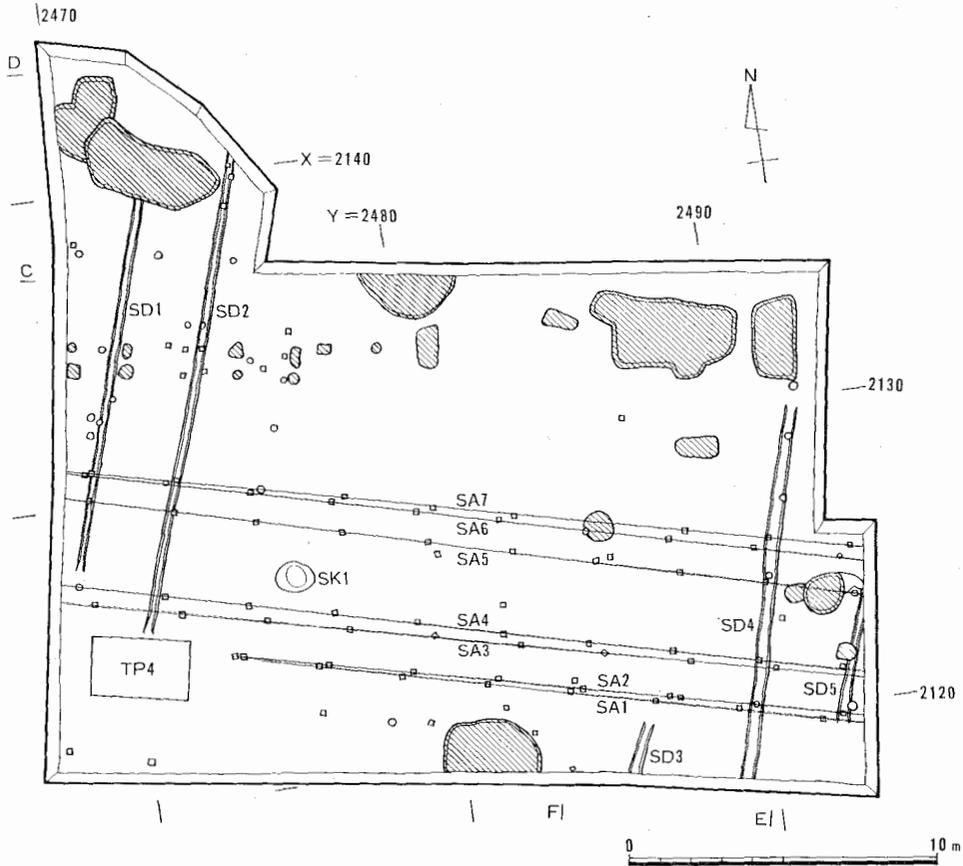


第12図 西壁(上)と南壁の層位

第14層までは著しく磨滅した縄文土器片を出土している。

3 遺構

第1検出面の遺構 SA1~7は第3層の耕土に伴う柵である。1辺0.2~0.25mの方形の掘形に丸太を立てて柱とし、これを2.73~2.79mの間隔で東西方向に1列に並べたものである。方位は真北から14°~15°東に振る。SA1とSA2, SA3とSA4, SA6とSA7はそれぞれ立て替えたものと思われる。これらより北にも同様の遺構が存在した痕跡があるが、攪乱を受けた部分が多く、列として確認できるものはなかった。京大病院遺跡AE



第13図 第1検出面の遺構（斜線部分は近現代擾乱）

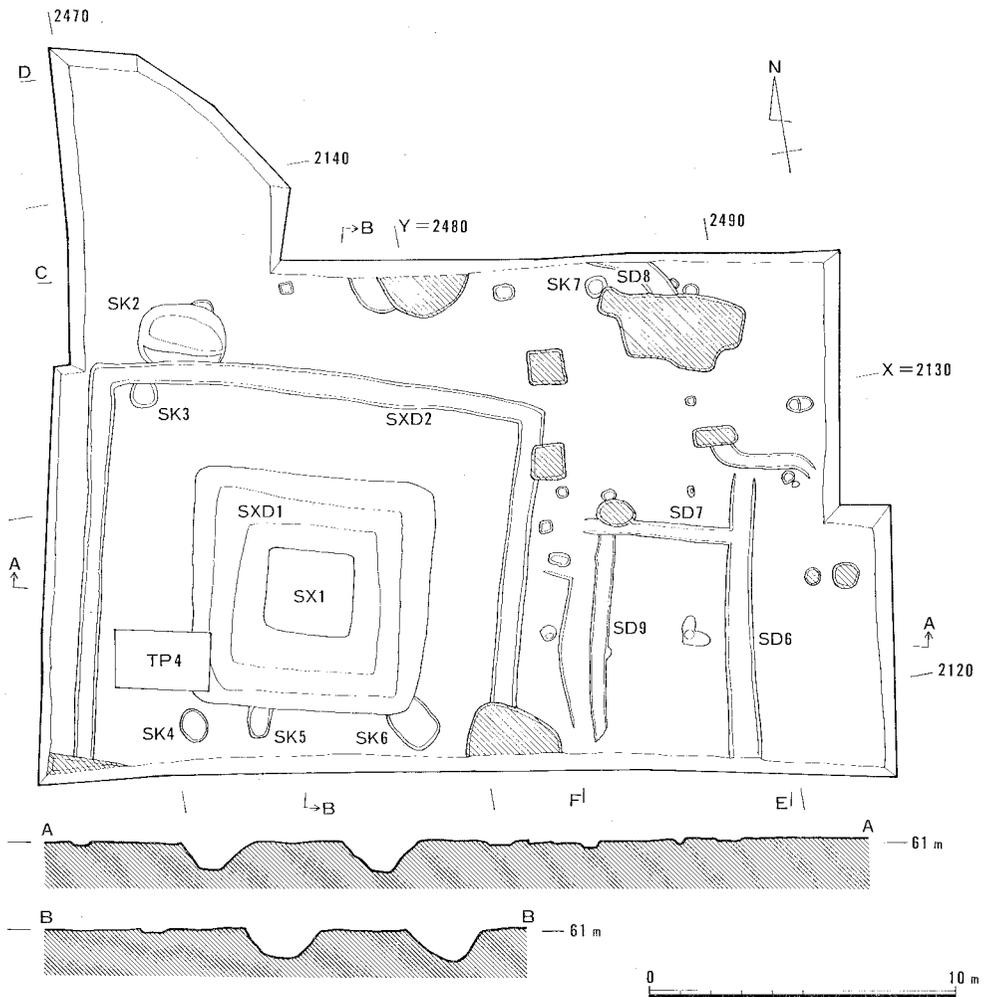
15区, AF14区, AH17区などでも同様の遺構を発掘しており〔京大調査会77, 京大埋文研78a〕, 明治初期に吉田山周辺に同種の農業が展開していたことを物語る。

SD1~5は, 幅0.3m, 深さ0.1m前後で方位を同じくする小溝群である。SD1とSD2, SD4とSD5はそれぞれ間隔2.6~2.8mで平行し, 対になる。埋土は第5層と類似し, 近世初期の遺構と考えている。性格はよくわからないが, 対になることから, これらを側溝とする里道があった可能性がある。



第14図 土坑SK1の断面

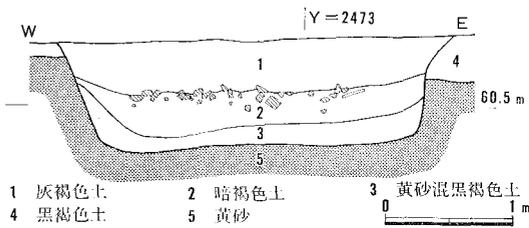
SK1は, 投げ込まれた礫が小さなマウンドを呈する土坑で, 第6層を発掘する過程で検出した。土師器, 陶器, 瓦器などの小片のほか, 平安後期の軒平瓦1点が出土した。第6層が堆積する直前の室野時代半ばに掘られたものと考



第15図 第2・第3検出面の遺構（平面図の斜線部分は近現代攪乱）

えている(第14図)。

第2検出面の遺構 第8層黒褐色土上面では、溝⁽¹⁾SXD1とSXD2とからなる方形遺構SX1のほか、土坑SK2～6、溝SD6～8を検出した(第15図)。SX1は、幅0.8m、深さ0.2mの外溝SXD2が方形にめぐり、その内側中央に幅2.4m、深さ0.9～1.0mの内溝SXD1を掘ることによって、正四角錐台状の土壇を造り出している。平面形は正方形を基本とし、軸方向は真北に対して約15°東へ振る。外溝はその南辺が既設建物によって破壊されて確認できないが、1辺約15m四方の区域を画する。内溝はその外辺が1辺7.8mの正方形をなし、中央の土壇は基底面では4.8m四方、上面で3.0m四方をはかる。遺



第16図 土坑 SK2 の断面

構の上面は第8層が全面に露呈して
いて、ここに何らかの施設があつた
という痕跡は発見していない。元来
は土壇上に若干のマウンドを有して
いたものと考えたい。もっとも基底
部からの遞減の度合からみてあまり

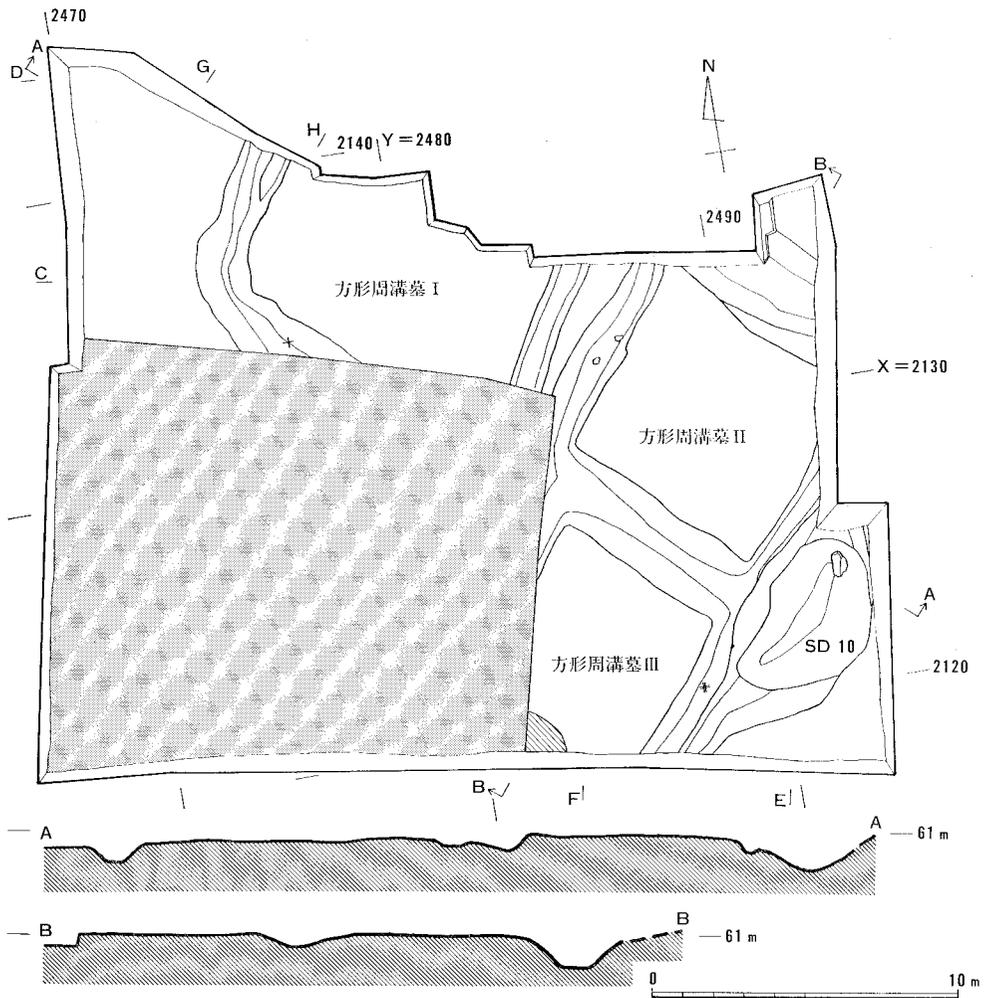
高いものではなかつたであろう。内溝の埋土は少なくとも2層に分けることができ、一度埋まった後に掘りなおされた可能性がある。上層からは鎌倉・室町時代の遺物を多く出土し、下層は平安末から鎌倉時代にかけての遺物が中心で、平安中期以前に遡る土器類も含む。出土遺物から良好な資料は得られなかつたが、遺構の年代は、平安末から鎌倉時代にかかる頃に築造され、室町時代初め頃まではその形状をとどめていたと考えている。その性格については類推の域を出るものではないが、後節で考察するように、その形態的特色から貴人の火葬所跡に営まれた「火葬塚」ではないかと考えている。なお SXD2 を完掘するため、発掘区の西端を若干拡張した。

SK2 は、SX1 の北辺に沿う土坑である。東西方向に 3.1m の長径をもち、2 段に掘られていて、北半では深さ 0.8m をはかる。南側を SXD2 に切られるが、北半の深い掘り込みは SXD2 に平行しており、SX1 が築かれた後に SK2 を設けたとみるべきで、SXD2 より早く埋められたと考える。中位の深さにうすく礫を詰めており、人為的にこの土坑を埋めたとみる。したがって墓塚である可能性がある(第16図)。

SK3~6 のうち SK4 を除いて他は SX1 の溝に切られる。いずれも 0.2~0.3m の深さでほとんど遺物もなく、性格はよくわからない。

SD6~8 は上記遺構群とは年代を異にする溝である。いずれも深さ 0.05~0.1m と浅い。このあたりは黒褐色土の堆積がごくすいため、SX1 などと同面で検出できたが、出土した遺物は、土師器、黒色土器、緑釉陶器、須恵器など、9~10世紀を中心とする平安時代前半の特徴を示すものである。

第3 検出面の遺構 SX1 を発掘した状態のまま保存することになったため、その範囲を除いて第8層を掘り下げ、黄砂上面で検出した溝 SD9 および SK7 ほかの小穴群である(第15図)。SD9 は、西側に浅い段をもち、幅 0.5m に対して、深さは 0.3m 前後を有する溝である。SD6 などと年代的に差のない頃の溝である。小穴群も同年代と考えられ、なかでも SK7 は、内部に2個の河原石を置いて柱の礎石としていたようで、平安前期にはここ

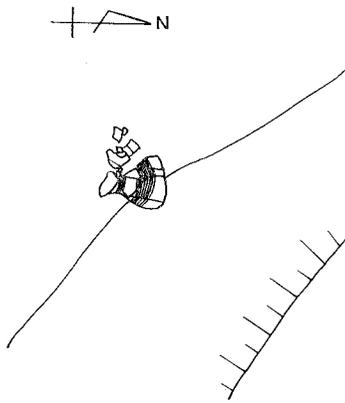


第17図 第3検出面の弥生時代遺構

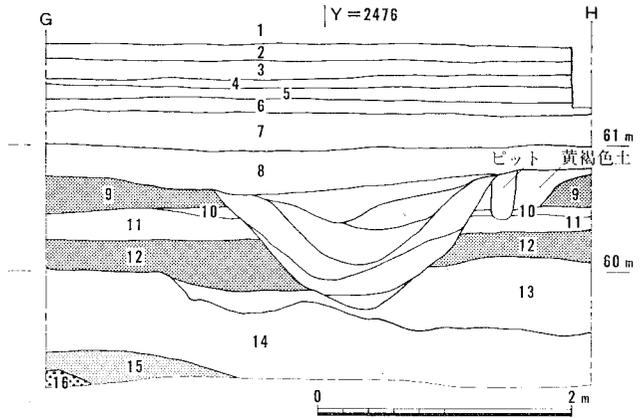
に建物が存在したことを窺わせる。SD6~9の溝もそうした建物に伴うものと考えている。

弥生時代遺構 黄砂上面において、発掘区の東北隅、東南隅およびSK2の北側で、黒色土の堆積する落ち込みを検出し、この溝状遺構を追うことによって、3基の方形周溝墓と溝SD10を発掘した(第17図)。さらにSX1の溝底面や壁面の観察によって、少なくとももう1基の方形周溝墓Ⅳの存在を確認している。ただし、いずれの方形周溝墓においても、主体部、封土を確認することはできなかった。

方形周溝墓Ⅰは、西辺から南辺にかけては幅1.7m、深さ0.5~0.8m、東辺では幅1.0m、深さ0.2~0.3mとやや小規模な周溝をもち、東西内径は9.5mをはかる。埋土は西、南辺



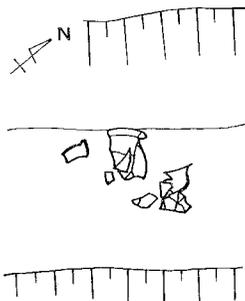
第18図 方形周溝墓Ⅰの土器
出土状況(1/30)



第19図 北壁にみる方形周溝墓Ⅰの西辺断面
(層位番号は第12図参照)

では上層が黒色土、下層が灰褐色乃至黄灰色の砂質土で、東辺では腐植質がわずかに混じる黄灰色砂である。西南隅やや東寄りの周溝内(第17図×印)より、溝底面から20cmほど浮いた状態で、供献土器とみられる1個体分の壺形土器が出土した(第18図, 第22図Ⅱ9)。また、西辺周溝の上層からは奈良時代~平安前期の土師器, 須恵器片が出土しており, 当時周溝部分がわずかながらも凹地として痕跡をとどめていたと考えざるをえない。

方形周溝墓Ⅱは, Ⅰの東に平行してとなりあい, 南辺の幅2.2m, 深さ0.4~0.8mの周溝を, 周溝墓Ⅲと共有する。台状部は1辺6.5~7.0mをはかる。周溝の埋土は, 西, 南, 東ともに, ベースとなる黄砂とあまり差のない黄灰色砂が堆積する。ところが北辺周溝のみ, 幅3.0m, 深さ0.8~1.0mと規模も大きく, 埋土上層が黒色土で, わずかながら黒色土器や須恵器片を出土する。周溝墓Ⅰの西辺と同様, 凹地として長く痕跡をとどめていたのであろう。なお, この深い溝の北東側では, 黄砂が急に高まっており, 発掘区全体が平安時代初頭に削平を受けたことを示唆する。



第20図 方形周溝墓Ⅲの土器
出土状況(1/30)

方形周溝墓Ⅲは, 北辺周溝をⅡと共有し, 東辺周溝の東肩を溝SD10によって切りとられる。また西辺周溝の大部分はSX1にかかり, 南辺周溝は調査区外または攪乱のためほとんど発掘できない。東辺周溝内(第17図×印)より底面に接して甕形土器1個体が出土した(第20図, 第22図Ⅱ10)。

溝SD10は, 方形周溝墓Ⅱ・Ⅲの東辺に並行して掘られて

いる。発掘区内ではその特殊な部分にあたるようで、長さ5.5mにわたって幅が4mとひろがり、深さが1.1~1.3mにも達する大きな落ち込みを有する。その埋没時期が他の周溝よりも降ることは切りあい関係からも認められるし、出土した土器様式にも若干新しい要素がある。この西北にならぶ周溝墓群を他地域と画するような意味をもつ可能性もある。周溝墓Ⅱの北辺の溝にもそうした意味があるのかもしれない。SD10の埋土もまた上層では平安前期の遺物を出土する黒色土の堆積をみる。

4 遺物

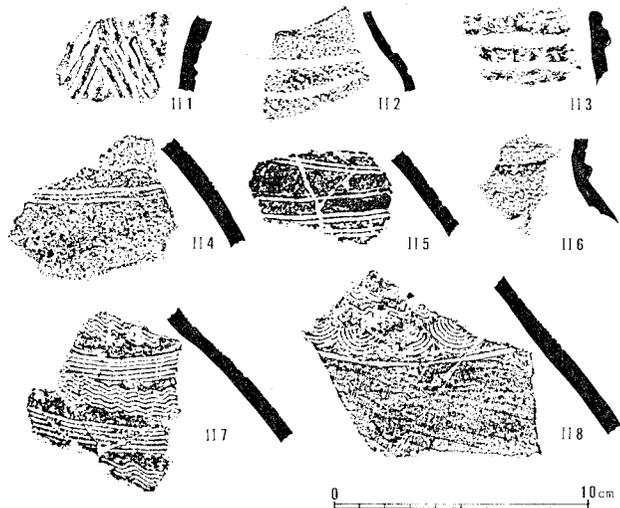
今回の調査によって出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、中・近世陶磁器、鉄製品、銭貨などがある。溝SXD1や土坑SK1からは遺物が比較的まとまって出土したが、いずれも遺構の年代観と照応できるような一括性に乏しい。こうした状況は北部構内の遺跡にしばしば見うけられる。そのため、ここでは出土遺物を種類別に記述する。なお各遺物が出土した層位または遺構については、第1表にまとめて掲載した。

縄文土器(第21図) おもに第9層黄砂より下から出土したが、深く掘り込まれた溝や小坑からも出土しており、10数片採集した(Ⅱ1~3)。いずれも破片が小さい上に磨滅がはげしいため、時期や文様を認定し難いものが多い。それらのなかで、Ⅱ1は半載竹管で多条に施文しており、中期の船元Ⅲ式に属する深鉢形土器である。Ⅱ2は2本の沈線の下に縄文を施す浅鉢形土器とみられ、京大植物園遺跡出土の類例(中村74)からみて後期前葉のものであろう。Ⅱ3は口縁下方に刻み目凸帯をもつ晩期末の甕で、北部構内で出土の多い土器である。

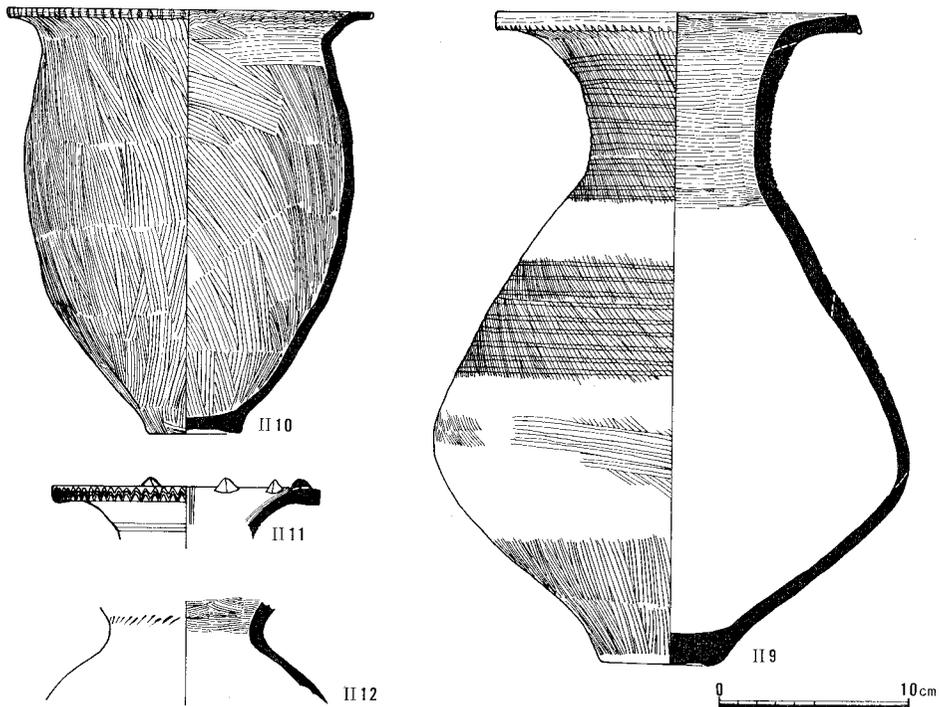
弥生土器(第21・22図)

方形周溝墓Ⅰ・Ⅲそれぞれに供献されたと考えられる完形品2点のほか、10数点が出土した。

Ⅱ9は周溝墓Ⅰに供献された広口の壺である。口縁は強く外反し、胴部はゆるくソロ

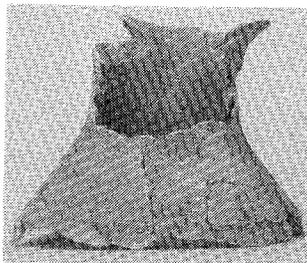


第21図 縄文土器と弥生土器



第22図 弥生土器

バン玉状に張り出して、やや下位に最大径をもつ。器高34.5cm，口径19.0cm，胴部最大径25.2cmをはかる。明褐色の肌を呈し，胎土には砂粒が多く焼成はややもろい。少なくとも3ヶ所の擬口縁状の継ぎ目を確認している。継ぎ目はすべて内面下がりになる特徴がある(第23図)。外面全面には斜位または縦位の，内面では頸部以上に横位の粗い刷毛目を有し，口縁下端にはその原体による刻みを施す。頸部と胴部それぞれに，半載竹管による直線文を描いた後，文様帯の間と胴部の張り出し部分を研磨して仕上げる。頸部に12条，胴部に9

第23図 弥生土器Ⅱ9の
頸部擬口縁

条描かれた半載竹管文は，いずれも3条ずつ同時に描いており，3本の「半載竹管をその幅より広い間隔をおいて束ねた形状の櫛」を用いたことがわかる(第24図)。こうした原体は，佐原真によると，三河地方では中期後半にひろく使用されるというが，京都府深草遺跡〔杉原・大塚61〕，滋賀県大中之湖南遺跡〔佐原68〕の土器では，第Ⅱ様式段階で同様の文様を認めうる。全体の形状や口縁部のつくりは，滋賀県南滋賀遺跡出土の壺形土器の一群〔大津市教委58〕に類似する

が、器壁や底部が比較的厚いことや、文様帯を頸部と胴部に描きわける点など、弥生中期でも古い段階の要素が強い土器とみるべきであろう。小片であるが同じ周溝内出土のⅡ4も、中期前葉とみてさしつかえない。

Ⅱ10は、周溝墓Ⅲに供献された甕である。器高22.5cm、口径19.3cm、胴部最大径17.5cmをはかる。器壁内外面ともに全面に縦方向の粗い刷毛目をつけ、胎土は砂

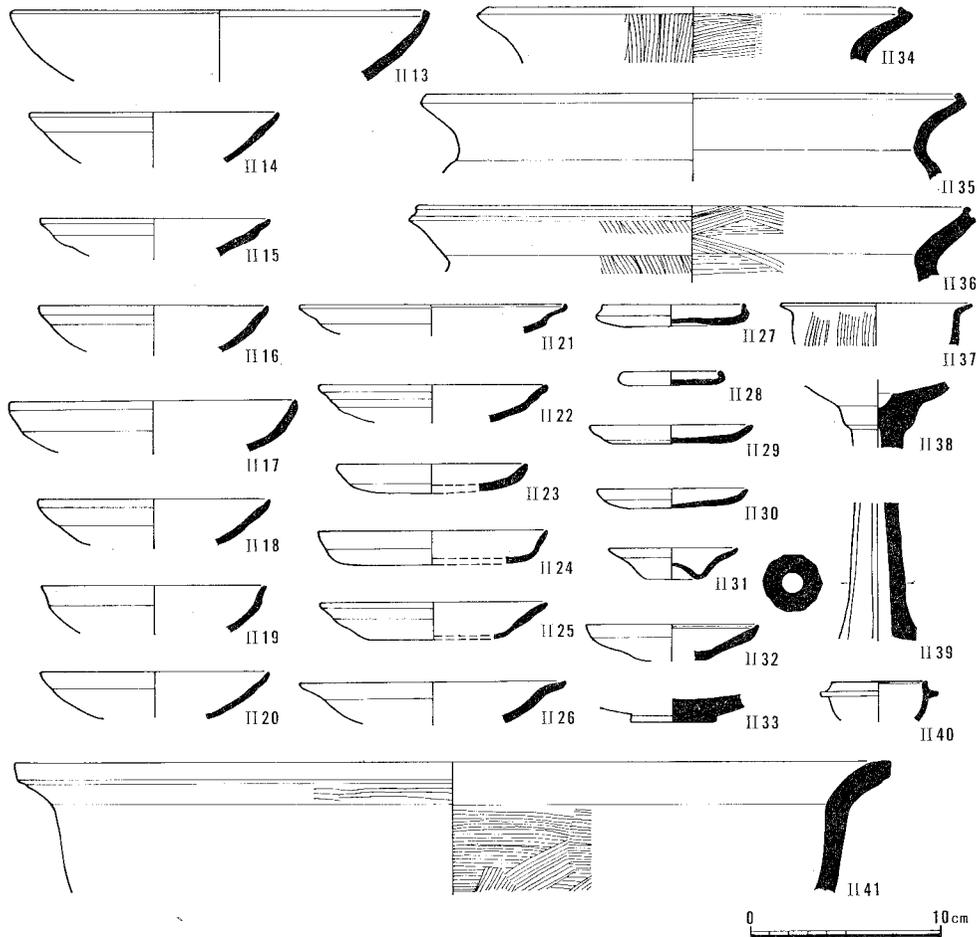
粒が多く、焼成は堅緻である。外面にはススが全面に付着する。畿内およびその周辺地域の第Ⅱ様式に通有の形態といえるが、刷毛目原体によって口縁端に刻みを施した上、口縁内側の刷毛目を波状に描くのは、深草遺跡出土の甕に多く、元来琵琶湖地方で近江型の器形とともに装飾的要素として多用された手法である〔佐原60〕。

その他の弥生土器(Ⅱ5～8・11・12)はすべて溝SD10から出土した。甕の破片はない。Ⅱ5、Ⅱ8はともに刷毛目をとどめず、施文原体として壺Ⅱ9と同種の束ねた半載竹管を用いてそれぞれ直線文と波状文を描いているが、Ⅱ8では同時に通常の櫛による扇状文と篋描き沈線を施しており、より新しい要素とみなしうる。Ⅱ6は頸部下端に凸帯をめぐらし、胴部に櫛描波状文を施す。畿内周辺地域では第Ⅲ様式の壺にしばしばみることができ、琵琶湖地方第Ⅴ様式の壺に、独自の一群として存在することは注意すべきであろう〔佐原68〕。Ⅱ11にみる口縁部の瘤状突起は琵琶湖地方では第Ⅱ様式ですでにみることができ、内面にまで櫛描文を施す点は第Ⅱ様式以降の要素とみる。Ⅱ12は頸部に篋による列点を配するのみで、第Ⅴ様式まで降るものかもしれない。このように、溝SD10から出土した弥生土器の一群は、方形周溝墓Ⅰ・Ⅲ出土の完形品よりも新しく、中期中頃以降を中心として、ある程度の幅をもつ年代が与えられよう。

土師器(第25図) 平安前期以降の蓋、杯、皿、高杯、甕を出土した。Ⅱ14～20・26は杯または深い器形の皿、Ⅱ21～25、Ⅱ27～33は浅い器形または小型の皿である。Ⅱ14は明赤褐色を呈し、焼成良好な杯。内面を撫でにより、外面を篋削りによって調整する。小坑SK7から黒色土器Ⅱ42と伴出した。Ⅱ15は外面に指押えの痕をとどめ、内面及び口縁部を撫でる。口縁部にかえりをもつ薄手の皿Ⅱ21、口縁部を2段に撫でて外反させる皿Ⅱ22とともに溝SD9から出土した。Ⅱ16～18は白っぽい焼成で、口縁部を2段に撫で、上段は面取りぎみになる。Ⅱ19は口縁部を外反させ、体部との境に稜をもつ。赤焼きで胎土は砂質に富む。Ⅱ20は薄手の白焼きで見込みに圈線をもつ。Ⅱ26は厚手の赤焼きで口縁部外



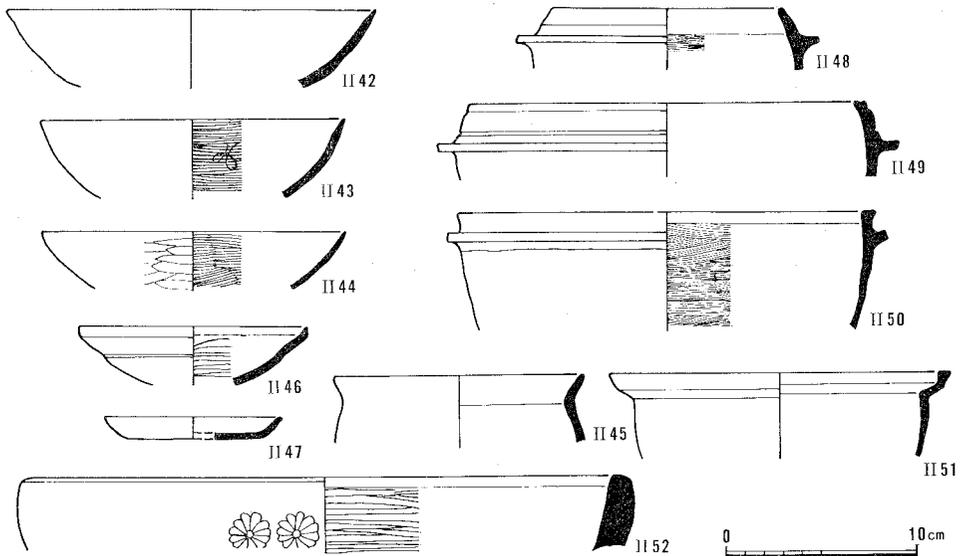
第24図 弥生土器Ⅱ9の胴部文様(1/3)



第25図 土 師 器

面を強く撫でて外反させ、端部をつまむように撫でてわずかに内にかえりをもたせる。II 23は小型ながら口縁部を2段に撫でる。II 24は薄手で灰褐色を呈し、口縁端に灯芯の痕跡をとどめる。II 25は口縁部1段の撫での下に指押えの痕をみせる。II 27・28はともに受皿の形状で白焼きである。II 29・30は口縁の立ちあがりわずかな小皿で、II 29は灰白色、II 30は灰褐色を呈する。II 31は第6層赤褐色土から出土した唯一の完形品で、この堆積年代を示すと考えている。土器を反時計まわりに回転させて成形した痕が明瞭である。II 32は厚手で口縁端にわずかにかえりをもつ小皿である。内面は丁寧に撫で、明褐色を呈する。II 33は糸切り高台のつく皿であるが、仕上げは粗い。

その他の土師器のうち、II 13は平安宮跡の出土例からみて、つまみのつく蓋になるよう



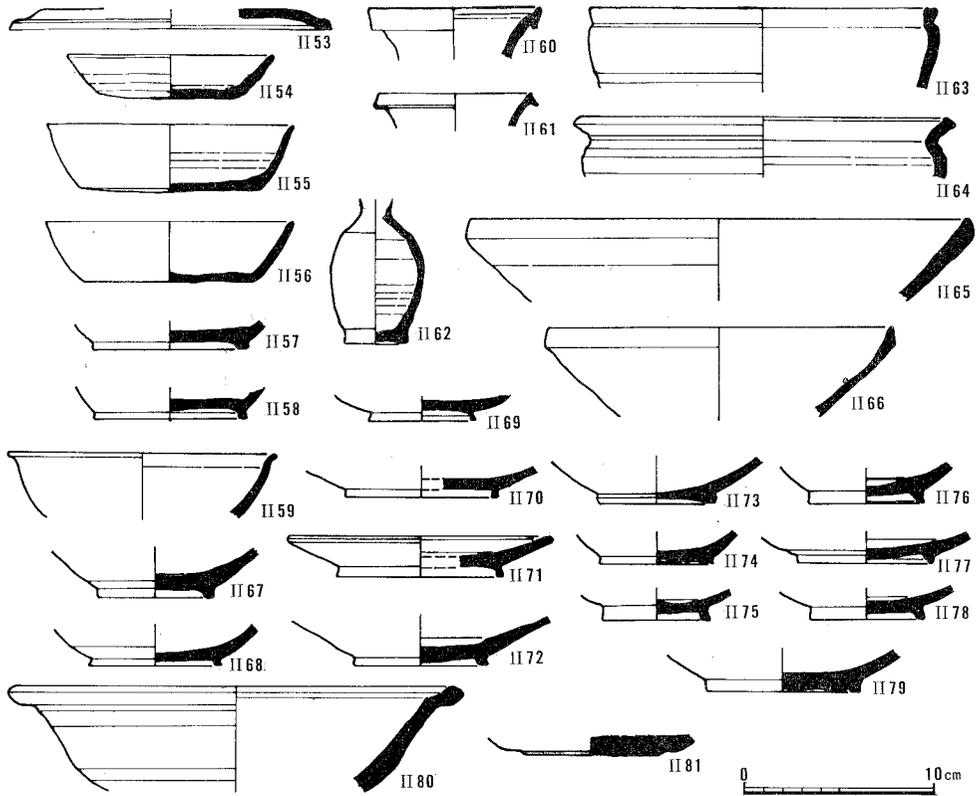
第26図 黒色土器と瓦器

である〔京文研78図版5-39, 図版37-80~83〕。II 38・39は高杯の一部であるが、いずれも成形は粗雑である。II 34は粗い刷毛目をとどめる甕の口縁部、II 35はその刷毛目を丁寧に撫で消したとみられる製品である。II 36・41はII 34と同様の粗い刷毛目をもつが、II 41は胎土中に砂粒を含む厚手の製品で、甕とよぶほど深い器形を考えない方がよい。須恵器杯II 55・56と重なりあって出土した。II 36も器形は判然としない。II 37はこれらのミニチュアというべきであろうか。溝SD6から出土しており、平安中期を降らない製品である。一方II 40は白焼きの羽釜のミニチュアで、II 31などと同時期の製品であろう。

以上の土師器にあえて年代を与えるとすれば、II 14・41を9世紀代におき、溝SD9出土の皿II 15・21・22を10世紀代に、甕II 34~36を9~10世紀頃と考える。さらにII 16~18, II 23は鎌倉中期まで、それ以外は鎌倉後期から室町中期にかけての遺物と考えている。

黒色土器(第26図) II 42は外面篋削り、内面には炭素を吸着させるが磨きの痕はとどめない椀。II 43は外面篋削りのあと口縁部は指撫でによって調整し、内外面に篋磨きを施す椀。内面にはループ状の暗文を加える。II 44は椀または杯。外面篋削り、内面には篋磨きを施し口縁に沿ってかすかに沈線のみとめる。II 45も内面だけ黒色で磨きを施すが、外面は篋削りの痕を若干撫でて仕上げた小壺である。

瓦器(第26図) II 46は体部外面下半は未調整であるが上半を横撫で、口縁端部を面取りし、内面には篋磨きを施す。杯となる器形であろうか。II 47はSK2において羽釜II 50



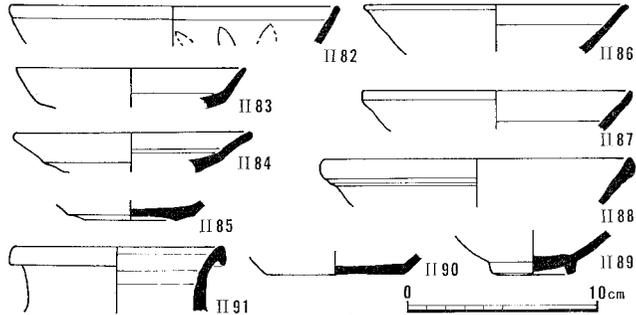
第27図 須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，中世陶器

と共伴した小皿。土師器の器形を模したものであろう。II 48は口縁部が短く内傾する羽釜。口縁内外面を指撫でによって調整する。II 49は口縁部がわずかに内彎し，外面に2ヶ所の段をもつ羽釜。口縁端面，鏝端面ともに凹線状に面をとる。II 50は短く直立する口縁をもつ羽釜。口縁部外面と端面を撫でる。II 51は土鍋。II 52は内面に磨きの痕跡をとどめ，外面は撫で調整したあと菊印花を陰刻する。中世にひろく使用された火舎であろう。

須恵器・須恵質陶器(第27図) 蓋II 53，平底の杯A II 54~56，高台のある杯B II 57・58，壺口縁部II 60・61，瓶子II 62，鉢II 63・64は平安前期から中期にかけての製品で，碗II 59もこの時期のものとしたい。II 55・56は第8層から重なるようにして出土したが，II 55はやや軟質で明灰色を呈し，II 56はよく焼きしまっていて暗青灰色を呈する。II 63・64は，平城宮跡で最近提示された甕Cの糸譜をひく器種かもしれない〔奈文研78別表6〕。

II 65・66は播磨東部で生産された大平鉢で，鎌倉前期頃の製品と考えている。ともに片口をつける器種である。

灰釉陶器・灰釉系陶器(第27図) II 67・68は椀, II 69~72は皿である。II 68・69は内面のみ施釉し, II 70は内面とは異なるが, 外面にもごく薄い釉をみとめる。II 67・71は無釉であるが, 胎土や高台のつくりからみ



第28図 輸入磁器

て一群の灰釉陶器とみなしうる。II 80は内面と外面体部上半に灰釉を施す鉢である。胎土も緻密で, 体部下方の成形を篋削りによる手法など, 灰釉陶器の系譜をひくことは明らかであるが, 年代は定め難い。II 81は糸切りによる底部をもつ瀬戸のおろし皿。室町時代まで下がる製品であろう。

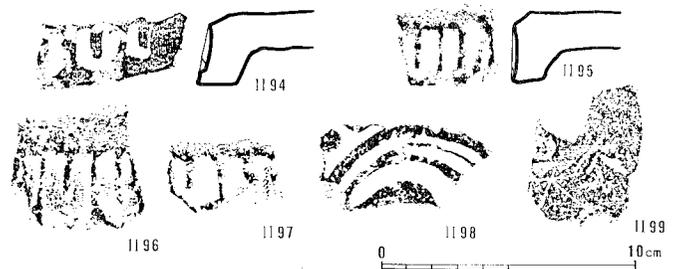
緑釉陶器(第27図) II 73~76は椀, II 77~79は皿。高台はすべて削り出しにより, II 79のみ蛇の目高台をもつ。II 73は焼成のあまい土師質, II 76は焼成良好な土師質, 他は須恵質である。発色はII 73が淡黄緑色, II 77も同様だがむらがある。II 74は暗緑色, II 75・79はごく淡い灰緑色, II 76は濃い緑色を呈する。

輸入磁器(第28図) 青磁椀II 82, 青磁皿II 83~85, 白磁椀II 86~89, 白磁皿II 90, 白磁壺II 91のほか青白磁の椀や壺の破片も出土している。青磁のうちII 82・83は竜泉窯系の製品で, II 82は内面に蓮弁を片彫りする。II 84・85は同安窯系で, II 84は見込みに櫛によるジグザグ文様を施す。

白磁椀のうちII 89は見込の釉を輪状にかきとっている。

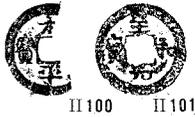


出土した輸入磁器類は, 土師器などでは室町時代にまで降る遺物が多いのに対し, 平安時代末から鎌倉時代に限定できるようである。



第29図 瓦

瓦(第29図) 出土量



第30図 銭貨

はあまり多くなく、ほとんど小片であるが、軒丸瓦2点、軒平瓦6点を含む。II92~98はすべて中央官衙系瓦屋の製品で、唐草文軒平瓦II92は平安前期、他は平安後期である。唐草文軒平瓦II93は京大病院遺跡や尊勝寺、円勝寺に同文品がある12世紀前葉の製品である〔上原78〕。II94~98は12世紀後半から13世紀にかけて生産されたとみられる剣頭文軒平瓦である。すべて折り曲げ技法により、瓦当上部に横位の篋削りを施す。II96では瓦当裏面に縄叩き目をとどめるが、他は撫でにより調整する。軒丸瓦では巴文のII98のほか蓮華文とみられる小片が出土した。

II99は丸瓦玉縁の破片で凸面の側面近くに「大」字を鋭利な工具で刻みつけている。京大農学部遺跡でも同じ場所に同様の刻字をもつ例がある〔京大調査会77〕。

その他の遺物 銭貨としては、太平通宝、至和元宝の各1点のほか判読不能の2点が出土した(第30図)。初鑄は各々976年、1055年でともに北宋銭であるが出土層位は室町時代である。

鉄製品としては釘が10点前後出土したほか、溝SD10上層の黒褐色土から刀子1点を得た。平安前期以前の製品である。

これらのほか、粘板岩製の砥石を数片採集している。

5 考察

今回の調査による、火葬塚と考えている特殊な遺構や、弥生中期の方形周溝墓群が埋もれていたことの発見は、予想外の大きな成果であり、構内に包蔵される遺跡群に対する認識を一新させるものであった。ここでは、本遺跡における弥生時代遺構の形成に関する問題と、方形遺構SX1を火葬塚と判ずるに至った経緯について考察する。

(1) 弥生時代遺構群の形成について

本章の冒頭ですでに触れたように、北部構内では弥生前期末直後に、白川水系の氾濫によってひろく黄砂が堆積し、北白川一帯の扇状地にみられた微高地と後背低地という起伏はなだらかな地形に変貌する〔泉78〕。この氾濫の下限を示す資料は、今回の発掘調査の前には6~7世紀の須恵器を得ていた程度であるが、本調査によって確実に弥生中期前葉には黄砂の堆積が沈静化したことが明らかになった。そして氾濫の上限を示す資料は、追分地蔵遺跡〔石田・中村72〕をはじめ北部構内各所で採集されている。第31図に掲載する壺形土器底部は、本調査区と道路を隔てて隣接する地点から出土した弥生前期の資料である。

1は赤褐色を呈し、2は淡灰褐色を呈するが、ともに粗い刷毛目をとどめる同様のつくり

でよく焼きしまっている。

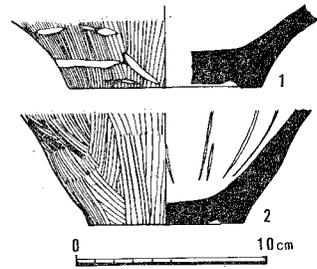
さて、本遺跡における周溝墓群は、白川水系の氾濫が沈静してほどなく営まれた。周溝墓Ⅱ・Ⅲはそれぞれ1辺の周溝を共有しており、同時的な設営かほとんど年代差のないものとみてよい。これに対して、周溝墓Ⅰは、他とは独立しており、これらの前後関係を考えねばならないが、供献土器に壺と甕との相違があって、その年代

差を論じるのは難しい。一方、溝SD10は明らかに周溝墓Ⅱ・Ⅲよりは新しい時期に埋没したとみてよい。また、周溝墓Ⅱの北辺周溝は、他の3辺の周溝に比して規模が大きく、しかも北東側では急に黄砂が高くなる事実は、これ以北に周溝墓が存在しない可能性を示唆する。したがって、溝SD10と周溝墓Ⅱの北辺の溝が、周溝墓群の立地境界となる可能性が強い。さらに、周溝墓Ⅰの西側には、墓が営まれた形跡はないが、南へは未発掘の周溝墓Ⅳの西辺が南へ延長することを観察している。以上の点から、当地に営まれた周溝墓群は、ごく緩い斜面ではあるが、等高線に直交して2列構成をなし、北へは続かないが、南へはさらに連なるものと考えられる。ただし、いずれの列が先行するかは、現段階では断じ得ない。

ところで、構内はもちろん、北白川一帯で今日まで弥生中期の遺跡は発見されていない。同時期で最も近い遺跡は、伏見区深草遺跡であり、後期まで降れば、岡崎遺跡がま近い。いずれも、畿内より琵琶湖地方や伊勢湾地方とのつながりが深い遺跡である。本遺跡出土の土器も少量とはいえ、やはり同様である。今後、周溝墓を営んだ時代の人々の集落、生活遺跡の発見をまちたい。

(2) 火葬塚遺構SX1について

SX1は、内溝SXD1と外溝SXD2とから成り、二重の構成でしかも正方形平面をなす。かつては中央に封土状のマウンドを有していたと考えられるが、他に付属する施設を何らもたない。このような形態をもつ遺跡が発掘された例は今のところ知られていない。ただ火葬墓や火葬址とされる遺跡には、方形の形態や周溝をもつ例があり、類似する要素を見出すことができる。なかでも石櫃をのせる基壇状遺構が方形である岡山県唐臼火葬墳墓(奈良時代)(橋崎67)、6m×5.3mの範囲を溝で画して中央に火葬壇を設けた三重県東庄内B遺跡火葬址(鎌倉時代)(三重県文化財連盟ほか70)、矩形の溝を有する基壇状の封土があって埋葬施設をもたないという熊本県尾窪遺跡墳墓群中央の遺構(鎌倉～室町時代)(隈



第31図 BE30区出土の土器

・野田編73], 高さ1m の方形土壇にのる「八尺四方ノ堂」に五輪塔を安置する奈良県大神家骨堂(室町時代)[伊藤68]などが特筆される。

一般に火葬墓が営まれる場合、火葬場所と埋葬地とは必ずしも同じではなく、いずれにせよ、墓所となるのは火葬骨を納めた所である。一方、必ずしも納骨されない火葬所の跡地に構えを設けて後世に伝えようとする例が、文献上少なからず現われる。後一条天皇の葬送記事⁽³⁾をはじめ、堀川・近衛天皇らの葬礼に際して、貴所とよばれる火葬所の跡地には、あらためて塚を築いたのである。これらは所謂陵墓や火葬墓と区別して「火葬塚」と称している。当時の葬礼次第を記した「吉事略儀」⁽⁴⁾によれば、その形態は「貴所荒垣鳥居等ヲ壊シ。御近辺ノ無縁寺ニ之ヲ分チ。鋤ヲ採リ土ヲ覆フ。其後墓ヲ築ク。石率都婆ヲ立テ。釘貫ヲ立廻シテ松ヲ植エ。四面ニ溝ヲ掘ル。」というものであった。福山敏男はこの書を「天皇・上皇または女院后宮の葬礼次第を箇条書きにし」たもので「十二世紀後半に作られたものと思われる」[福山69]としている。箇条書きの条々は、前掲の源経頼の記録にかかる「類從雜例」中の記事に負う所が多い。その後一条院葬送の記事によると「件ノ山作所ノ體頗ル先例ニ違フト雖モ。寛弘八年ノ例ニ依リ行フ所云々」とあるから、1011年一条天皇崩御の例に倣いながらも当時としては異例の厚葬であった。それが「吉事略儀」としてまとめられる頃には、身分を限るとはいえ、定式化したものになっていたと考える。

今日、上記天皇らの火葬塚に比定されている古墓は、規模の点で外溝の1辺が20~30mに及んでかなり大きい⁽⁶⁾が、形態的には本遺構 SX1 と相似形である。単なる火葬址や火葬墓の類例のみでは理解の及ばない本遺構の形態こそ、貴所跡に造り出される火葬塚固有のものともみなしたい。

しかも、北白川周辺は、古来無常の地であり、10世紀から14世紀にかけて、陽成天皇、村上天皇中宮安子、後一条天皇、後高倉天皇、後二条天皇など貴人たちの葬礼の舞台となったことも少なくない(第9章参照)。葬送儀礼といえば、『小右記』にいう「吉田卒堵婆供養所」と同一視される「神楽岡吉田寺」の存在が想起される[杉山54, 川上77]。この吉田寺は、貞元2(927)年に天台座主良源が舍利会を修めたという寺院で、杉山は『権記』にいう「吉田社北三丁内有葬送之處」にあてている。北部構内出土の瓦は、今回の調査地をはじめ、BE33区[京大調査会77]、BG36区[京大埋文研78b]など、平安後期の製品が多数をしめるが、BD33区では平安中期の瓦もまとまって出土しており[中村73]、吉田寺をこのあたりに比定することに無理はない。後一条天皇の遺骨が浄土寺に、堀河天皇らの遺骨が香隆寺にそれぞれ一時安置されたように、北白川における葬礼に吉田寺も関与していた可能性

は十分にある。北白川に比定される寺院は他にもあり、天暦3(949)年、陽成院の遺骸を冷泉院から移したという円覚寺⁽⁷⁾や、久寿2(1155)年、故北政所(藤原忠通母)を仁和寺近くの生蓮寺から改葬する墓所⁽⁸⁾にあてた寂楽寺はいずれも神楽岡の東乃至北東にあるとみられ⁽⁹⁾、北白川において葬礼に関係した寺院である。

こうした周辺遺跡の状況や北白川における葬礼が盛んであった時代を重ね合わせて考えると、火葬塚 SX1 から出土する遺物により新しい時代のものがかなり含まれていたとしても、遺構出現の上限は、鎌倉初期をあまり降るものではないと判断でき、その性格についても十分首肯しうるわけである。

〔注〕

- (1) 一遺構を構成する要素となる溝であるので SXD と表記して他と区別する。
- (2) 後述の弥生時代遺構は、検出面を同じくするが、繁雑をさけるため別に第17図をおこした。
- (3) 『類従雑例』長元2年5月19日の条。
- (4) 『中右記』嘉承2(1107)年7月25日の条、『兵範記』久寿2(1155)年8月2日の条。
- (5) 『群書類従』第拾八輯雑部所収。
- (6) 宮内庁所蔵にかかる旧帝室林野局測量図を参照。
- (7) 『日本紀略』天暦3年9月29日～同10月3日の条々。
- (8) 『兵範記』久寿2年5月18日～同20日の条々。
- (9) 位置については杉山信三がある程度考定している〔杉山55, 57〕。

第1表 理学部遺跡 BF29 区出土遺物対照表

遺物番号	器 種	出土層位, 遺構	本 文	実測図	写 真	備 考
縄文土器						
Ⅱ 1	深 鉢	第11層	25頁	第21図	図版12	船元Ⅲ式
2	浅 鉢	第15層	//	//	—	
3	甕	周溝墓Ⅱ北周溝下層	//	//	図版12	
弥生土器						
Ⅱ 4	壺	周溝墓Ⅰ西周溝下層	27頁	第21図	—	
5	//	SD10 上層	//	//	—	
6	//	SD10 下層	//	//	図版12	
7	//	SD10 下層	//	//	—	
8	//	SD10 上層	//	//	—	

遺物番号	器種	出土層位, 遺構	本文	実測図	写真	備考
Ⅱ 9	壺	周溝墓Ⅰ南周溝下層	25頁	第22図	図版12	周溝墓Ⅰの供献土器
10	甕	周溝墓Ⅲ東周溝	27	〃	〃	周溝墓Ⅲの供献土器
11	壺	SD10 下層	〃	〃	〃	
12	〃	SD10 上層	〃	〃	〃	
土 師 器						
Ⅱ13	蓋	SD6	28頁	第25図	—	
14	杯	SK7	27	〃	—	Ⅱ 42と共伴
15	皿	SD9	〃	〃	—	
16	〃	第6～7層	〃	〃	—	
17	〃	SXD1 下層	〃	〃	—	
18	〃	SK2 下層	〃	〃	—	
19	〃	第6層	〃	〃	—	
20	〃	SXD1 下層	〃	〃	—	
21	〃	SD9	〃	〃	—	
22	〃	〃	〃	〃	—	
23	〃	第7層	28	〃	—	
24	〃	〃	〃	〃	—	
25	〃	第6～7層	〃	〃	—	
26	〃	〃	〃	〃	—	
27	〃	第7層	〃	〃	—	
28	〃	第6層	〃	〃	—	
29	〃	SXD1 上層	〃	〃	—	
30	〃	〃	〃	〃	—	
31	〃	第6層	〃	〃	—	完形
32	〃	第7層	〃	〃	—	
33	〃	第8層上面	〃	〃	—	
34	甕	第8層	29	〃	—	
35	〃	第7層	〃	〃	—	
36	〃	第6～7層	〃	〃	—	
37	〃	SD6	〃	〃	—	
38	高杯	SXD1 上層	〃	〃	—	
39	〃	第6層	〃	〃	—	
40	羽釜	〃	〃	〃	—	ミニチュア製品
41	鍋	SD10 上層	〃	〃	—	Ⅱ 55・56と共伴
黒色土器						
Ⅱ 42	椀	SK7	29頁	第26図	—	Ⅱ 14と共伴

遺物番号	器種	出土層位, 遺構	本文	実測図	写真	備考
II 43	椀	第8層	29頁	第26図	—	ループ状暗文
44	//	第7層	//	//	—	
45	甕	//	//	//	—	
瓦 器						
II 46	椀	第8層上面	29頁	第26図	—	
47	皿	SK2	//	//	—	
48	羽釜	SXD1 上層	//	//	—	
49	//	第7層	//	//	—	
50	//	SK2	//	//	—	
51	鍋	SK1	30	//	—	
52	火舎	第6層	//	//	—	
須恵器 須恵質陶器						
II 53	蓋	SXD1 上層	30頁	第27図	—	II 41・56と共伴 II 41・55と共伴
54	杯	SXD1 下層	//	//	—	
55	//	SD10 上層	//	//	図版12	
56	//	//	//	//	//	
57	//	第7層	//	//	—	
58	//	SXD1 上層	//	//	—	
59	椀	第7層	//	//	—	
60	壺	//	//	//	—	
61	//	//	//	//	—	
62	瓶子	//	//	//	図版12	
63	鉢	第6層	//	//	—	
64	//	第7層	//	//	—	
65	大平鉢	//	//	//	—	
66	//	//	//	//	—	
灰釉陶器 灰釉系陶器						
II 67	椀	第7層	31頁	第27図	—	
68	//	第6層	//	//	—	
69	皿	第7層	//	//	—	
70	//	//	//	//	—	
71	//	第6層	//	//	—	
72	//	第7層	//	//	図版12	
80	鉢	第6層	//	//	—	
81	卸し皿	//	//	//	—	

遺物番号	器種	出土層位・遺構	本文	実測図	写真	備考
緑釉陶器						
II 73	碗	第7層	31頁	第27図	—	
74	//	第6層	//	//	図版12	
75	//	第7層	//	//	—	
76	//	//	//	//	図版12	
77	皿	第9層上面	//	//	—	
78	//	SXD2	//	//	—	
79	碗	第6層	//	//	図版12	
青磁						
II 82	碗	SXD1 上層	31頁	第28図	—	竜泉窯系
83	皿	第6層	//	//	—	//
84	//	//	//	//	—	同安窯系
85	//	SXD1 上層	//	//	—	//
白磁						
II 86	碗	SXD1 上層	31頁	第28図	—	
87	//	//	//	//	—	
88	//	第6層	//	//	—	
89	//	SK1	//	//	—	
90	皿	第6層	//	//	—	
91	壺	第7層	//	//	—	
瓦						
II 92	軒平瓦	第7層	32頁	第29図	図版12	唐草文
93	//	SK1	//	//	//	//
94	//	第6層	//	//	//	剣頭文
95	//	//	//	//	—	//
96	//	//	//	//	—	//
97	//	//	//	//	—	//
98	軒丸瓦	第7層	//	//	—	巴文
99	丸瓦	第6層	//	//	図版12	「大」陰刻
銭貨						
II 100	宋銭	第6層	32頁	第30図	—	太平通宝
101	//	第6～第7層	//	//	—	至和元宝

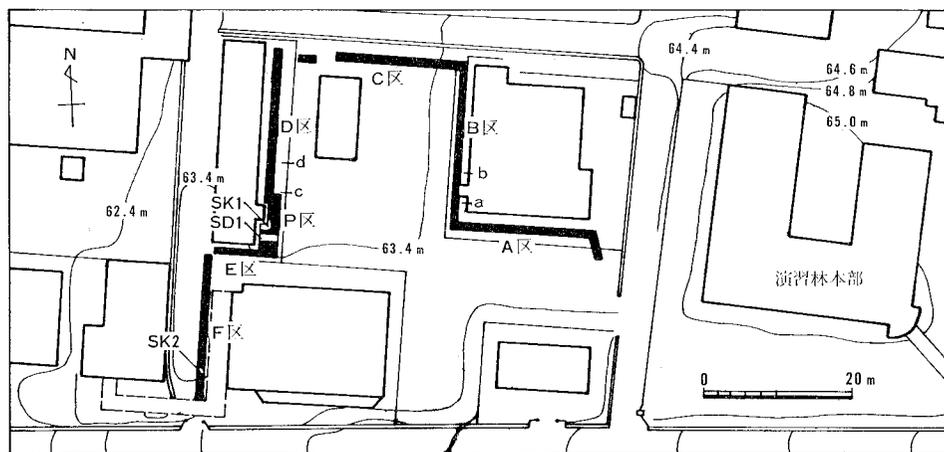
第4章 京大農学部遺跡 BG32 区の発掘調査

泉拓良 宇野隆夫

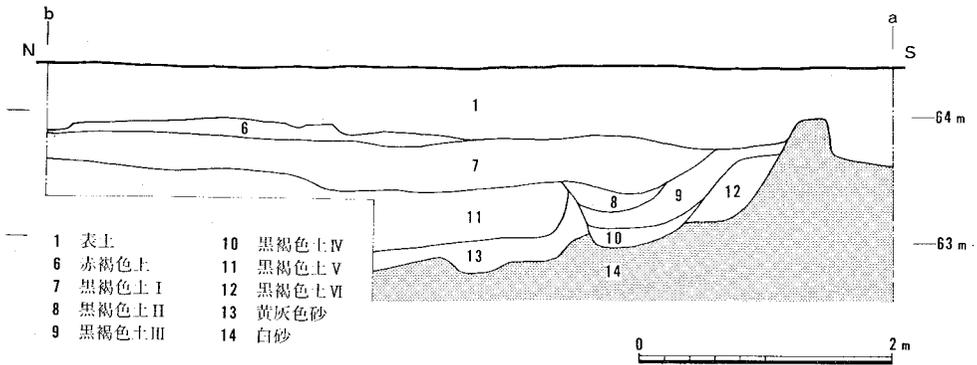
大正12年浜田耕作が縄文時代の遺物を発見した地点(図版1-1)の40m北乃至北西の地点に、農学部農林生物学科ガラス温室の改築に伴う諸配管およびボイラー室新営工事が予定されたため、当予定地の発掘調査を実施することとなった。調査地域は約100㎡の管路予定地と20㎡のボイラー予定地とからなる。管路予定地を直線部ごとに区別してA～F区とし、ボイラー室予定地をP区として合計7区に分けて表土から手掘りで発掘調査をおこなった(第32図)。9月1日に発掘を開始し、9月30日に現場作業を終了した。

1 層位

調査地域は標高約63.4mで、緩やかに西に傾斜している(第32図)。B区a-b間では、層位は上から表土(第1層)、赤褐色土(第6層)、黒褐色土I～VI(第7～12層)、黄灰色砂(第13層)、白砂(第14層)となる(第33図, 図版13-2)。一方D区c-d間では、上から表土(第1層)、黒色耕土(第2層)、青灰色砂質土(第3層)、青灰色耕土(第4層)、灰褐色床土(第5層)、赤褐色土(第6層)、黒褐色土I(第7層)、黒褐色土VI(第12層)、白砂(第14層)となる(第34図)。第2層は近代の畑土、第3～5層は近世の水田耕土と床土層で、D区では第5層に礫を入れて土畧状にし、棚田を作っている。B区・D区の南半には第2～5層がない。第6層は室町時代、第7層は鎌倉時代の遺物を含む土層で、a・c地点より北で



第32図 調査区域(縮尺1/1000)



第33図 B区東壁の層位

はほぼ全域で検出できる。第8～11層は同じ黒褐色土に白砂や黄灰色砂などが混じる土層群で、人為的にかきまぜられて堆積した状態である(図版14-1)。第12層は、第14層と不整合に堆積する土層で、第14層が削られて段が生じた後の堆積である。第8～12層は平安後期の遺物を包含する。第13層は遺物を包含していない。第14層は縄文中期の土坑 SK2の肩となっている層である。第14層はB区 a-b間, D区 c-d間で段状に削られていて, A・P・E・F区では地表下約0.5mで検出できるが, B・C・D区では2m以下まで下がっている。

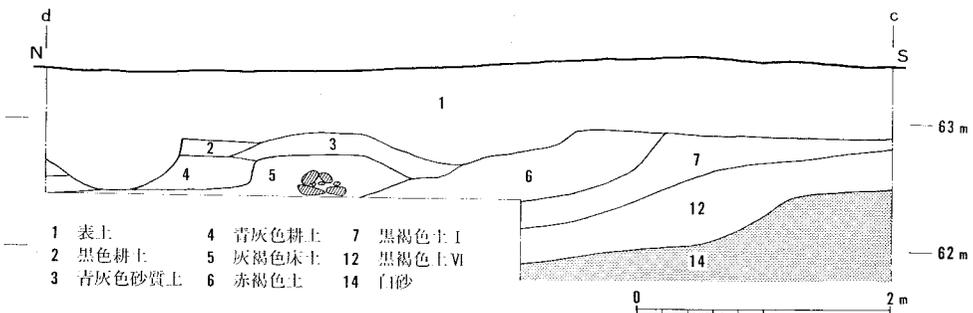
2 遺構

P区白砂上面で平安時代の溝 SD1 と土坑 SK1, F区白砂上面で縄文時代の遺物が出土する土坑 SK2 を検出した(第32図, 図版13-1)。

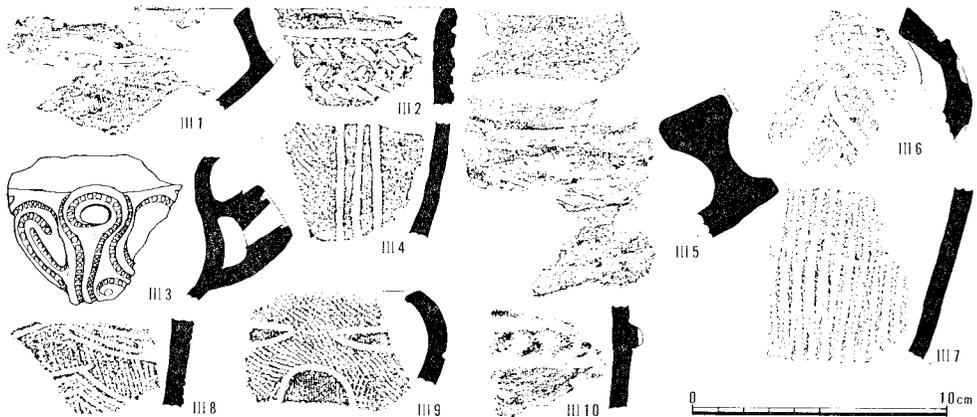
SD1 は幅 0.6m, 深さ 0.35m の東西方向の溝で, 断面U字形を呈す。埋土は黒褐色土で上・下2層に分層できた。長さ 3m までを確認でき, 方位を真北から東へ約 2° 振る。

SK1 は南北 1.5m, 東西検出幅 1.8m の楕円形土坑。深さ 0.2m。埋土は黒色土。

SK2 は南北 0.8m, 東西検出幅 1.2m の楕円形土坑。深さ 0.3m。埋土は黒色砂質土。



第34図 D区東壁の層位



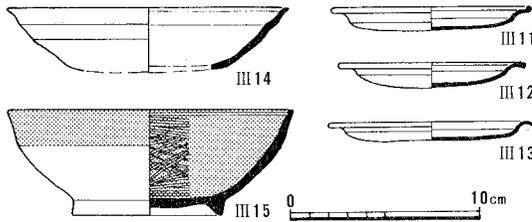
第35図 縄文土器(Ⅲ1~6はSK2出土)

3 遺物

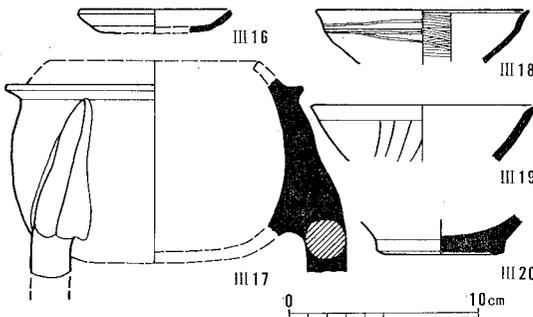
縄文時代の土器と石器，平安時代以後の土師器，黒色土器，瓦器，陶磁器，瓦が出土した。一括遺物として扱える SK1, SK2, SD1 出土遺物を中心にその内容を記す。

縄文時代の遺物 中期～晩期の土器および切目石錘1点が出土した(第35図，図版14-3)。Ⅲ7は縄文の条が交互に深淺になる船元Ⅳ式深鉢胴部。Ⅲ8は里木Ⅱ式深鉢上胴部で，撚糸文を地に施し，半截竹管状工具による2本対の沈線で上開きの連弧文を描く。Ⅲ1～5は土坑SK2出土の中期末の一括遺物である。Ⅲ1は浅い碗形の胴部に内折する口縁部がつく浅鉢。内外面とも磨いていて，口縁部には突起もしくは縦位の橋状把手がつく。Ⅲ2は深鉢の口縁部で，沈線で区画したなかに横位の羽状沈線文を施している。Ⅲ3は縦位の橋状把手がつく鉢。把手部には円形穿孔と刺突を施した沈線によるS字形渦文がある。Ⅲ4は三本の垂下沈線と縦に転がした縄文のある深鉢胴部。Ⅲ5は浅い碗形の胴部に内折する口縁部がつき，口縁端部が内外に拡張する器壁の厚い浅鉢。内外面は磨き，口縁部には突起もしくは縦位の橋状把手がつく。Ⅲ6は中期末の鉢で，把手状の山形口縁の頂部である。Ⅲ9は磨消縄文をもつ中津式深鉢のやや内彎する口縁部で，口縁端部をかるく面取りしている。Ⅲ10は晩期凸帯文土器の胴部。凸帯の刻み目はD字である。SK1出土遺物を除いて平安時代以降の包含層から出土した。

平安時代の遺物 SK1出土遺物(第36図，図版14-4)は土師器皿96片(口縁部破片数)，口縁がわずかに外反し端部が内側に肥厚する外面篋磨きの高杯2点，器形不明の白色軟質土師器3点，黒色土器A類碗(Ⅲ15)1点，素地が須恵質で釉調が明るい緑色の付け高台緑釉碗1点，平瓦1点である。土師器皿は細分でき，「て」字状口縁の薄手大型皿2片，口縁



第36図 土坑 SK1 出土の土器



第37図 溝 SD1 出土の土器

部外反 2 段撫での薄手大型皿(Ⅲ14) 32片, 口縁部外反 1 段撫での薄手大型皿 3 片, 「て」字状口縁の薄手小型皿(Ⅲ11~13)57片, 口縁部外反 1 段撫での薄手小型皿 2 片である。したがって, 土師器皿の口縁部外反 2 段撫での薄手大型皿と, 「て」字状口縁の薄手小型皿とがこの時期の基本的組み合わせと考えるとよい。この資料は京大病院遺跡の皿 A₁・B₁ 類と, 皿 A₂・B₂ 類〔宇野78〕の間の資料である。

SD1 出土遺物(第37図)は上層と下層に区別できる。SD1 上層からは, 土師器皿11片, 口縁部がく字状に外反し端部を内側に肥厚する土師器甕

2 点, 黒色土器 B 類椀 1 点, 口縁部内面に凹線があり, 内面篋磨き, 外面粗い篋磨きで器壁に凹凸の多い瓦器椀(Ⅲ18) 1 点, 体部は丸みをもち口縁部は内傾する脚付き羽釜(Ⅲ17) 1 点, 常滑甕 1 点, 須恵質甕 1 点, 口縁部外面に縦位の篋描きのある白磁椀(Ⅲ19) 1 点, 白磁椀の削り出し高台(Ⅲ20) 1 点が出土した。土師器皿は細片で口縁部 1 段撫で端部面取りの皿が多い。SD1 下層からは, 口縁部 1 段撫で端部面取りの小型皿(Ⅲ16) 1 点, 瓦器片 1 点, 須恵器甕 1 点が出土した。SD1 上層は12世紀後葉頃, 同下層も11世紀に遡らない。

4 小 結

今回の調査の結果, 旧農学部演習林本部西側道路の調査(図版1-10)と合わせて, 縄文時代農学部遺跡の遺存状況が把握できた。すなわち, a 地点と c 地点を結ぶ線を北限とし, 南は東西道路まで, 東は旧農学部演習林本部西側道路, 西限は今回の調査の F 区である。この地域では地山の白砂層が高く, 表土を剥ぐとすぐにこの白砂層上面で, 縄文時代や平安時代の遺構を検出できる。a 地点と c 地点より北は平安後期の掘り込みによって平安中期以前の包含層や遺構は残っていない。今回の調査では SK1 出土遺物によって平安京内でも資料の少ない10世紀後葉~11世紀初頭の土器を明らかにできた。また SK2 の縄文土器も中期末の資料として重要である。

第5章 白河北殿跡比定地 AA18 区の試掘調査

岡田保良

1 調査の目的

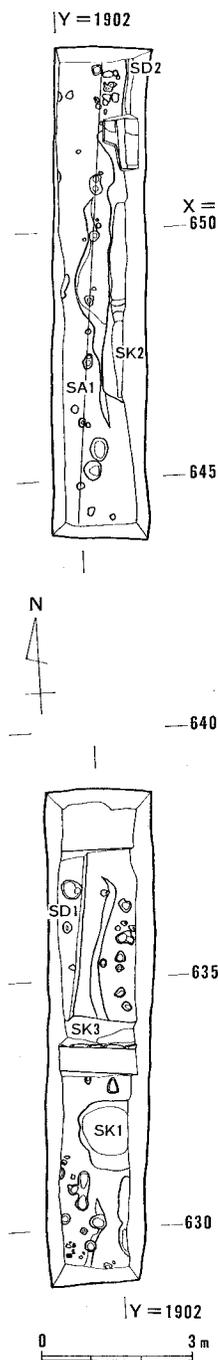
去る昭和51年度から52年度にかけて、京大病院構内では、AE15区、AH17区、AF14区の3ヶ所において発掘調査をおこない、平安時代末期を中心とする多数の遺構、遺物を出土した〔京大調査会77、京大埋文研78a〕。これらは院政期に展開をみた六勝寺や院の御所と密接な関係のある遺跡である。ところが、院の御所である白河南殿、白河北殿およびそれらに付随する御堂の跡地に比定されている春日通り以南、東大路通り以西の地域〔杉山62〕では未だに平安時代の良好な遺構や遺物包含層が検出されておらず、京大病院遺跡の性格を明らかにするには、満足な資料に欠けるところがあった。なかでも京都大学熊野寮構内は、白河北殿跡の一部をしめると推定され、御所の建築の構成や白河条坊を見きわめるための要所であり、その北方にあたる京大病院遺跡との関係の上でも興味深い地点である。しかし、本構内は戦後京都大学が取得した敷地で、昭和31年に教育学部校舎が、同40年には現在の寮舎が建設されており、それ以前にも紡績工場その他の社屋が建てられていたため、地下の遺構、層序の保存状態に関して悲観的な見方すらあった。

今回の試掘調査は、こうした遺跡の現状を的確に把握し、今後の調査研究の基礎的資料を得る目的で実施したものである。

2 層位と遺構

調査地点は、寮舎東側の空地で、既設園路に平行させて2つのトレンチを設定した(図版1-49)。各トレンチは東西2m、南北10mの規模で5mの間隔をおく。それぞれ北トレンチ、南トレンチと仮称する。表土掘削から埋め戻しまで、すべて人力でおこない、遺構平面および壁面層位の実測については、予め設置した基準点によって京大構内座標を割り付けておこなった。昭和53年2月20日に調査を開始し、同3月15日に現場作業を終了した。

現地表面は、標高46.8~47.0mで、北に面する丸太町通り路面より0.7~0.8m高い。地表から地山とみられる青灰色シルト層(第9層)まで、2.0~2.2mをはかり、その間は近代以降の厚い盛土または整地層(第1~第3層)、江戸後期以降の耕作土(第4~第6層)、さらに平安末期乃至鎌倉前期の堆積(第7・8層)に大別できる(第39図)。第9層上面はかなり起伏があり、北トレンチ北部では東下がり、南トレンチ南部では西下がりの傾斜をもち、調査地点が、平安末期以前には方位を若干東にふる帯状の凹地であったと推定できる。



第38図 遺構平面

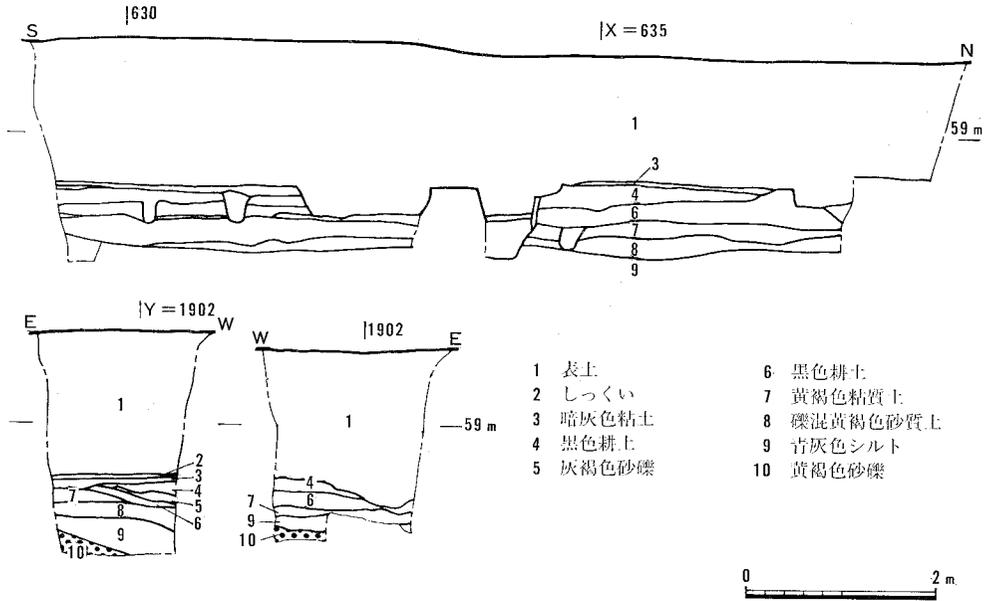
この上面から溝 SD1, SD2 を検出した。これらの溝や凹地の大部分には第8層の堆積をみる。その上に第7層がうすくのる。江戸後期の耕作土は土地をかなり削平したのちに堆積したものであろう。第3層は、軟弱な耕作土の上にしっくい(第2層)をおくために整地した際に入れた粘土と考えている。その年代は、確証はないが明治以降のものともみている。

検出した遺構は、溝 SD1, SD2 のほか、同時代と考える小ピットが、平安時代から鎌倉時代にかけてのもので、江戸時代の遺構として、第7層上面で検出した柱列 SA1, 土坑 SK2, SK3 があり、北トレンチ中央の耕作土より、小規模な石垣を検出した。溝 SD1 は南トレンチの西壁沿いにその東肩を検出したもので、約 8° 方位を東に振る。トレンチの範囲は西肩には及んでいない。埋土の中から、宝相華唐草文軒平瓦 1 点をはじめ、瓦片と土師器を出土した。溝 SD2 は、北トレンチ東北部にわずかにその西肩を検出したにすぎない。柱列 SA1 は、北トレンチ内で 1.2m 間隔で 8ヶ所の柱穴跡が南北に 1 列にならぶが、建物跡とはみなし難く、耕作に伴う柵の跡と考えている。土坑 SK1 は一部南トレンチの東壁にかかるが、直径 1.3m, 深さ 0.6m をはかる円形の落ち込みである。その壁はほぼ鉛直であり、井戸であった可能性が強い。埋土は砂礫を多く含み、染付類など、江戸時代後半の遺物を少量出土した。土坑 SK2, SK3 はそれぞれ深さ 0.65m, 0.8m をはかる落ち込みで、多数の陶磁器を出土している。しっくいをおいた頃の遺構であろう。

3 遺物

第7・8層からは平安末期から鎌倉時代にかけての土師器、陶器、瓦類のほか、畿内第V様式 1 点(第41図 M12)を含む弥生土器の小片が数点出土した(図版15-4)。近世以降の堆積土層からは、多数の陶磁器、土製品、瓦類が出土し、都合コンテナ 7 箱分の遺物を採集した。

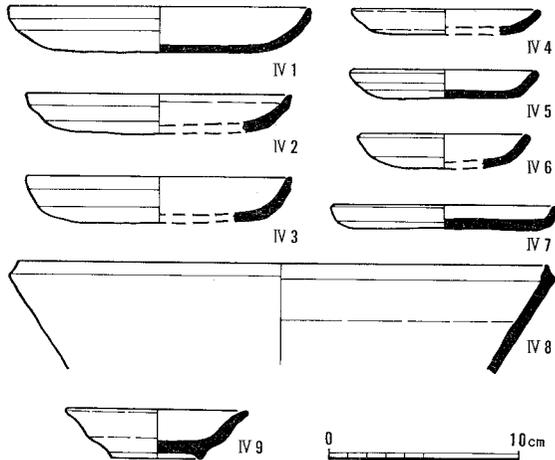
第7・8層から出土した土師器は皿だけである(第40図 M1 ~



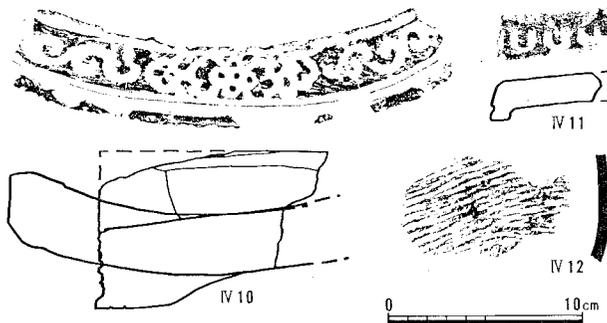
第39図 南トレンチ西壁(上), 南壁(下左), 北トレンチ北壁(下右)の層位

7)。Ⅳ4が第8層の出土で他は第7層から出土した。直径が14~16cmの大皿(Ⅳ1~3)と9~10cmの小皿(Ⅳ4~6)がセットになるようである。大皿では口縁部に2段の横撫を施し、上段の撫では端部をやや外反気味につまみあげるように成形する。小皿は口縁部の撫でが1段または2段で、端部に面をとる例(Ⅳ5・6)もある。Ⅳ7は扁平な底部をもち、口縁部を短くまっすぐに立ち上げる。蓋として用いたかもしれない。

その他の土器のうち、Ⅳ8は第8層から出土した須恵質大平鉢である。口縁部はやや肥厚し、端面内側をつまみあげるように撫でる。Ⅳ9は第7層から出土した灰釉系の皿である。底部は糸切りののち高台をはりつけ、畳付けの面には葉の圧痕をみとめる。体部はふくらみをもち、口縁部が外反するなどの特徴は12世紀前半の製品にみ



第40図 第7・8層出土の土器



第41図 瓦と弥生土器

ることができる。

瓦類は溝 SD1 から比較的まとまって出土しており、その中に宝相華唐草文軒平瓦 (W10)がある。瓦当中央に宝相華を、その両側に稚拙な唐草文を陰刻して配する。側面および瓦当上下面は篋削りによって成形し、平瓦部凸面全

面と凹面両端部を撫でる。12世紀中・後葉の讃岐産の製品である可能性が強い。W11は第7層出土の剣頭文軒平瓦である。瓦当は折り曲げにより、凹凸両面、側面および頸部を撫で、凹面から瓦当にかけて布目をとどめる。12世紀末乃至13世紀初頭のものであろう。

江戸時代以降の遺物としては、丹波、信楽の徳利、伊万里染付などの陶磁器のほか、泥面子、土人形などの土製品がある。

4 小 結

この調査により、明確な建築遺構こそ確認できなかったが、当初地下はかなりの攪乱を受けていると予想されたにもかかわらず、平安末期を中心とする遺物包含層や、溝遺構を検出できたことは大きな収穫であった。しかし、京大病院遺跡における密度の高い包含層や遺構面との対応関係については結論を出し難く、また比定されている白河北殿に直接かわる資料も得られたとはいえない。ただ溝 SD1 からまとまって瓦が出土したことは、瓦葺の堂宇が近いと考えてよい。

同時代の遺跡である洛南鳥羽離宮跡では調査が継続されており、院の御所と御堂の建築遺跡が現在その実体を明らかにしつつある。にもかかわらず、ここ白河の地では、白河北殿・南殿という主要な御所について、未だに遺跡の遺存状況すら把握できていなかった。そうした中で、今回の試掘調査は、将来の遺跡発掘に期待をつなぎえた点で意義深い調査であったといえよう。

第6章 京都大学吉田キャンパスの試掘調査

宇野隆夫 岡田保良

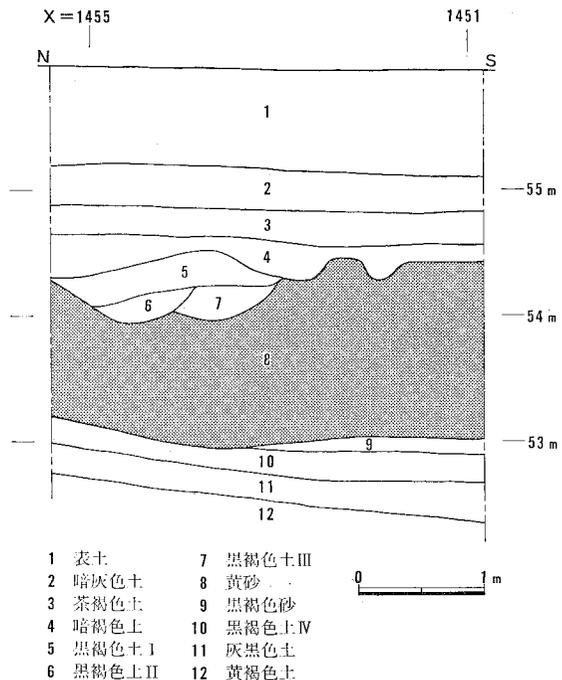
1 教養部エレベーター新営予定地の試掘調査(AQ23・AN23区)

教養部A・D号館にエレベーターを付設することが予定されたため、予定地に8m×5mの試掘坑2ヶ所(TP1・2)を設定した(図版1-48a・48b)。現地表の標高はTP1が約56m、TP2が約54m。北東から南西に向かってゆるやかに傾斜する。

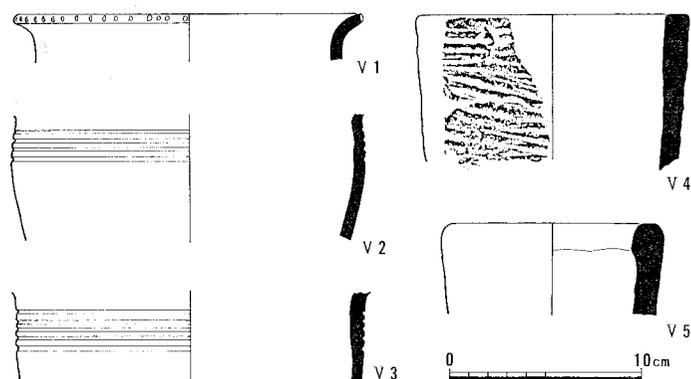
層位と遺構 TP1では上から、表土、暗灰色土、茶褐色土、暗褐色土、黄砂、黒褐色砂、黒褐色土Ⅳ、灰黒色土、黄褐色土という土層である(第42図)。黒褐色土Ⅰ～Ⅲは黄砂直上の部分的な堆積である。なお黄褐色土の下には白砂が50cm、黄褐色シルトが40cm堆積して砂礫に至ることを確認している。暗灰色土から江戸後期、茶褐色土から室町後期、暗褐色土から鎌倉時代、黒褐色土Ⅰ～Ⅲから平安後期、黒褐色土Ⅳから弥生前期の遺物が出土した。遺構は黄砂上面の土坑以外は検出できなかった。

TP2では上から、表土、黄褐色砂Ⅰ、黄褐色細砂、黄褐色砂Ⅱ、暗褐色砂、黄褐色シルト、白砂である(第45図)。黄褐色砂Ⅰから黄褐色砂ⅡまではTP1の黄砂に対応するが、粘土分を多く含む。検出した遺構は黄褐色砂Ⅰを切る溝SD1である(第44図)。断面が整った逆台形で深さ1.2m、幅1.7m、底幅0.9mである。方向は東西方向で真北から東へ約2°振る。下層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積し、下層から平安末期、上層から鎌倉前期を中心とする遺物が出土した。

遺物 V1～6は弥生土器でTP1黒褐色土Ⅳから出土した(第43図, 図版16-1)。V1～3は甕。V1は口縁端部に刻み、V2は口



第42図 TP1 東壁の層位

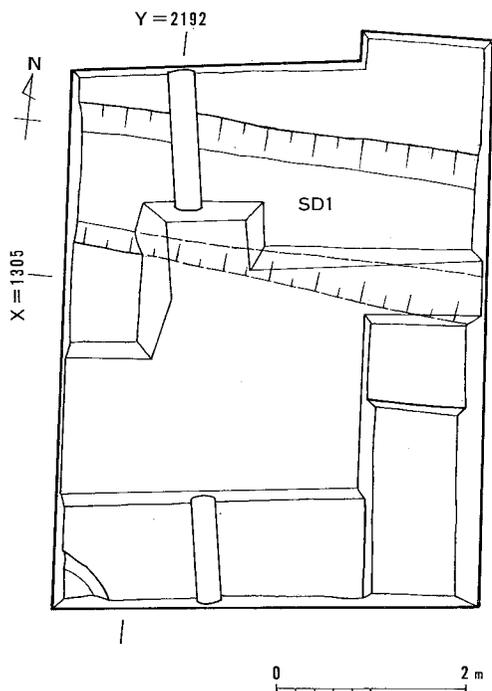


第43図 TP1 黒褐色土M(第10層)出土の弥生土器

縁部直下に4条の篋描き沈線文、V3は同じく5条の篋描き沈線文を施す。色調はV1・2が黒褐色で外面に煤が付着し、V3は淡褐色で煤の付着がない。すべて胎土に砂粒を多く含

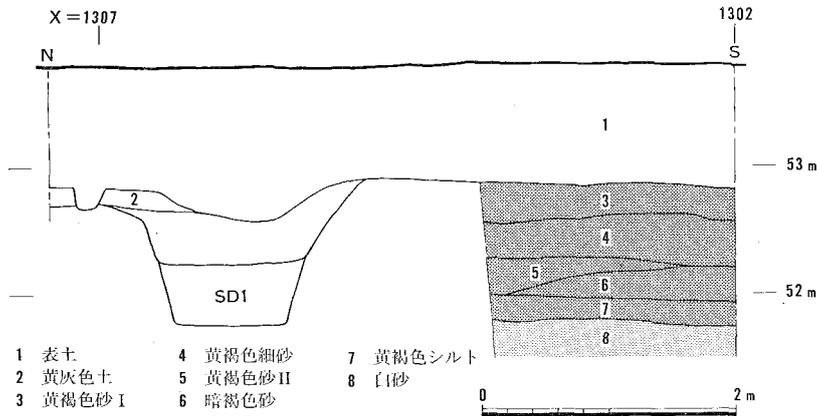
み、焼成は良い。これらは畿内第I様式新段階に相当する。V4・5は口縁部に水平の面取りを施す鉢形の土器である。V4は外面に2枚貝による斜方向の条痕を、内面には撫でを施す。V5は内外面に撫でを施すが、内面の撫でが粗雑である。色調はいずれも器壁表面が明褐色で内部が黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

V7～23はTP2溝SD1から出土した(第46図, 図版16-2)。V7～12・22・23が下層, V13



第44図 TP2 遺構平面

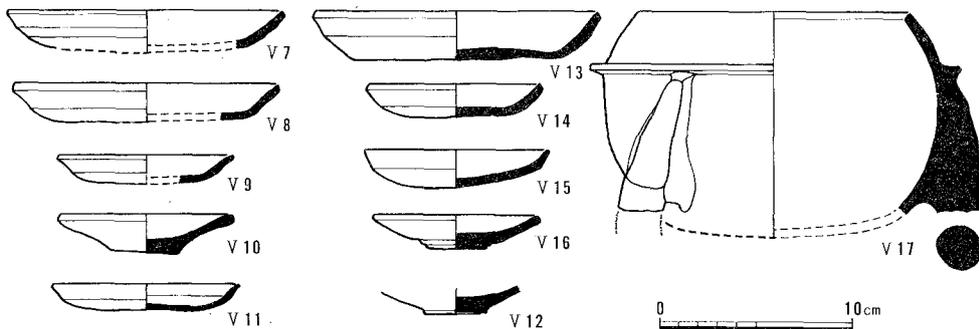
～17およびV18～21が上層からの出土である。V7～9・13～15は土師器皿, V10・16は糸切り底の土師器皿, V11は瓦器皿, V12は白磁皿, V17は瓦器羽釜である。V18は巴文軒丸瓦。瓦当外周に縄叩き目を施し、瓦当裏面に指圧痕と丸瓦部の剝離痕を残す。V19は雁巴文軒平瓦。V20～23は巴文軒平瓦。V19～23は瓦当と平瓦部が鈍角をなす。V21の平瓦部凸面には直線2本からなる篋記号を認める。V24は、ふいごの羽口。工事中に採集した(図版16-2)。以上のうちSD1下層出土土器は12世紀中～後葉, 上層出土土器は13世紀前葉頃のものであるが、瓦はすべて12世紀中葉頃の製品である。



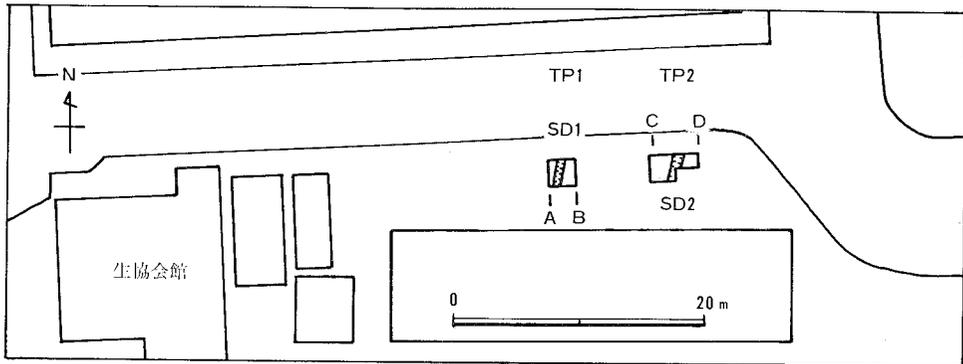
第45図 TP2 東壁の層位

まとめ TP1 黒褐色土Ⅳから畿内第Ⅰ様式新段階の弥生土器と条痕文土器が出土したが、この黒褐色土Ⅳは、弥生前期末に堆積を開始する黄砂層に厚く被覆される。条痕文土器の出土例は愛知県味噌粕岩遺跡〔彦藤67〕，愛知県西志賀遺跡〔杉原・岡本61〕，滋賀県川崎遺跡〔滋賀県教委71〕等があるが、TP1 出土の条痕文土器は水神平Ⅲ式あるいは続水神平式と呼ばれているものに相当する。⁽¹⁾現在の知見では本遺跡がこの土器の分布の西端にあたる。今後このような出土例が増加すれば弥生時代開始期の畿内と東海地方との関係や、その中で京都盆地の占めた位置がより明らかになるであろう。

TP2 の南の吉田近衛町一帯は仁平元(1151)年に鳥羽法皇の後高陽院藤原泰子の御堂御所福勝院が造立されたと推定できる地である〔川上77〕。SD1 より12世紀中葉以後の遺物が出土している点からみて、SD1 は福勝院の北を限る溝である可能性が最も強い。ただしこの地は吉田社の旧社地にも比定されている〔福山77〕。今回の調査では建物との関係が不明であるため、その判断は今後の調査に待つ。(宇野)



第46図 TP2 溝 SD1 出土の土器



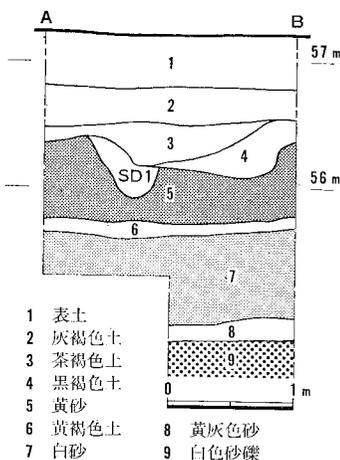
第47図 調査区域

2 本部構内排水ポンプ新営予定地の試掘調査(AT27区)

予定地は旧工学部資源工学教室で、面積 150㎡である。現地形は標高約 57m で南西に向かって緩やかに傾斜する。現在の建物の北に、2 m × 2 m の試掘坑を 2 ヶ所設定し、TP1・TP2 とした(第47図、図版 1-50 a・50 b)。

層位と遺構 TP1 の層位は上から表土、灰褐色土、茶褐色土、黒褐色土、黄砂、黄褐色砂、白砂、黄灰色砂、白色砂礫である(第48図)。表土と灰褐色土と茶褐色土は江戸時代以後の堆積であり、黒褐色土からは平安時代の遺物が少量出土した。黄砂以下からは遺物が出土しなかったが、黄灰色砂以下は弥生前期以前の堆積であることが判っている。TP2 では TP1 に堆積する土層のうち、表土、灰褐色土、黄砂を検出した(第49図)。

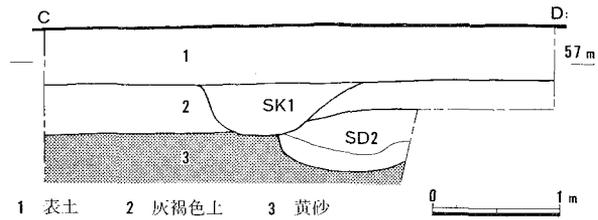
TP1・TP2 で黄砂を掘り込む溝 SD1・SD2 を検出したが、両溝とも方位を真北から東へ約 7° 振り、検出高も等しい。また溝の間の黄砂上面



第48図 TP1 南壁の層位

はしまっていて、TP2 では小礫を踏みしめた状態になっている部分が残っている。このことからこの溝は、南北方向で、幅約 9.8m (芯芯) の道路の側溝である可能性が強い。SD2 には上層に砂混黒褐色土、下層に黒褐色土が堆積するが、下層上面から平安前期の遺物が出土している。SD2 を確認するため TP1 を東へ 1 m 拡張したが、野壺によって壊されていた。これは江戸後期の耕作土である灰褐色土に伴うものである。またこのほか、灰褐色土を掘り込んで江戸末期～明治期の陶磁器を投棄した土坑 SK1 を検出している。

遺物 SD2 下層上面から須恵器の杯と甕が出土した(第50図V25・26, 図版16-3)。杯は高台がなく、体部は、やや丸味をもつ底部から直線的に立ちあがる。甕は高台を消



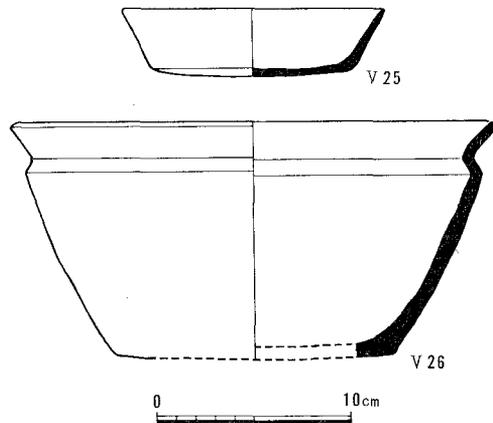
第49図 TP2 北壁の層位

失し、器高が口径に比して低い。いずれも色調は灰青色で胎土に砂粒を含み、焼成はやや悪い。甕は「平城京発掘調査報告Ⅶ」で甕Cとしているものにあたるが〔奈文研76別表6〕, この種のものとしては末期的な特徴をもつ。年代は9世紀後葉頃であろう。またSD1の上に堆積する黒褐色土からは12世紀頃の土師器細片が出土している。

このほか、灰褐色土と野壺および土坑 SK1 から江戸後期～明治期の陶磁器、土師器、瓦が出土した(図版16-3 V27～35)。

まとめ 今回の試掘調査により、平安時代の道路と推定できる遺構を検出した。調査範囲が狭いため、その性格は必ずしも明らかではないが、いくつかの知見を得ることができる。まず方位を東へ振る点は京大北部構内の遺構と共通し、南の京大病院遺跡で検出した平安後期のはぼ真北を指す道路〔京大調査会77図版64〕とは性格が異なる。また付近に現存する白川道とも方位を異にする。本道路を北へ延長すると京都大学本部構内東北部に達するが、ここは杉山信三が吉田寺、吉田葬送地が及んでいると推定した地点である〔杉山54〕。今回検出した道路もこれと関係する可能性が強い。ただし吉田寺については、文献資料とわずかの遺物があるだけで、その実体が判っていない。本試掘地点の北東1.3kmには奈良前期から平安中期にかけて存続した北白川廃寺があり、また若狭へ通じる小浜街道もこの付近を南北に通っていた可能性⁽²⁾がある。本道路がこれらのうちどれと関係するかの判断は今後の調査に待つ。

また江戸後期の遺物が大量に出土した。これは吉田神社や尾張徳川藩京屋敷と関連する可能性⁽³⁾があるが、江戸後期に遺物の出土が増加するのは吉田キャンパス一帯で生じる現象である。(宇野)

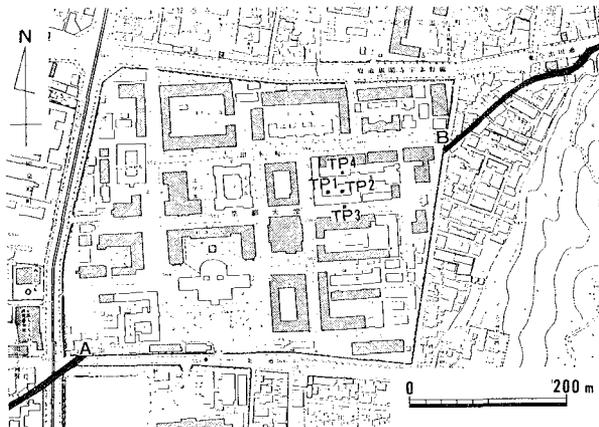


第50図 溝SD2出土の須恵器

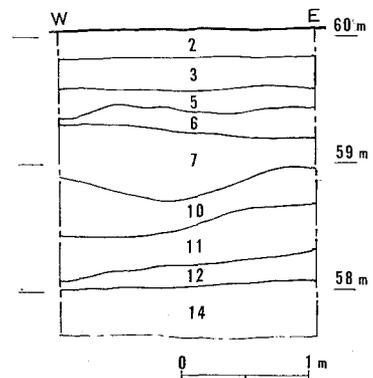
3 工学部電気工学科等校舎新営予定地の試掘調査(AW28区)

新営予定地内に4ヶ所の試掘坑 TP1~4(各々2m×2m, 図版1-50a~50d)を設けて,土層の堆積状況および遺構の有無を調査した(第51図)。TP1・2は既設建物に平行して東西同一線上にならび,TP3・4は各西壁とTP2の東壁が南北方向の同一線上にのる。いずれの試掘坑においても,土層の遺存状態は良好である。各試掘坑の層序にはかなりの差があり,層位の対応関係をみると,著しい標高差を有する点が顕著で,かつては起伏に富んだ地形を呈していたことがわかる。第2・第3層は江戸後期以降の耕作土で,明治20年旧第三高等学校用地となるまで畑作がおこなわれていたことを物語る。TP3ではこれらの層位の標高が他の試掘坑にくらべて1m前後も低い。第4層はTP3のみにある無遺物層である。第5層からはTP3を中心に若干の遺物を出土しており,中世末から近世初頭の堆積と考えている。第6層は大ぶりの礫の混じる氾濫層,第7層はTP4にのみ観察できる粗砂である。第8層は真っ黒な土層で,TP1では第8層から第12層まで漸移的に変化する。第13層以下は粗砂乃至細砂である。第6層以下から遺物は出土しなかった。

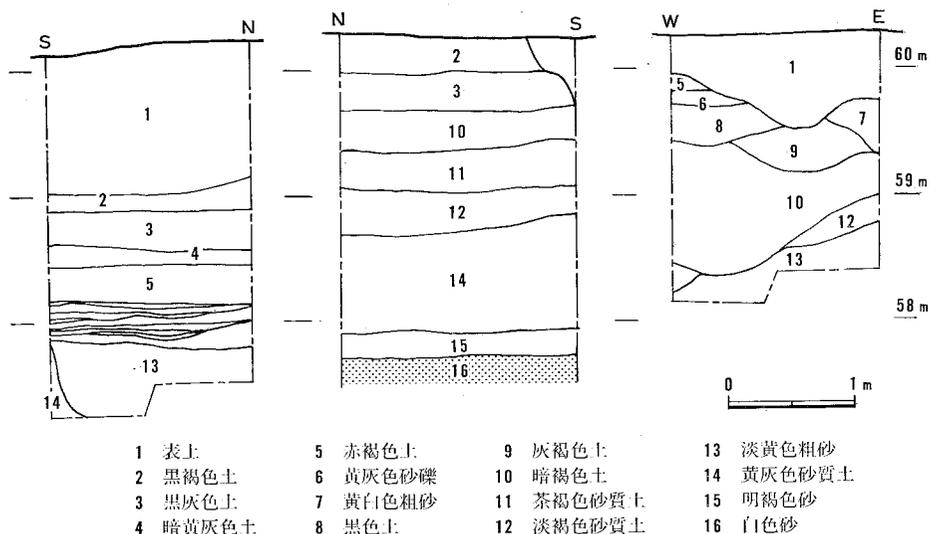
TP3において,第5層を除去して,礫を含んで固く叩きしめられた砂質土を検出した。以下厚さ0.3mほどの間は,砂礫や粘質土がそれぞれ薄くもよくしまつて互層をなす(図版16-4)。これを,長年にわたって人々に踏みしめられた路面の推移を示す層位と考えている。堆積の状態は北に高いゆるい傾斜をもつ地形を予想させる。その堆積の中から採集できた遺物はすべて細片であるが,平安時代に遡る確実な資料は見あたらない。このTP3の位置は,図上地点Aと地点Bとを結ぶ線上にあたる。地点A・Bは通称「山中越え」「白川道」



第51図 試掘坑位置図



第52図 TP1北壁の層位



第53図 TP3(左)・TP2(中)・TP4(右)の層位

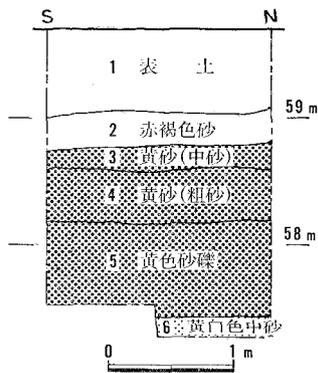
「志賀越道」などとよばれる古くからの往還路の切断点で、今回発見の路面跡がその通路にあたることはまちがいない。この道路の歴史は、『京都の歴史1』によれば、平安京以前にまで遡るとされるが、その点は確証を得ていない。また AB 間の切り取りは、幕末に尾張徳川藩京屋敷設置によるものであるが、その時期まで往還路として供されていた点については疑問のこころ。いずれにしろ今後の調査によってより正確な知見を得るであろう。

TP4 では耕作土層がみられない上に、土層の堆積は不安定な状況を呈しており、最近まで河川が暴れていたことを物語る。明治20年測図の『京阪地方仮製地形図』には、三高キャンパスの中を、地点Aから地点Bに向かう小川を記しており、TP4 にみる流路がそれにあたるのであろう。各試掘坑の層位の相対関係をみると、第2、第3、第10～12層はTP2において最も高い。結局 TP2 の位置が自然堤防上にあって、その北側を流路が、南側を往還道が走っていたことになる。

この試掘調査の結果、旧街道とそれに並走する川筋の変遷過程について若干の新知見を得た。そのため、本年度以降事前発掘調査をおこなう予定である。

4 環境保全センター重金属処理装置室新営予定地の試掘調査(AV25区)

新営予定地の東南隅と西北隅に各1ヶ所、2m×2mの試掘坑(TP1・2)を設けて試掘をおこなった(図版1-52a・52b)。TP1では、地表下約0.6mまでコンクリート塊やレンガが詰まり、以下泥質を含む砂礫(第2層)を介して黄砂となる(第54図)。第3～5層と次



第54図 TP1 西壁の層位

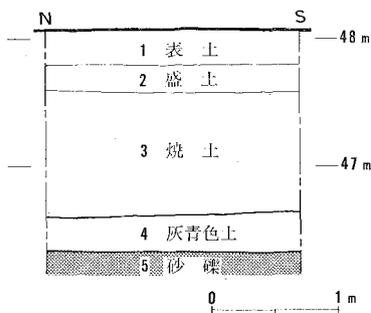
第に粒子の粗い黄砂となるが、地表下約2.2mあたりで再び粒子が細かくかつ白っぽい砂(第6層)となり、この上面にはひとかかえ以上もある花崗岩塊がのる。黄砂とともに白川上流から運ばれてきたものと考えている。TP2では地表下約0.2mで全面に、花崗岩緑石を伴うレンガ敷を検出して掘下げ不能となったため、幅1mで西方に2m拡張したが、既設建物の掘方にあたり、何ら検出することはできなかった。

以上のように、この地区では比較的上位層から無遺物の砂層がみられ、遺構も遺物も発見できなかった。(岡田)

5 医学部附属病院西構内電気管理設予定地の試掘調査(AI14区ほか)

埋設予定地に沿って、6ヶ所の試掘坑(各2m×2m)を設定した(TP1~6, 図版1-53a~53f)。調査地点は現代の攪乱が多く、近世以前の堆積を観察できたのはTP5・6である(図版1-53e・53f)。

TP5では地表下1.5mまでに第1~3層の近・現代土層が堆積する。灰青色土(第4層)はシルト質の堆積で、平安末~鎌倉初期の土師器細片を出土した。砂礫(第5層)は砂岩、花崗岩からなり、遺物は出土しなかった。TP6では厚さ1mの表土を掘削すると砂礫に



第55図 TP5 東壁の層位

達し、砂礫上面は標高約46mである。

以上の調査では遺構や良好な遺物包含層を検出できなかった。しかしTP5の灰青色土(第4層)から遺物が出土したことは、平安末期以後、鴨川、高野川の流路がこの地点より西に移り、北東の京大医学部遺跡や東の京大病院遺跡の遺構や遺物包含層がこの付近に及んでいる可能性を示す。

(宇野)

〔注〕

- (1) 奈良国立文化財研究所技官中村友博氏に御教示をいただいた。
- (2) 足利健亮京都大学教養部助教授の御教示による。
- (3) 『京都坊目誌』(碓井15)には文久2年設置、明治3年廃止とある。

第7章 京都大学構内遺跡の花粉分析

中堀謙二

昭和53年度京都大学北部構内で実施した遺跡調査において、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物を含む数層について花粉分析をおこなった。堆積物はいずれも陸成層で、花崗岩起源の砂質土である。この土からは花粉の検出数がきわめて少なく、また古代には生活面であったことから、層間の攪乱の可能性や、小動物による花粉の上層から下層への移動といった問題もある。したがって、今回の結果だけから、遺物が示す時代の古環境を復原することには無理がある。今回は、今後の古植生復原作業のための一資料を提供し、おおよその古環境を推定するにとどめておく。

1 試料

分析に用いた試料は9点であるが、花粉を検出できたのは以下の8点である。

試料1	農学部遺跡 BG32区D区土坑埋土上層	(本年報第4章, 第32図)
2	同 F区土坑 SK2埋土上層	(同)
3	同 F区土坑 SK2埋土下層	(同)
4	理学部遺跡 BE29区西壁第8層黒褐色土	(本年報第3章, 第12図)
5	同 溝 SD10埋土上層	(本年報第3章, 第17図)
6	同 溝 SD10埋土下層	(同)
7	同 方形周溝墓 I 南側周溝埋土	(同)
8	同 北壁第11層礫混暗灰色土	(本年報第3章, 第19図)

上記の試料のうち、縄文中期の遺物を包含する土層の試料は試料2・3、縄文晩期は8、弥生中期前葉は7、弥生中期中・後葉は6、平安前・中期は4・5である。なお試料1を採取した土坑からは、縄文中期の土器が比較的まとまって出土したが、最下層からビニールが出てきたので、現代の攪乱であることが判明している。

試料は各層のほぼ中央から約1kgを採取し、そのうち約0.3kgを処理した。

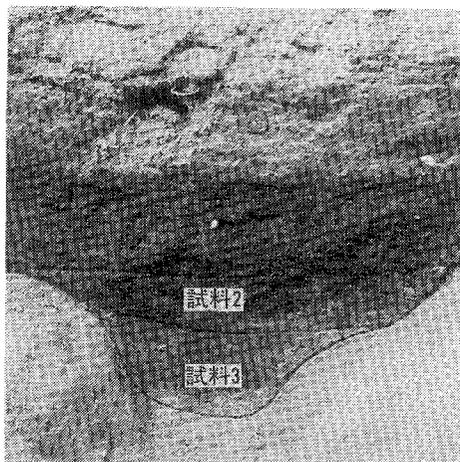
2 分析方法

分析処理法は農学部遺跡 BE33区でおこなった方法〔京大調査会77〕と同じであるが、時間節約のため、封入には水を用い、すべてのプレパラートの全視野を検鏡した。花粉大の炭化植物片が余りにも多かったので、花粉と植物片が重ならないようにプレパラート作成

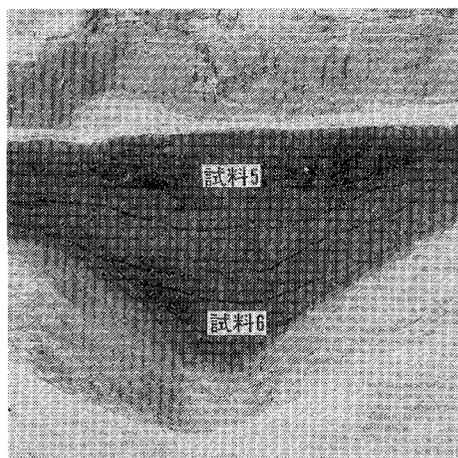
は、海岸近くに生えるものと内陸に分布するものとの2つのタイプがあるが、後者には *Chenopodium* (アカザ属) が属する〔北村・村田61〕。その一種である *Chenopodium album* L. (シロザ) を例にとってみると、この種はあらゆる土壌型、PH の広い範囲にわたって育ち、環境への適応性が大きい。ただしその生育地はよく陽があたり、土が頻繁に攪乱される所にかぎられる〔LeRoy 77〕。具体的には畑地や川岸の荒地、またゴミ捨て場によく見られる。したがってF区の分析結果ら推定できる古環境は、頻繁に攪乱をうける裸地的景観であり、*Chenopodium* (アカザ属) の生育地としては、人間の居住区、および洪水等ではしばしば攪乱をうける川岸が想定できる。これは、出土遺物の分布から農学部遺跡 BG32 区 F 区付近に縄文人の活動の中心地が存在したとする推論〔泉78〕と矛盾しない。

一方、F区より北西20mの地点で調査した試掘坑(図版1-42 f)から、縄文時代の遺物を包含する泥炭層が2層発見された。上層からは晩期の遺物が、下層からは中・後期の遺物が出土している〔京大埋文研78a p. 18〕。両層とも周囲の古環境は基本的には *Cyclobalanopsis* (アカガン亜属) を主要素とする照葉樹の極相林である。下層では、森林の破壊がほとんど認められないが、上層では下層にくらべて、人間の森林に及ぼす影響が強く現われており、一部オープンな景観が出現したことが指摘されている(『京都大学農学部遺跡 BG31 区出土の植物遺体』参照)。このような時間の経過に伴う森林破壊の進行は、京都市北区の深泥池でも見られる。本試料はこれらと比べてより破壊の進んだ段階を示している。

ところで、本試料を採取した土坑 SK2 からは縄文中期の土器が出土しているが、これを手掛かりに地層の比較をすると、本試料は泥炭下層に対比できる。両地区の古植生の間



第56図 花粉分析試料2・3の採取層位



第57図 花粉分析試料5・6の採取層位

には大きな差異があるが、それは、本試料の分析結果がF区を中心としたマイクロな環境を反映し、泥炭がF区を含むマクロな極相林の環境を反映していると考えれば、うなずけないことはない。しかし、両地点がきわめて近距離であることを考慮すると、裸地的植生は泥炭の花粉に何らかの影を及ぼしているように思う。この意味では *Chenopodiaceae* (アカザ科) が検出され、森林破壊の様子もうかがわれる泥炭上層に、本試料は近いと言える。なお縄文時代以前の *Chenopodium* (アカザ属) については花粉分析の報告がある [Tsukada 72]。

本試料の時代についての別の可能性は、農耕が確実に起こされた時期とすることである。分析結果がマクロな環境を反映していると考えると、その古植生は広い範囲にわたって森林のない、草地景観が想定できる。植生破壊の程度から、本試料の時代は泥炭上層よりずっと後代のものとなる。つまり土坑 SK2 の埋土には、新しい時代の花粉が混入していることになる。この混入説と縄文時代説とのいずれが正しいか判定するには、今後の更に詳しい調査が必要である。

試料1 農学部遺跡 BG32区D区土坑埋土上層より採取した試料で、花粉は大量に検出できたが、同じ土坑の下層からは花粉は検出できなかった。木本では *Pinus* (マツ属) が最も多く、ついで *Cryptomeria* (スギ属)、*Cupressaceae* Type (ヒノキ科型)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属) が出ており、これらはいずれも人為的影響の強い植生要素である。草本では *Gramineae* (イネ科) が圧倒的に多く全花粉数の約半数を占めており、直径 100μ に達するトウモロコシ型花粉も多数含まれていた。そのほか *Compositae* (キク科)、*Cruciferae* Type (アブラナ科型)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Achyranthes* Type (イノコズチ属型)、*Justicia* (キツネノマゴ属) などのような荒地性の雑草が検出できた。木本は全花粉中40%弱であった。この結果からは、樹木の少ない草地が推定でき、比較的最近の陸成土は、周囲の植生を反映する形で花粉を含んでいることが判った。

試料8 花粉をほとんど検出できなかった。

試料7 全花粉中木本は約20%で、残る80%は草本である。草では *Chenopodiaceae* (アカザ科) が最も多く、*Gramineae* (イネ科)、*Compositae* (キク科)、*Cruciferae* (アブラナ科)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科) などがみられる。*Chenopodiaceae* (アカザ科) が前述のような環境を示すとすると、古環境としては、土壌の攪乱が頻繁におこなわれる裸地的な景観が推定される。

木本は試料6に出現しているものと変わらないが、ただしこの属では *Fagus*(ブナ属)の多いのが注意をひく。*Fagus*(ブナ属)は照葉樹林よりも高地に分布し、京都付近では標高600m以上に出現する。したがってその花粉が低山帯の花粉に混じって高率に検出されるとは期待できず、深泥池のデータでも縄文中期以降、照葉樹が優勢な時期には *Fagus*(ブナ属)はきわめて少ない。しかし深泥池のデータではその後、*Pinus*(マツ属)が増加して、*Cyclobalanopsis*(アカガシ亜属)が減少し森林への人間の影響が現われ始める時期に、*Fagus*(ブナ属)が一時的にわずかに増加する傾向がある(中堀：未発表資料)。深泥池のこの時期にこの試料は対比できる可能性がある。

試料6 (第57図) 木本では *Cyclobalanopsis*(アカガシ亜属)や *Celtis*(エノキ属)、*Pinus*(マツ属)など、組成的には現在京都大学周辺に普通に見られる種類が出てくる。草本類は *Compositae*(キク科)が少しあるが、*Graminae*(イネ科)、*Cyperaceae*(カヤツリグサ科)、*Chenopodiaceae*(アカザ科)などが欠けているのが注目される。古環境としては、草地よりも林を想定するほうが妥当である。

試料5 (第57図) 検出花粉が少なかったが、木本、草本とも出ており、*Cruciferae*(アブラナ科)、*Caryophyllaceae*(ナデシコ科)、*Gramineae*(イネ科)などがみられるところから、草の生える明るい環境を想定しておく。

試料4 全花粉中木本は約30%であり、花粉全体の出現傾向は試料7とよく似ている。推定できる古環境は農地的な草地で、ここでは人間と結び付きの深い *Xanthium*(オナモミ属)も出ている。

4 小 結

縄文・弥生・平安時代の各遺物を含む土層から採取した8点の試料についての花粉分析をおこない、その結果、次のことが推定できた。

試料2・3については、含まれていた花粉を、縄文時代のものとするか、後の農耕期の花粉の混入とみるか、2つの見方ができた。いずれの場合も、土壌の攪乱が頻繁な裸地的環境であると思われるが、そのいずれであるかは、今後データの集積に待ちたい。

試料1については、ごく最近攪乱をうけた陸成堆積物中の花粉分析結果は現在の果樹園、過去の農地などの環境をよく表現していることが判った。

試料6・7では、弥生中期前葉に比定できる試料7では草が多く、裸地的性格が強い。中期中・後葉に比定できる試料6では、草が少なく樹木が多くなる傾向があった。想像をたくましくすれば、弥生中期前葉から後葉にかけて、草地から林への植生遷移を考えるこ

ともできる。しかし今のデータの少ない段階では様々な問題を含んでいるので、今後の遺跡調査の結果を待って再び考察すべきである。

試料4・5では、試料7と花粉の出現傾向が似ており、樹木の少ない裸地的景観が想定できた。

以上、おおざっぱに古環境を推定したが、既述したように陸成堆積物は様々な問題を含んでいる。今後、各時代の堆積物、とくに古環境復原の基準となるべき泥炭層の上・下層を丹念に調査し、より確かな古環境を復原していく必要がある。

なお本章を書くにあたっては、京都大学教養部生物学研究室堀田満教授、同大学院植物分類学専攻矢原徹一氏から、*Chenopodiaceae* の生育環境について助言をいただいた。

第8章 京都大学構内遺跡と京・白河

岡田保良

1 はじめに

構内遺跡として有史以後をも調査することになった契機は、昭和48年、北部構内第8地点(BG36区)の調査による瓦溜の発見であった〔京大埋文研78b〕。ここに始まった平安時代を中心とする遺跡調査は、北部構内から次いで教養部構内に及び、さらに昭和51年に病院西構内、同52年には医学部構内において、平安後期から鎌倉・室町時代にかけての良好な遺跡を発見し、現在ほぼ吉田キャンパス全域に遺跡が及んでいることが明らかとなっている。

調査を重ねるにつれて、遺物に対する年代観も次第に編年的に細分できるようになり、その成果の一部はすでに公表されている〔宇野78〕。それと並行して、遺構に対しても、各時代を追っての理解が進み、現在ようやく全構内的規模で遺跡の様相を把握できつつある。そこで注意されるのは、地域的にみて北部構内にひろく検出できる遺構群と、本部構内以南の遺構群との間に、遺跡の立地状況や遺構自体の性格についてかなり相違する要素を見出すことである。それはおそらく、奈良時代から鎌倉・室町時代にかけての、鴨川以東の開発のあり方に起因するものであり、したがって、構内遺跡全体に対する理解は、平安京郊外の土地利用や鴨東白河における都市的開発を抜きにして得ることはできない。

本章は、そうした観点から、今までに得た構内遺跡の調査成果と、合わせて周辺遺跡の調査、諸研究をふり返り、奈良時代以降の鴨川から東山に至る地域の開発、中でも「京・白河」と並び称された平安後期の鴨東白河における市街地経営のあり方と構内遺跡との関わりを探るものである。

2 京都大学構内遺跡検出の遺構

吉田キャンパスにおける歴代の調査の目録は本年報巻末第5表のとおりである。それらすべてが明確な遺構を検出した調査ではなく、今までに確認している主要な遺構を、調査地点別に第3表および第58図に示す。中には、ごく限られた部数の略報告程度の刊行物以外では公表されていない遺構も含まれているため、ここでは論をすすめるにあたって、まず各地点の遺構を概観してみる。出土遺物等の検討には十分でない点もあり、遺構の年代観については今後さらに吟味せねばならないことを断わっておく。

北部構内の遺跡 北部構内では、溝以外にあまり顕著な遺構を検出していない。それ

らを総括してみると、まず平安前・中期には、第9・第54地点など構内南部から西部にかけて遺跡の中心があり、中央から東北部にかけては遺物の出土すらごくわずかである。ところが平安後期には、中期の遺構検出地点では遺構、遺物の出土が稀薄であり、中央から東よりに顕著となる。鎌倉時代以降になると、性格はよくわからないが、2条ひと組の溝という特徴的な遺構を第11a、第12地点でみとめるほか、第16地点には室町時代の羽釜をまとまって出土した地区がある。こうした中で、溝という方向性をもつ遺構の方位が、時代を問わずおおむね真北より東に振り、平均すれば $N7^{\circ}40'E$ という値になる。まれに真南北方位をさす溝があっても、必ずその一部では東に振るように屈曲しており、計画的に正方位をとったとみなし得る遺構はない。それらのうち、第12地点の溝 SD10・SD13 と第16a 地点の溝 SD18 は、微高地の縁辺に沿う遺構である。また、出土している古瓦類は、奈良前期から室町時代にわたるが、第8・第16a 地点では平安後期、第9 地点では平安中期を中心としてまとまって出土している。

本部構内以南の遺跡 本部、教養部、医学部、病院、熊野各構内では、第50地点から第14地点にかけて、平安中期以前と考える溝があり、病院西構内第39地点でも平安中期の造作とみられる護岸跡を検出しているが、遺物の出土は少ない。北部構内にくらべて、平安中期のこの地域はまだ開発の途についたばかりであったようである。

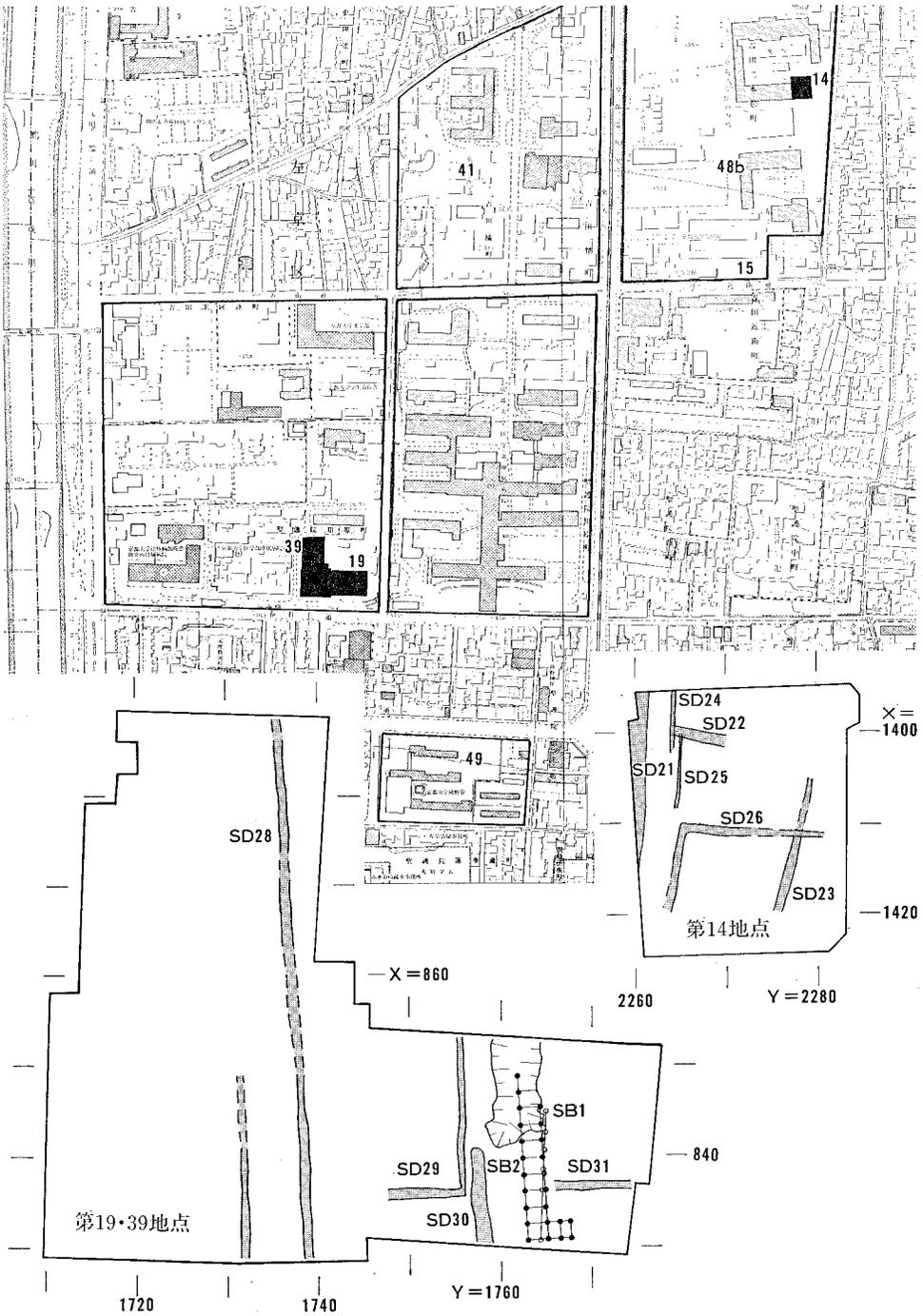
平安後期には、この地域全体に遺跡がひろがり、病院西構内第19・第39地点ではこの時期の遺構、遺物がまとまりをみせる。またこの地点における平安後期から鎌倉初期にかけての溝遺構が、その方位をすべて真北よりわずかに西に振るという傾向も、全構内遺跡を通じてここにだけ見出せる特徴である。なかでも、総延長56mにわたって検出した溝 SD28 は、これを街路に沿う遺構と判断できる点で特筆できる。

一方医学部構内第41地点は、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が顕著で、遺物の数量も夥しい。遺構の方位は、北部構内ほどではないにしても、やはり若干東に振る傾向があるが、室町前期の遺構に限って偏角は 1° 未満である。室町後期の遺構である病院西構内の溝 SD33 もやはり正方位をとり、両地点における遺構の共通性を指摘しうる。

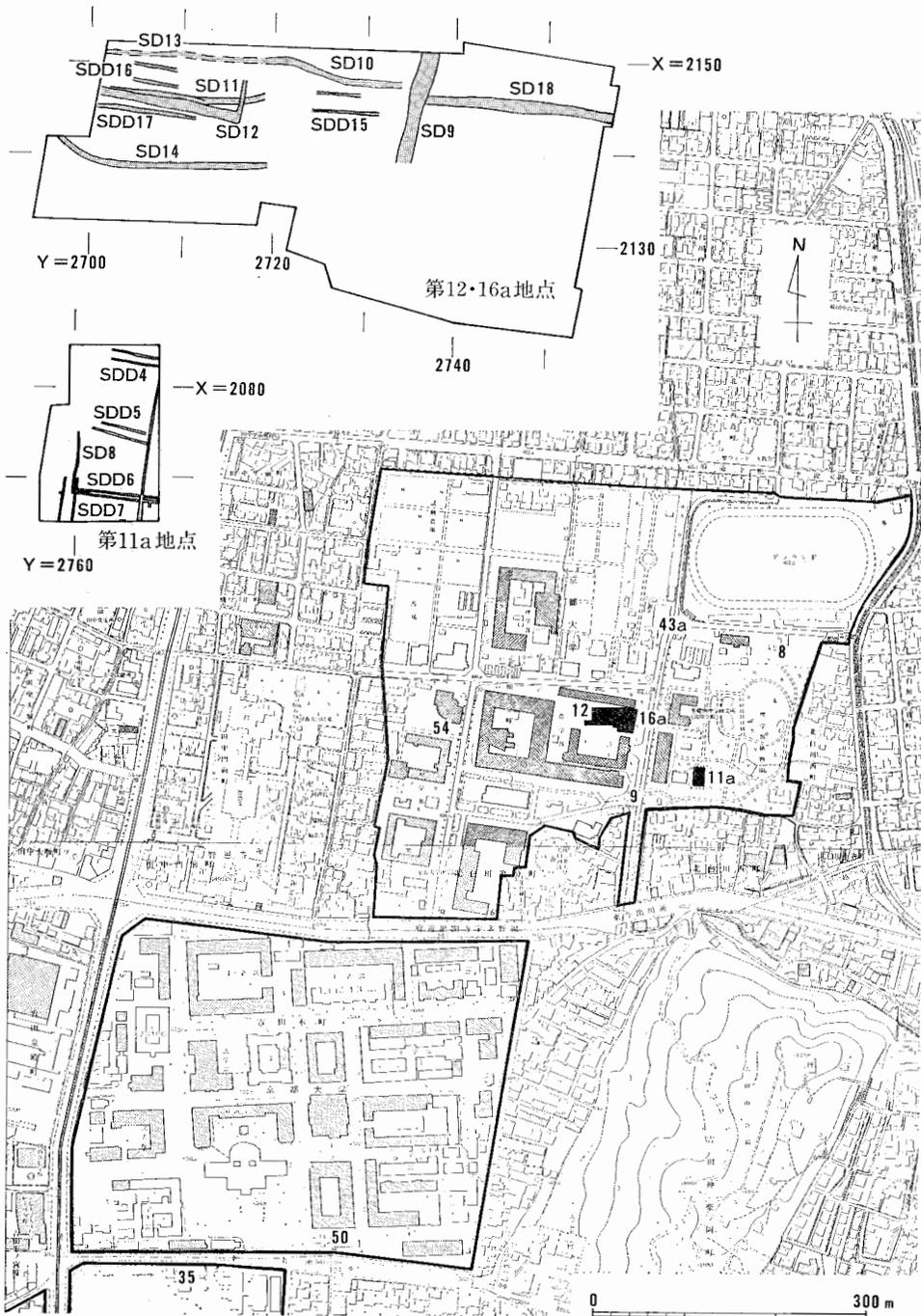
教養部構内でも平安後期以降の遺構を各所で検出しているが、その方位を知りうる遺構は、各時代一貫してすべて東に振り、むしろ北部構内と共通する一面を示す。近世まで降ると、各構内とも一様に田畑化するようで、個別的な方位をもつ遺構はなくなる。北部構内から病院構内に至るまで、耕作に伴うと考えている同様の柵跡を検出しており、方位の点でも $4^{\circ}\sim 10^{\circ}$ 東へ振るのである。

第3表 京都大学構内遺跡のおもな検出遺構

地点	遺構	規模 (m)		検出長 (m)	方向・方位	年代	備考	
北 部 構	8	瓦溜 SX1	—		—	—	鎌倉前期	遺瓦は12~13世紀
	9	溝 SD1 SD2 SD3	幅 0.6	深 0.3	30	東西 N7°20'E 南北 N7°20'E 南北 N6°~8°E	平安中期	西半で僅かに偏角小さい コの字形平面の東辺
			0.6	0.3	7		//	
			0.5	0.3	5.5		奈良前期	
	11 a	溝 SDD4 SDD5 SDD6 SDD7 SDD8	幅 0.3	深 0.15	5	東西 N9°30'E 東西 N12°20'E 東西 N6°~7°E 南北 N6°~8°E 南北 N9°E	鎌倉~室町	2 溝間 1.05m 2 溝間 1.05m 2 溝間は西に狭く東に広い 2 溝間 1.4m
			0.3	0.1	7		//	
			0.3	0.1	10		//	
			0.3	0.1	5		//	
			0.3	0.2	21		//	
	12	溝 SD9 SD10 SD11 SD12 SD13 SD14 SDD15 SDD16 SDD17	幅 2.4	深 1.1	12	南北 N13°E 東西 N19°20'E 東西 0° 東西 N7°30'E 東西 N6°30'E 東西 0° 東西 N3°30'E 東西 N8°E 東西 N7°40'E	平安後期 鎌倉~室町 平安~鎌倉 鎌倉~室町 平安~鎌倉 室町	2ヶ所で屈曲、一部真東西 西端で北へ彎曲 東端で北へ直角に屈曲 SD10の延長上 西端は北へ弧状に彎曲 2 溝間 1.9m 2 溝間 1.7m 2 溝間 1.9m
0.7			0.3	14	//			
0.8			0.2	8	//			
1.1			0.3	15	//			
0.5			0.1	11	//			
0.6			0.3	24	//			
0.2			0.1	5	//			
0.4			0.1	5	//			
0.6			0.2	10	//			
内			16 a	溝 SD18	幅 2.2		深 0.7	
	43 a	溝 SD19	幅 0.7	深 0.3	7	南北 N5°30'E	平安後期	
	54	溝 SD20 火葬塚 SX2	幅 0.5	深 0.3	10	南北 N12°40'E N13°~15°E	平安中期 平安後期	本年報第3章 SD9 同 SX1
一辺 15m 四方		—	—	—				
本部・教養部・医学部・病院・熊野構内	14	溝 SD21 SD22 SD23 SD24 SD25 SD26	幅 1.2以上	深 1.2	20	南北 N4°E 南北 N10°40'E 南北 N15°E 南北 N3°40'E 南北 N3°10'E 東西 N2°50'E	平安以前 平 安 鎌倉~室町 江 戸	SD22と直角に接続 SD22を切る SD22を切る 西端で南折、さらに7m
			1.3	0.4	7		//	
			1.3	0.4	17		//	
			0.3	0.1	6		//	
			0.3	0.1	8		//	
			0.8	0.4	16		//	
	15	溝 SD27	幅 1.4	深 0.6	1	南北	平安後期	
	19	柵 SB1 建物 SB2 溝 SD28 SD29 SD30 SD31	7間以上	深 1.2	14.4	南北 N2°40'E 南北 N3°W 南北 N2°50'W 南北 N1°10'W 南北 N2°50'W 東西 N1°10'W	鎌倉 室町 平安後期 平安~鎌倉 平安後期 平安~鎌倉	南端で東折、回廊状 39地点を含む 南端で西折、さらに10m 西延長上にSD27西行部
			梁行1間桁行8間以上	0.35	18		//	
			幅 1.0	0.4	56		//	
			0.5	0.4	17		//	
			1.9	0.5	10		//	
	0.8	0.2	9	//				
35	溝 DS32	幅 2.8	深 1.0	8	東西 N5°W	平安以前	北肩のみ検出	
39	護岸 SX3 溝 SD33	高さ 1m	深 0.6	20	南北 N15°W 南北 0°	平安中期 室 町		
		幅 1.1	15	//				
41	溝 SD34 SD35 建物 SB3	幅 3.0	深 0.5	40	東西 N0°50'W 南北 N4°E 南北 N8°E	室 町 鎌 倉 //	本年報第2章 SD1 同 SD7 同 SB2	
		1.5	0.4	28				//
南北5間東西3間以上		—	—	—				
48 b	溝 SD36	幅 1.6	深 0.8	4	東西 N3°E	平安後期	本年報第6章 1 SD1	
49	溝 SD37	幅 0.5以上	深 0.2	3.5	南北 N8°E	平安後期	本年報第5章 SD1	
50	溝 SDD38	幅 1.1	深 0.4	1.8	南北 N13°E	平安後期	本年報第6章 2 SD1・2	



第58図 京都大学構内遺跡の



おもな調査地点と遺構

3 白河条坊の検証

構内遺跡の概況は以上のとおりである。その中で、病院西構内の遺跡は、平安後期から鎌倉初期にかけて、他の構内遺跡と様相を異にする点が顕著である。これは、法勝寺造営に始まる院政期を中心とする白河の地の開発が、新たな街割を伴っていたことによるものと考えられる。

白河における街割とそこに配された寺院及び御所の比定に関しては、古くに江戸時代の地誌類にも多く掲載されており、寛延3(1748)年の森幸安の作図にかかる「中古京師内外地図」にも詳しく描かれている。降って大正年間の西田直二郎氏による法勝寺に関する論考〔西田25〕を経て、福山敏男氏がそれらに誤謬の多いことを指摘し、洛中同様の条坊の存在と六勝寺の規模や位置について詳細に再検討を行なった〔福山43〕。次いで杉山信三氏は、尊勝寺比定地の発掘調査結果をふまえて福山案を修正し〔杉山・岡田61〕、加えて六勝寺以外の白河御堂と院の御所の規模、位置を文献史料をもとに考定した〔杉山62〕。ほかにも林屋辰三郎氏の法勝寺に関する論考〔林屋60〕や津田菊太郎氏による条坊復原案〔津田78〕がある。こうした諸研究によって、文献の上から白河のかつての街並みを復原する試みは、すでに尽くされた観すらある。

一方、これらを補完し、新たな考証資料を提供しているのが一連の発掘調査である(第4表、第59図⁽¹⁾)。表中の比定物件は、一応報告者の見解によったが、これらはほぼ杉山案に基づくようである。しかし、a地点の建物が尊勝寺に属するとしても、それが塔跡なのか南大門なのか議論が分れたり、昭和53年12月末現在、京都会館西方で調査中の長大な建築遺構が検出されても、直ちに比定する物件が見あたらないなど、街割の実体はなお漠としていて曖昧な点が多い。街割の軸となすべき二条大路末についてすら、洛中と同様に17丈をとったものか否か判然としていない⁽²⁾。結局、白河と称される地域全体において、街路をどのように配置し、街区にどれほどの広さを与えたかという街割の計画性をまず明らかにする必要がある。鴨東において、平安京の条坊に倣った街割が存在したことに關する確実な資料はないが、先学の指摘する如く、白河辺の東西方向の街路が、洛中の呼称に末を付して呼ばれる点や、発掘によって検出される遺構が、正方位またはわずかに西に振る点が、鴨東においてむしろ特殊な方位であることから、街割は条坊の規格に則るものとして論を進めたい。

白河天皇によって最初に造営されたのは、二条大路末に西大門が開かれる法勝寺であり、この法勝寺西辺の築垣が東西方向の、そして二条大路末が南北方向の街割の基準となった

第4表 白河地域におけるおもな検出遺構

地点	遺構	規模・構造	方向・方位	比定物件	参照文献
a	建物基壇	東西16.5m, 南北12m	N2°50'20"W	尊勝寺南大門	杉山・岡田61
b	溝	石組, 幅0.8m, 側高0.3m, 検出長67.8m	南北 0°	尊勝寺	同
c	建物	柱跡, 方5間(11.1m)	0°	円勝寺五大堂	円勝寺発掘調査団71
d	池汀	桁行36m, 梁行25.2m, 5間4面総装階	—	延勝寺庭園	六勝寺研究会72
e	建物	—	N0°22'E	尊勝寺灌頂堂	工業・藤村73
f	池汀	—	—	法勝寺庭園	木村・畑・上原74
g	建物	桁行51.2m, 梁行25.5m, 7間4面総装階	N0°12'W	法勝寺金堂	杉山・梶川75, 梶川77b
h	築垣	凝灰岩幅1m, 溝幅1.1m, 深さ0.3m	南北	得長寿院	梶川77a
i	溝と段	瓦石組溝	南北	尊勝寺	梶川・渡辺77
j	築垣	南溝・基壇・犬行・北溝各幅0.8, 2.4, 3, 2.6m	東西 N2°50'40"W	最勝寺北	同
k	溝	幅0.9m, 深さ0.2m, 検出長10m	東西 N6°30'W	室町時代福勝院	京都府教委78
l	溝	幅1.0m, 深さ0.35m, 検出長56m	南北 N2°50'W	法勝寺西大路より六町西	京大埋文研78a
m	溝と壇	溝幅3m, 壇幅3m, 検出長40m	東西 N0°50'W	室町時代遺構	本年版第2章



第59図 白河条坊とおもな調査地点(縮尺1/7500)

ことは想像に難くない。すでに g 地点の調査によって、法勝寺金堂の規模と位置は確定している。また、先の福山論文中に引用されている、陰陽頭による承保3(1076)年の勘文中には、洛中高倉小路西辺から法勝寺西築垣まで664丈2尺、東京極大路中央から法勝寺金堂東南角まで583丈6尺という当時の計測値が記されている。ただし、福山氏も指摘するように、この計測に用いられた尺は平安京造営尺よりも伸びており、1尺は1.035平安京造営尺となる。⁽³⁾ 平安京造営尺を0.2991mとして〔佐々木78〕、承保勘文中の値を換算して導くと、金堂東端の位置は、発掘による推定位置より50mばかり東方へはずれる。しかし、洛中における精度からみて、その大きな誤差は多分鴨川を越える計測のためであり、陸地部ではかなり精確であったと考えられる。したがって、664丈2尺から高倉小路西辺と東京極大路中央間の承保尺による値132丈4尺を差引いた531丈8尺と、583丈6尺との差518尺は、西築垣と金堂東端との距離とみて大きな誤りはないと考える。これによって、金堂東端から西築垣までは、ほぼ160.3m前後と確定しうる。

さて、ここで今日までに確認されている遺構のうち、直接街路に接すると考えるものを抽出してみると、 a 地点建物、 j 地点築垣、 l 地点道路東側側溝をあげることができる。しかもこの3つの遺構に限って、いずれも方位を真北から $2^{\circ}50'$ 前後西へ振るという共通点がある。偶然の一致でないとするれば、その方位こそ、白河の街割を施行したときの方位ではなかったろうか。そこで、京都市発行の2,500分の1の地図上に、すでに与えられた法勝寺西築垣をのせる直線を、 l 地点(第58図参照)の溝と平行に描いて、これら2直線間を計測すると約837mという値を得る。この間に、6町分240丈の街区と小路4筋分16丈とをおさめると残りの丈尺が、法勝寺西大路(広道)とその4町西の大路(今朱雀)との幅員の和になるはずである。この場合の造営尺は、承保勘文の尺度に拘泥する必要はなく、むしろ調査担当者から報告のある法勝寺0.303m〔梶川76〕、尊勝寺0.301m〔工楽・藤村73〕に近い値を想定するべきで、2大路の和は20丈と推定しうる。すなわち、837mは276丈にあたるとしなければならず、その造営尺は0.3032mとなり、首肯しうる値を導くことができる。しかも広道を12丈、今朱雀を8丈とすれば、尊勝寺南大門と推定される a 地点建物の中心に、広道から2町西の小路をおくことができる。さらに、 j 地点築垣から同じ造営尺によって南に40丈とると、まさに a 地点建物の中心を通ることになり、この遺構を東西2町の敷地南面中央に開かれた南大門跡とする推定がさらに有力となる。

このようにして、東西方向の街割は得ることができたが、南北方向については二条末北辺と冷泉末南辺とを確定したにすぎず、他に適切な資料がない。ただ、二条末を17丈とす

るなら、洛中と同様に北へは2町おきに、幅10丈の大路をとるのが妥当のように思える。第59図に示す街割は、あくまでも白河における方格地割の基本型を示したままで、六勝寺や院の御所の占地については、この後のこととしなければならない。

4 京都大学構内遺跡の北と南

院政期に、白河の地に営まれた院の御所や御堂建築のうち、最も北にあたるのは賀陽院藤原泰子御願の福勝院である。仁平元(1151)年に創始され、その南西門を近衛末に開いていたという〔杉山62, 川上77〕。近衛末が今の近衛通りよりも北に位置することは、前節の考証結果からもあり得ないようであるが、教養部構内では平安後期の遺構、遺物が比較的多くまとまって出土しており(第58図第15・48b地点)、白河条坊がかなり北まで及んでいた可能性は大きい。しかし、病院構内より北では、今までに方位を西に振るかまたは正方位の同時代遺構を検出していない。法勝寺創建以降の白河における市街地の開発が、漸進的なものであって、ある時期に既存の条坊の方位と異なる街割がおこなわれた可能性もある。福山論文中に、法勝寺西大路が北へ神楽岡まで通じたのは大治2(1127)年7月のことであったとの指摘があり⁽⁵⁾、大治2年といえは法勝寺供養から50年を経過しており、白河に存在したと考える条坊の街割は、当初からその計画域を限定したものではないことを窺わしめる。もっとも、二条末に沿っては、尊勝寺建立の康和4(1102)年以前に計画された街割があって、その街路はすでに病院構内にまでは達していたのであろう。としなければ、尊勝寺に遅れること16年で創始された最勝寺が、法勝・尊勝両寺の間に寺域を与えられたことや、a地点建物が小路の正面に位置することが解せない。

ところが、年代は降るが、医学部構内m地点から病院西横内にかけては、正方位をとる遺構群があり、しかもm地点で確認した40mも続く溝と土壇は、街路に沿っていた可能性が大きく、室町時代には確実にそのような敷地割が存在したことを認めうる。福勝院の退転の経緯は弘安10(1287)年以降明らかではなく〔杉山62〕、室町時代には、吉田・熊野両社の境内地が、本部構内以南のほとんどを覆う〔川上77〕ことを考えれば、両社領内における再開発を考慮しなければならないだろう。

一方北部構内では、平安時代以前から方位を東に振る地割が、現代に至るまで存続しているとみるほかない。古代条里制の施行に関しては、白川水系の氾濫にしばしば見舞われていたような扇状地にどれほど施行されたかは疑問であるが、米倉二郎氏によれば、百万遍の東北に「十二坪」という坪名があったとのことである〔米倉56〕。いずれにせよ正方位による地割は全くおこなわれることがなく、微高地に沿うような溝が各所でみられる点から

みて、地形に沿った地割が優先していたものと思われる。北部構内南部は「神楽岡吉田寺」の境域が及んでいたと考えているが、それとても古来の地割に沿うものであったとするほかない。もっとも、個別の伽藍は今までに検出されたことはなく、北白川廃寺塔跡が正方位に近い方位(N1°40'E)を示すように〔浪貝・梶川編76〕、建物がどうであったかは判らない。

5 まとめ

京都大学吉田キャンパスにひろがる広大な遺跡が、奈良時代以降その北と南で様相を異にすることは、以上のとおりである。平安後期の白河における、条坊を模した市街地形成は、おそらく周辺の条里またはそれに準じた開発とは全く別の手法によるものであり、それが、構内遺跡のあり方に大きな相違をもたらすことになった。そこにもたらされた遺構のN2°50'Wという偏角について、それが本来正方位を意図していた結果の誤差であるともみなせるが、当時の土木事業に磁石の使用があったとすれば、地磁気の永年変化にはみえるべきものがある。広岡公夫氏によれば、12世紀中葉に偏角は西から東へと移るが、12世紀初頭にはN3°W前後の値をとっている〔広岡70〕。条里制の研究の中には、その変遷を地磁気の変化に基づいて解明しようとする試みもあり〔渡辺68〕、看過できない問題ではあるが、現段階ではそれを十分論じうるものではない。

そのほか、京都大学構内遺跡では、調査を重ねてきたとはいえ、歴史上、構内またはその近辺に比定しうるはずの、吉田寺、福勝院、白河北殿、吉田社旧地などが、未だ明らかにはなっていない。これらは今後に残された課題である。

〔注〕

- (1) 表記した遺構以外にも、いくつか調査されているが、一応の報告がある遺構のみ掲載した。
- (2) 二条大路末の幅員については、まず福山氏が17丈を提唱し〔福山43〕、次いで杉山氏が8丈を推し〔杉山・岡田61〕、最近では、地点調査担当者が再び17丈をとりうるとした〔工楽・藤村73〕。
- (3) 同勘文中、六条坊門小路から二条大路北辺までと押小路北辺に至る計測値が、それぞれ623丈2尺と568丈2尺であり、これを延喜式に則る丈尺645丈、588丈に相当するとして導いた。
- (4) 上記(3)の承保の2数値の差55丈は、569.3平安京造管尺となり、押小路北辺から二条大路北辺までの延喜式による値57丈に対し、0.1%程度の誤差しかない。
- (5) 『史料総覧』所収「鯨珠記」の引用による。

第9章 鴨東の開発

——平安京と京近郊——

宇野隆夫

平安京は延暦12(793)年に、その造営を開始し、以後1000余年を経て、現在の京都市街となる。その古代から近・現代に至る遺跡は、最近の調査件数の増加によって、次第に明らかにされているが、平安京の東を南流する鴨川以東の地(鴨東)にも同時代の遺跡が存在する。京内の遺跡と京近郊の遺跡とがどのような関わりをもって形成されたかを知ること、日本の「都市」を考察するうえで、重要な視点を与える。本章では、文献資料と考古資料から、現在までの知見をまとめ、鴨東を中心にこの問題を考えることにする。

1 文献に現われた山城国愛宕郡

平安時代の官撰国史(『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』、以下『後紀』、『続後紀』、『文実』、『三実』と略す)を中心にして、山城国愛宕郡と関係する資料をみると、葬送、寺院と神社と邸宅、その他の記事がある。これらは相互に関連するものであるが、以下、順にみることにする。

葬送 天皇家と貴族の葬送記事としては次のようなものがある。

『文実』斉衡3(856)年6月25日条には、源潔姫の葬地を賀楽岡(神楽岡、現在の吉田山)白川地に擇ぶ、とみえる。源潔姫は、嵯峨天皇の女で藤原良房夫人、清和天皇の外祖母にあたる。そして『三実』天安2(858)年12月9日条に、毎年荷前の幣を献ずる十陵四墓を定めるが、この中に源朝臣潔姫愛宕墓の名がある。同墓には貞観元(859)年5月15日に守冢一戸を充て、貞観5(863)年3月15日には兆域地四町を四履の限と定める。

『三実』貞観14(872)年9月4日条には、藤原良房を愛宕郡白川辺に葬る、とある。この藤原朝臣良房愛宕墓は同年12月13日に十陵四墓に加えられ、十陵五墓となる。

『三実』元慶4(880)年12月7日条には、清和天皇を愛宕郡上粟田山に葬り(火葬し)、遺骸を水尾山に置く、とあり現在、京都市左京区黒谷町に火葬塚が、同右京区嵯峨水尾に山陵が比定されている。ただし杉山信三は、上粟田は京都市左京区北白川をさすとしている〔杉山55〕。また吉田山付近にはこのほか多くの陵墓が比定されている。文献にみえる賀楽岡白川地、白川辺の正確な位置は不明であり、現在の陵墓の比定もすべて正しいとは考えられないが、吉田山付近に、天皇家およびそれと密接な関係をもつ人々の葬地が存在したことは認めてよいであろう。

なお、『三実』貞観8(866)年9月22日条に、愛宕郡神楽岡辺側の地に葬斂することを禁じているが、その理由は賀茂御祖神社の隣近の地であることによる。これは『後紀』大同元(806)年3月23日条に、洛北に山火事があり、山陵地に定めた山城国葛野郡宇多野が賀茂神に近いためであるとされた記事と同様のものである。福山敏男は、延久5(1073)年5月以後、賀茂神の訴えが功を奏し、皇室関係の葬場として神楽岡東を選ぶことを避けたと推定している〔福山69〕。

鳥辺山(京都市東山区今熊野付近)については、光孝天皇の即位後、『三実』元慶8(884)年12月16日条に、藤原澤子中尾山陵の四至の界を定める、とみえる。また同12月20日条に新たに十陵五墓を定めるが、藤原良房と源潔姫の墓が除かれ、藤原澤子鳥戸山陵、藤原総継墓、藤原数子墓が加えられる。藤原澤子は仁明天皇の后で光孝天皇の母、藤原総継は光孝天皇の外祖父、藤原数子は同外祖母である。次いで同12月25日条には、愛宕郡鳥戸郷地四町を藤原総継の墓地とし、同郡八坂郷地十町を藤原数子の墓地とする。『三実』仁和元(885)年10月8日条には藤原澤子の山陵に守家五戸を置き、藤原総継と藤原数子の墓にも各一戸をおく、とみえる。

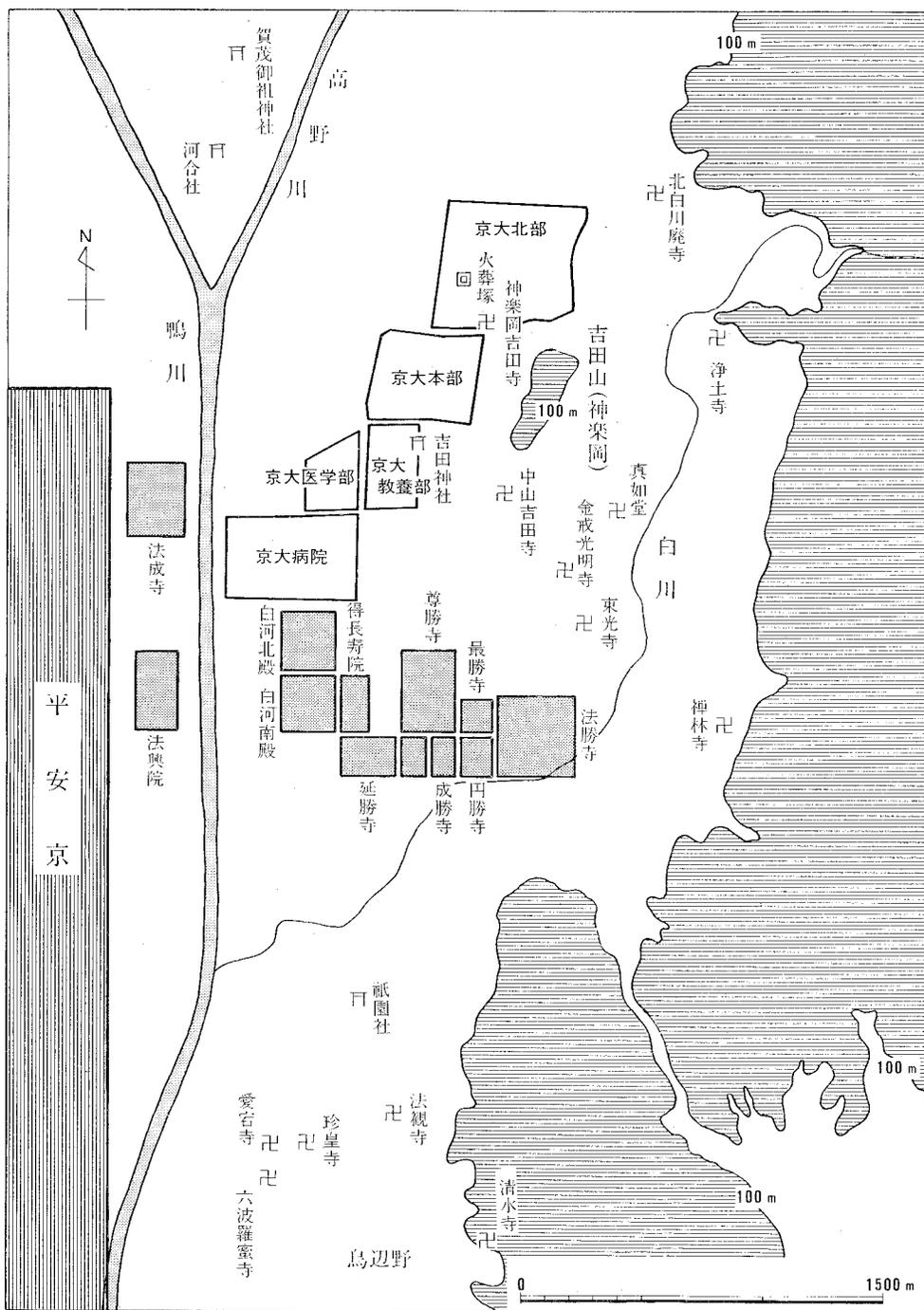
『三実』仁和3(887)年5月16日条には、愛宕郡鳥部郷榛原村地五町を施薬院に与える、とあるが、施薬院使は、院所領の山がかつて榛原村にあり藤原氏の葬地であったが、元慶8(884)年12月16日の詔によって中尾山陵に含められたため、氏人の葬送が便を失っていることを奏し、従来通りの葬送が許される。

このほか『日本紀略』には早く、天長3(826)年5月10日条に恒世親王を愛宕郡鳥部寺以南に葬るとみえる。

鳥辺山付近に比定される天皇陵としては、後白河天皇法住寺陵(京都市東山区三十三間堂廻り)、後堀河天皇観音寺陵(京都市東山区今熊野)などがあるが、平安時代のこの地はおもに藤原氏の葬地であった。

天皇家と貴族以外の人々の埋葬についても、支配者の目を通してのものであるが、若干の資料がある。

『後紀』延暦16(797)年1月25日条には、愛宕郡と葛野郡の郡人は死者がある毎に、家側に葬ることが常となっていたが、この地は京に近く穢れを避けるべきであるので厳しく禁止し、違反するものは「外国」に移貫する、との勅がみえる。次いで『三実』貞観13(871)年閏8月28日条で、百姓の葬送放牧の地を、葛野郡五条荒木西里六条久受原里、紀伊郡十条下石原西外里十一条下佐比里十二条上佐比里に定めるが、これは先の禁止の勅に対応する



第60図 平安時代の鴨東(『京都の歴史』第10巻別添地図をもとに作成、河川の流路と京大構内は現代。)

ものである。愛宕郡については記述がないが、別に定めているのか、天皇家と貴族の葬地があるため百姓の葬地を設けなかったかは不明である。同条に「愚昧の輩、その意を知らず、競いて占宮を好む」と記すように、このような規制がどの程度徹底したかは疑問もあるが、少なくとも為政者は京外に身分・階層によって明確に分けた墓域を設定しようとしていることが判る。

寺院と神社と邸宅 『日本紀略』貞元2(977)年4月21日条には「吉田寺」、『権記』長保3(1001)年6月20日条には「吉田社北三丁内有葬送之處」、『小右記』永祚元(989)年9月26日条には「吉田卒堵婆供養所」の名がみえる。杉山信三は、この吉田寺(神楽岡吉田寺)が京都市左京区北白川追分町付近にあり、吉田社北葬送所(卒堵婆供養所)に付属する寺院であることを推定している〔杉山54〕。この葬地(葬送所)と寺院との関係は、鳥辺山と愛宕寺(鳥部寺)、平安京の北では蓮台野と蓮台寺、および衣笠と香隆寺との間にもみることができる。奈良前期に建立される広隆寺、法観寺、北白川廃寺が在地豪族の氏寺的性格をもつと推定できるの⁽³⁾に対して、平安時代に始まる上記の寺院は葬地と密接な関係をもつという大きな差異がある。福山敏男は9世紀に陵墓と密接に結びついた寺院が出現し、10世紀にはその関係が一層緊密になることを明らかにしている〔福山69〕。

『三実』元慶3(879)年5月1日条には、鴨川の東に粟田院(藤原基経の山荘)があり、太上天皇(清和)が清和院から遷じた、とみえる。そして『三実』元慶4、880)年11月25日条には円覚寺が右大臣粟田山荘である、と記す。これは貴族の私邸が天皇家の崇仏と結びついて寺院となる例である。円覚寺の位置については、京都市左京区北白川にあるとする説と同岡崎にあるとする説とがあるが、杉山信三は北白川に比定している〔杉山55〕。

『三実』貞観14(872)年2月7日条には、藤原氏宗が没し、在原行平等を東山白河第に遣わす、と記す。また『本朝文粹』巻9 藤原実綱の詩序(康平3(1060)年作)には白河院が藤原基経の別業であるともえ、『袋草子』巻1 能宣集(大中臣能宣、正暦2(991)年没)には、白河殿がもと公忠親王のものであり、藤原忠平に譲ったとある。また鎌倉末期の文献である『帝王編年記』承暦元(1077)年条に法勝寺の地が藤原氏の別業であったと記す。福山敏男は白河第と白河院(殿)との関係は不明であり、白河院については良房や基経の所有であったかどうかは問題であるが、公忠以後1世紀以上にわたって藤原摂関家の所領であったことを示している〔福山75〕。

『三実』貞観5(863)年9月6日条には愛宕郡道場一院が定額に預かり、禅林寺の名を賜う、との記事があり、現在も京都市左京区南禅寺の北に永観堂として存続している。また

『統後紀』承和4(837)年2月27日条には、愛宕郡八坂郷の八坂寺に接する地に、菅野真道が桓武天皇のために建立した道場(八坂東院)があり、その四至を一院として僧一口を置き護持することを許す、と記す。これは道場が昇格した例である。

道場に神を祀る例は『統後紀』天長10(833)年12月1日条にみえる。同条には愛宕郡賀茂社以東一許里に岡本堂と呼ぶ道場があり、これは神戸百姓が賀茂大神のために建立したことを記す。この道場は検非違使によって毀却されていたが、この日に神分であることを認められて再建を許される。

現在、吉田山西麓に社殿がある吉田社は、藤原山蔭(仁和4(888)年没)が春日社の四神を祀って創始したという伝承があり、山蔭の子孫が一条天皇の母后になったことから、永延元(987)年に吉田祭が朝廷の祭に昇格したという〔福山77〕。現在の社殿は応仁2(1468)年の兵火で焼失した後、延徳元(1489)～明応元(1492)年に再興したものであり、福山敏男は永徳4(1384)年2月24日將軍義満寄進状に記した社領の四至そのほかから、旧社地を京都市左京区吉田京都大学教養部南半部に比定している〔福山77〕。

賀茂社については、賀茂祭、賀茂齋王、雨乞い・雨停止祈願などの記事がしばしば文献に現われる。『三実』貞観4(862)年4月22日条をはじめとして、賀茂祭の前後の日は、諸衛が警固し、禰宜はしばしば官位を与えられる。賀茂社が大きな権威を有していたことは、天皇の葬送にまで干渉していることからもうかがわれる。

その他 以上のほかの記事としては天皇の遊獵、人の貫付、土地の分与、山城国の任官に関するものがあるが、ここでは天皇の遊獵と、人の貫付についてみる。

『後紀』延暦15(796)年11月29日条をはじめとして、天皇が遊獵する記事がしばしばあるが、その遊獵地として愛宕郡栗栖野の地名がみえる。それに対して『統後紀』承和11(844)年11月4日条によると、賀茂社の禰宜が、王臣家人や百姓等が北山で鹿麩を取って川で洗うため川が穢れると訴えた結果、水源地での遊獵を禁止する勅が出される。また『三実』元慶6(882)年12月21日条には、愛宕郡栗栖野は天長年中に遊獵を禁じたが、重ねて禁ずるとみえる。同条では他の多くの場所でも遊獵を禁じている。『統後紀』天長10(833)年9月25日条には依然として仁明天皇が栗栖野で遊獵する記事がみえるが、その頻度は低下する。京内外の清浄化という名分の前には天皇も自制せざるをえなかったようである。

『統後紀』嘉祥2(849)年1月3日条には、愛宕郡人の客公成人の本居を改め、右京六条三坊に貫付するとある。この頃、畿内と畿外の諸国から平安京の京域に人を貫付する記事がしばしばみえるが、同条も同様のものである。それに対して『三実』貞観6(864)年8月8

日条には、近江国犬上郡人の春良宿禰諸世を山城国愛宕郡に貫付するとある。同条には播磨国飾磨郡人を摂津国嶋上郡に貫付するとの記事もあり、この条をもって愛宕郡が京域に近い扱いを受けるようになったとまでは言えないが、以後、愛宕郡には恒常的に人を貫付することが注目される。その出身地は、甲斐、美濃、近江、丹後、備前、讃岐の諸国が記されている。

以上9・10世紀を中心とする文献資料の中で、鴨東と直接関係するものをみると、吉田山付近と鳥辺山付近に葬地(葬送地)と寺院とがあり、資料もこれに関するものが多い。その間の地域では、八坂郷に八坂寺と八坂東院、岡崎には白河院があると記す。また各所に小規模な道場が建ち、神仏を祀ったらしい。そして愛宕郡は京外ではあるが、京と密接な関係があり、京近郊の性格をもっていたことが判る。

2 鴨東の遺跡

現在までに鴨東で調査された遺跡のうち、平安時代以後の遺構と遺物がまとも出土しているのは、北白川廃寺、京都大学構内遺跡、六勝寺関係の遺跡であり、そのほかに若干の報告例がある。以下年代順にその概要をみることにする(第60図)。

平安前・中期 北白川廃寺〔梅原39, 浪貝・梶川編76〕, 京都大学構内遺跡から遺構と遺物が出土している。

北白川廃寺は東方堂宇址と西方塔址が調査されているが、2寺併存説もある。奈良前期から平安中期までの瓦が出土するが、平安前・中期のものとしては栗栖野瓦窯系と小野瓦窯系の瓦が出土している。

京都大学北部構内でも、平安前・中期の遺物が出土する。これには栗栖野瓦窯と小野瓦窯系の瓦以外に、奈良型式の重圏文軒瓦、西賀茂瓦窯と河上瓦窯の軒瓦、緑釉瓦片などがあり、供給源が多様である点は北白川廃寺と異質であることが指摘されている〔上原78〕。瓦のほかに、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、銭貨などが多数出土していて、溝や土坑を発見している。現在までのところ遺物はBE32・33区の北部からBG32・33区の南部に至る地域と、BD33区付近とでまとも出土している(以下地区名は図版1を参照)。

病院構内ではAF14区で護岸跡を検出したが、ここからは平安中期の遺物が出土している。この護岸跡は高野川系の礫で埋積し、発見地点では東南流するが、大きくは西南流する高野川、もしくはその支流の護岸跡と考える。ただしこの時期の他の遺構は発見していない〔京大埋文研78a〕。

岡崎では法勝寺跡から平安中期の蓮華文軒丸瓦小片1点が出土しているが〔木村・畑・

上原75), 当時の岡崎の状況を示すような遺構と遺物は発見されていない。

平安後期 京都大学北部構内では, BG36 区の瓦溜〔京大埋文研78 b〕, BE29 区の火葬塚(本年報第 3 章), そのほかの遺構を発見している。遺物は北部構内のほぼ全域から11・12世紀の土器や瓦が出土する。

病院構内では, 平安中期の護岸が洪水で埋没するが, その後, 川筋を北西へ移したらしく, 護岸が砂礫で埋積した後に平安後期以後の遺跡が立地する。11世紀後葉以後の遺物が出土するが, 12世紀に遺物の出土量が急激に増加する〔京大調査会77, 京大埋文研78 a〕。

また北部構内と病院構内の間に位置する教養部構内と医学部構内には12世紀中葉以後を主体とする遺跡が形成される(本年報第 6 章 1, 第 2 章)。

なお遺構の方位については, 北部構内を中心とする地域では方位を真北から東へ振り, 病院構内を中心とする地域ではほぼ真北をさす⁽⁴⁾。

岡崎には, この頃, 院の御所と六勝寺が造営されるが, これについては多くの調査報告と研究がなされている。ここでは細かく触れる余裕がないため, 概要をみるのにとどめる。

六勝寺は, 法勝寺(承暦元(1077)年12月18日供養)⁽⁵⁾, 尊勝寺(康和 4 (1102)年 7 月 21 日供養), 最勝寺(元永元(1118)年12月17日供養), 円勝寺(大治 3 (1128)年 3 月 13 日供養), 成勝寺(保延 5 (1139)年10月26日供養), 延勝寺(久安 5 (1149)年 3 月 20 日供養)の順に造営する。位置については, 二条大路を鴨東に延長した道路の正面に法勝寺の西大門が面し, 以後この延長された二条大路にそって造営されたという〔福山43〕。また院の御所について, 白河南殿は二条大路末北, 大炊御門大路末南, 鴨川東, 仏所小路西に, 白河北殿は大炊御門大路末北, 中御門大路末南, 鴨川東, 仏所小路西に比定されている〔杉山62〕。

現在, 復原されている白河条坊〔杉山62〕については, 発掘調査で検証した報告を知らない⁽⁶⁾。ただし, 法勝寺金堂〔杉山・梶川75, 梶川77〕, 尊勝寺建物・溝〔杉山・岡田61〕, 尊勝寺P地区建物〔工業・藤村73〕, 尊勝寺跡推定地築地〔梶川・渡辺77〕等の遺構は, ほぼ真北をさし, 真北方位の地割りが存在したことを推定させる。

鎌倉・室町時代 京都大学北部構内では, 鎌倉時代にも瓦葺の建物があり, BE29 区の火葬塚も原形を留めている。しかし遺構は著しく減少して, 室町前期には火葬塚も姿を消す。そして室町中期頃にはしばしば瓦礫溜をつくり, この頃から水田になる地域が増える。なお BG34 区では室町後期の石仏が出土し, 葬地の伝統をうかがわせる。

病院構内 AE15 区では鎌倉時代にも依然として相当量の遺構と遺物を出土し, 室町前・中期にはそれが増加する傾向にある。室町後期以後は遺構と遺物が激減し, 畑地化する。

医学部構内 AO18 区は病院構内と同様に、室町前・中期に遺構と遺物が増加し、室町後期には遺物が減少して水田となる。なお室町前期以後の遺構には、墓と考える土坑と建物とがある(本年報第 2 章)。

岡崎では尊勝寺跡推定地で鎌倉時代から室町時代に至る遺物が出土しているが(梶川・渡辺77)、遺跡の実態は明らかでない。文献資料によると、法勝寺はしばしば焼失と再建を繰り返すが、享禄 4 (1531) 年以後は再建されなかった[福山75]。他の六勝寺も室町後期には廃絶しているらしい。

3 まとめ

以上で鴨東と関係する文献と考古資料を概観したが、鴨東の開発と平安京との関係を知るためには、まず平安京を造営するにあたって、どのような都とその近郊が意図されていたかを知る必要がある。

平安京の中では、埋葬や私的な堂舎の建築を禁止するのをはじめとして、各種の規制を行なったことが知られている。律令国家の王城には、定められた区域に定められた格式の建物が建つことを要求しているのであるが、このような施策は京内だけにとどまらない。先にみたように京近郊では、身分・階層に応じた葬地を設定し、天皇家や貴族の葬地には寺院を設置する。そして一般の埋葬を規制し、私的な堂舎は検非違使が毀却することもある。京内では現世の格式を重んじているとするなら、京近郊では死後の格式を重視しているといえよう。西川幸治は、「都城」がそれじたい律令体制を象徴するものであり、その実現に多大な努力がかたむけられたことを示している[西川72]。鴨東に関しては、吉田山付近と烏辺山付近が葬地であり、それぞれ吉田寺と愛宕寺(烏部寺)が付属する。その間の地岡崎は藤原氏の別業であった。

勿論このような施策が完全に実施されたわけではなく、違反例が次第に増加する。そして平安京は完成する以前に、中世都市へむけての変質が始まったとみるのが妥当であろう。しかし少なくとも平安前・中期には、京内と京外、京外の葬地・寺地とそれ以外の地について、為政者に明確な認識の差があったといえる。この時期の京都大学北部構内の遺跡は、この葬地・寺地にあたる。

平安後期になると、この様相は変化し、岡崎に平安京と同様の遺跡ができる。京近郊の再開発にあたっては、葬地と葬地の間の地が選ばれたことが判る。この地は平安前・中期の遺跡が不明である。また愛宕郡の北部では条里の地割が方位を東に振るが南部では不明である(葛野郡は北部では方位を西へ振り、南部では真北をさす)[米倉56]。したがって、

平安後期の鴨東開発が、従来の地割を改変してなされたか、それにそって行なわれたかは、条里施行の有無を含めて不明である。しかし、いずれにせよ、平安京は本来、長方形で左右対象の形に意図され、色々の規制を行なっていたのであり、その平安京の形を変えると(7)いう行為を公的に行なうことは重視する必要がある。

「平安京の形を変える」という点では、藤原道長の法成寺造営(寛仁4(1020)年建立)に、すでにその端緒をみることができる。法成寺は、東京極大路の東、土御門大路南、近衛大路北の、平安京と鴨川との間の位置に造営し、南大門から二条大路末に通じる道路を東朱雀大路と称する。そしてその南には以前から藤原兼家の私邸(二条京極第)があり、正暦3(992)年に法興院となるが、これは二条大路末に面する。また平安京の形が変わる根本的な理由は、右京がすたれ左京が盛んになっていくことや、京を維持する支配機構の変質に求めることができよう。しかし、その規模と計画性と公的に行なったという点とからみて、法勝寺造営にはじまる六勝寺と院の御所の造営が平安京変質の大きな画期であることに変わりはない。

この頃、京都大学北部構内には火葬塚をつくり、病院構内には方位がほぼ真北をさす遺構からなる遺跡ができるが、これは従来の葬地・寺地と南に新しく開発した地域との関係を示すものである。この時、高野川の流路を北西に移しているが、この大工事は単なる洪水の防止だけでなく、南の岡崎を中心とする地域の開発に必要だったのであろう。

鎌倉時代になると京都大学北部構内では遺構と遺物が減少する。それに対して病院構内では平安後期には及ばないが、依然として相当量の遺構と遺物を出土し、両地域の盛衰は対照的である。

室町時代になると、吉田山付近は天皇家の葬地としてはすたれ、もはや石仏に葬地の伝統を残すだけである。京都大学北部構内でもBE29区の火葬塚は室町前期頃に姿を消し、室町中期以後は水田になる地域が増加する。それに対して病院構内では室町前・中期には逆に遺構と遺物が増加する。また医学部構内AO18区では室町前期以後、建物に近接して墓と考えうる土坑を掘るようになる。平安時代には厳しく禁じられた「死者を家側に葬ること」がもはや通常のこととなっていることが判る。この岡崎を中心とする地域は、しばしば兵火を受けながらも、寺地・邸宅地として存続するが、室町後期から江戸前期にかけて田畑化していく。そして、この段階では、もはや北部構内と病院構内は、遺跡の性格も大差のないものとなる。永禄12(1569)年には織田信長が二条御所(二条城)をつくり、天正18(1590)年には豊臣秀吉が京都市街の改造に着手して、近世の町並みが形成されていくが、

鴨川を渡ると、北白川・吉田・岡崎一帯に田畑がひろがる景観も、この頃形づくられつつあったのである。

以上のように、平安時代の鴨東の開発は、古代の土地利用の枠組みの中で出発するが、次第にそれを変質させ、新しい枠組みを形成していったと考えうる。そしてそれは平安京の変質と密接な関係を持っていたのである。

なお文献の解釈について、京都大学大学院国史学専攻西山良平氏に御教示をいただいた。

〔注〕

- (1) 本章では、9世紀を中心とする文献資料をおもに検討しているが、これは平安京造営当時の京近郊に対する施策を知ることが以後の展開を知るうえで重要と考えるからである。ここでとりあげるもののほかに検討すべき文献資料は膨大にあるが、本章をその作業の第一歩としたい。なお京都大学構内遺跡と関係する文献資料と研究とをまとめたものとして川上貢の論考がある〔川上77〕。また平安時代の平安京と山城国の文献史料を年表にまとめたものとして井上満郎・西山恵子の集成がある〔井上76, 井上・西山77〕。
- (2) 火葬場を塚としたもの。発掘例を本年報第3章「京大理学部遺跡 BE29 区の発掘調査」で報告している。
- (3) 北白川廃寺については粟田氏の氏寺とする説〔角田70〕と、粟田寺と円覚寺の複合遺跡とする考え〔たなか76〕がある。
- (4) 岡田保良「京都大学構内遺跡と京・白河」(本年報第8章)に詳しい。
- (5) 創立供養, 以下供養と記す。
- (6) 岡田保良「京都大学構内遺跡と京・白河」(本年報第8章)参照。
- (7) 平城京では左京の東に外京があり, 造営当初から計画されていたとする説もあるが, 平安京に関しては, 平安中期以前の鴨東にその存在を想定できない。また平安後期の岡崎は政治の中心地であり, 外京とは性格を異にする。

参 考 文 献

- 石田志朗・中村徹也 1972年『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』。
- 泉拓良 1977年「京都大学植物園遺跡」『仏教芸術』115号。
- 1978年「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』。
- 伊藤久嗣 1968年「中世納骨堂の一形態——奈良市中町大神家骨堂——」『帝塚山考古学』No. 1。
- 井上満郎 1976年「平安京年表集成Ⅰ」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』。
- 井上満郎・西山恵子 1977年「平安京年表集成Ⅱ」『平安京跡 京都市埋蔵文化財年次報告1976—Ⅰ』。
- 上原真人 1978年 a 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第13・14号。
- 1978年 b 「第4章考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡 BG36区——』。
- 確井小三郎 1915年「京都坊目誌(上京之部)坤」『京都叢書』所収。
- 宇野隆夫 1978年「京大病院遺跡出土の土器——古代から中世——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』。
- 梅原末治 1923年「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告第5冊』。
- 1935年「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第16冊』。
- 1936年「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』。
- 1939年「北白川廃寺跡」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第19冊』。
- 円勝寺発掘調査団 1971年「円勝寺の発掘調査(上)」『仏教芸術』82号。
- 1972年「円勝寺の発掘調査(下)」『仏教芸術』84号。
- 大津市教委(大津市教育委員会) 1958年『大津市南滋賀遺跡調査概報』。
- 小野山節・都出比呂志 1973年『高槻市安満遺跡の条里遺構』。
- 梶川敏夫 1977年 a 「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1976—Ⅱ』。
- 1977年 b 「法勝寺跡」『仏教芸術』115号。
- 梶川敏夫・渡辺和子 1977年「尊勝寺跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1976—Ⅱ』。
- 川上貢 1977年「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』。
- 北村四郎・村田源 1961年『原色日本植物図鑑』草本編(中)。
- 木村捷三郎・畑美樹徳・上原真人 1974年「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1974—Ⅱ』。

- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年『京都大学構内遺跡調査研究年報—昭和51年度—』。
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』。
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡 BG36 区——』。
- 京都府教委(京都府教育委員会) 1978年「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1978』。
- 京文研(京都市埋蔵文化財研究所) 1978年『平安京跡発掘調査概報』『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-II』。
- 隈昭志・野田拓治編 1973年『尾窪』『熊本県文化財調査報告 第12集』。
- 工楽善通・藤村泉 1973年『尊勝寺跡発掘調査概報』。
- 佐々木英夫 1978年「平安京造営尺寸法の有効数字について」『古代文化』第30巻第6号。
- 佐原真 1960年「第2編第1章第3節弥生式時代」『彦根市史』上冊。
1968年「P1. 50 琵琶湖地方」『弥生式土器集成本編2』。
- 滋賀県教委(滋賀県教育委員会) 1971年『国道8号バイパス関連遺跡調査報告書』。
- 島津義昭 1976年「熊本県の考古学——最近の発掘調査とその成果——」『九州考古学』No. 52。
- 島津貞彦 1924年「京都市北白川町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号。
- 杉原荘介・大塚初重 1961年「京都府深草遺跡」『日本農耕文化の生成』。
- 杉原荘介・岡本勇 1961年「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の生成』。
- 杉山信三 1954年「吉田寺について」『史跡と美術』242号。
1955年「洛東の円覚寺について」『日本建築学会研究報告』34号。
1957年「後高倉院の御葬地、北白川について」『史跡と美術』278号。
1962年『院の御堂と御所——院家建築の研究——』。
- 杉山信三・岡田茂弘 1961年「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第10冊』。
- 杉山信三・梶川敏夫 1975年『法勝寺金堂跡発掘調査概要』『京都市埋蔵文化財年次報告1974-II』。
- たなかしげひさ 1976年「北白川廢寺は粟田寺と官寺円覚寺の複合遺跡」『史跡と美術』467号。
- Tsukada, M. 1972年 “The history of Lake Nojiri, Japan” Conn. Acad. Art. Sci. 44, 339-365。
- 津田菊太郎 1978年『平安京、都城域 起源と二元割域の研究』。
- 角田文衛 1970年「北白川廢寺の問題」『日本古文化論考』。
- 同志社調査会(同志社大学校地学術調査委員会)
1977年『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』『同志社大学校地学術調査委員会資料 No. 8』。
1978年『常盤井殿町遺跡発掘調査概報——同志社女子大学心和館増築地点の調査——』『同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 12』。
- 中村徹也 1973年『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』。

- 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』。
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』。
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』。
- 奈文研(奈良国立文化財研究所) 1976年『平城宮発掘調査報告Ⅵ』『奈良国立文化財研究所学報第26冊』。
- 浪貝毅 1978年『法性寺跡』『京都市埋蔵文化財年次報告1976-Ⅲ』。
- 浪貝毅・梶川敏夫編 1976年『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』。
- 梶崎彰一 1967年「5墳墓」『日本の考古学Ⅵ』。
1975年『日本の陶磁 古代中世篇』第2巻。
- 西川幸治 1972年『日本都市史研究』。
- 西田直二郎 1925年「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊。
- 林屋辰三郎 1960年「法勝寺の創建」『歴史における芸術と社会』。
- 広岡公夫 1970年「考古地磁気法による年代測定とその試料採取について」『考古学と自然科学』第3号。
- 彦藤嘉彦 1967年『味噌粕岩遺跡第2次調査報告』。
- 福山敏男 1943年「六勝寺の位置について」『美術史学』81・82号。福山敏男『日本建築史研究』1968年所収。
1969年「中尊寺金色堂の性格——平安時代の葬礼史からみる——」『仏教芸術』72号。
1975年「白河院と法勝寺の歴史」『法勝寺跡』。
1977年「室町時代の神社——特に吉田社と斎場所」『日本の美術』第129号。
- 文化庁監修 1976年「考古Ⅱ」『重要文化財』29。
- 真壁忠彦・真壁霞子 1966年「備前焼研究ノート(1)——備前焼の成立——」『倉敷考古館研究集報』。
- 三重県文化財連盟・日本道路公団名古屋支社
1970年「東庄内B遺跡」『日本道路公団 東名阪道路埋蔵文化財調査報告』。
- 横山浩一・佐原真 1960年『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部。
- 米倉二郎 1956年「山城の条里と平安京」『史林』第39巻第3号。
- 六勝寺研究会 1972年『延勝寺跡の発掘調査』。
- LeRay G. Holm, et al. 1977年 “The World’s Worst Weed” The Univ. press Hawaii, Honolulu.
- 渡辺久雄 1970年『条里制の研究——歴史地理学的考察——』。

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター(以下「センター」という)を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は京都大学の専任教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターに、センターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1) センター長。
- (2) センターの研究部の主任。
- (3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者、若干名。
- (4) 事務局長及び施設部長。
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

センター長	樋口隆康(文学部教授)	運営協議会委員	立山義雄(施設部長)
運営協議会委員	池田次郎(理学部教授)	研究部主任	泉 拓良(文学部助手)
//	石田志朗(理学部助教授)	研究部研究員	宇野隆夫(文学部助手)
//	川上 貢(工学部教授)	//	岡田保良(工学部助手)
//	西川幸治(工学部教授)	//	吉野治雄(施設部技術補佐員)
//	足利健亮(教養部助教授)	事務室	大八木邦雄(施設部事務官)
//	泉 拓良(文学部助手)	//	梅川厚子(施設部技術補佐員)
//	大塚喬清(事務局長)		

京都大学構内遺跡調査会規約

- 第1条 この会は、京都大学構内遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称し、京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行なうことを目的とする。
- 第2条 調査会は、事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。
- 第3条 調査会は、第1条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 京都大学の委託により行なう当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査。
 - (2) 前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存、管理に関する事項の審議。
 - (3) 埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成。
 - (4) その他必要とする事項。
- 第4条 調査会に次の役員を置く。
- (1) 会長1名。
 - (2) 委員
 - イ 京都大学の学識経験者若干名。
 - ロ 新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長。
 - ハ 新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者若干名。
 - (3) 監事若干名。
 - 2 会長は、前項第2号イの委員の推薦する者とする。
 - 3 委員及び監事は、会長が委嘱する。
 - 4 第1項第2号ロ及びハの委員は、当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任期が終わったときは、退任する。
- 第5条 会長は、調査会を代表し、業務を総括する。
 - 2 委員は、委員会を構成し、委員会の議決に基づく業務を執行する。
 - 3 監事は、調査会の会計を監査する。
- 第6条 委員会は、会長及び委員をもって組織する。
 - 2 委員会は、会長が招集し、議長となる。
 - 3 委員会は、新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で、必要と認めるときは、部会を置くことができる。
- 第7条 第3条の発掘調査の実施に当たるため、調査会に調査班を置く。
 - 2 調査班長、調査員及び調査補助員をもって組織する。
 - 3 調査班長は、委員会の議に基づき会長が委嘱する。
 - 4 調査員及び調査補助員は、調査班長の推薦により会長が委嘱する。
- 第8条 調査会の事務を処理するため、調査会に事務局を置く。
 - 2 事務局に職員若干名を置く。
 - 3 職員は、会長が任免する。
- 第9条 調査会の経費は、京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。

第10条 調査会は、4月1日に始まる年度ごとに、事業報告書及び収支決算書を作成し、監事の監査を経て、年度終了後3月以内に委員会の承認を受けるものとする。

第11条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

- 会長 亀井節夫(理学部教授)
- 委員 樋口隆康(文学部教授)
- 〃 西川幸治(工学部教授)
- 〃 西村 進(教養部助教授)
- 〃 泉 拓良(埋文研助手)
- 〃 小野真海(事務局庶務部長)

規約第4条1項(2)ハ 中山忠之(京都市文化観光局文化財保護課長)

規約第4条1項(2)ロ 坂本慶一(農学部長)
〃 林忠四郎(理学部長)

- 監事 西村利雄(施設部企画課長)
- 〃 位ノ花一郎(理学部事務長)
- 〃 鹿野英夫(農学部事務長)

- 事務局員 大八木邦雄(施設部事務官)
- 〃 梅山厚子(施設部技術補佐員)
- 〃 浜崎絹子(調査会事務員)
- 〃 川野美栄子(調査会事務員)

調査班長・主任 泉拓良, 宇野隆夫, 岡田保良, 吉野治雄

調査員 出田和久, 清水朱美, 田中はる代, 津隈久美子, 中堀謙二, 浜崎一志

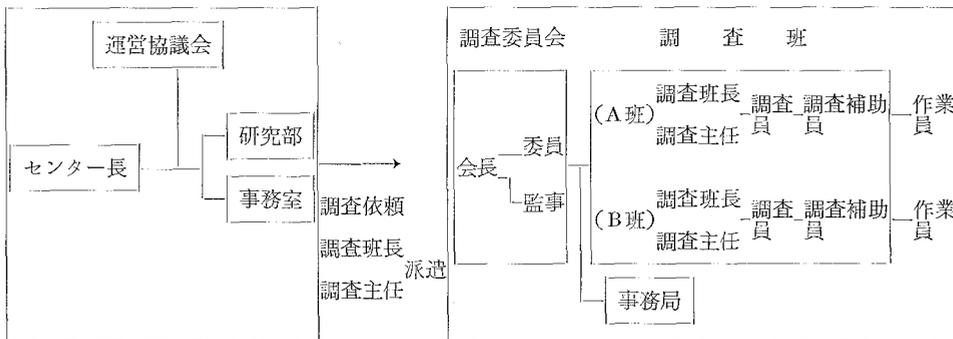
調査補助員 綱谷克彦, 井上豊春, 岩崎仁, 上野講子, 大野富子, 岡田真紀, 小泉隆司, 中内均, 西野素生, 原充, 藤沢かおる, 藤村早苗, 藤原喜信, 藤原高志, 矢野智子, 山口理子

作業員 赤沢俊男, 井口繁司, 池田イシ, 五十棲春一, 岩波幸太郎, 木村栄三郎, 小寺末之, 小原祥一, 佐藤初枝, 榎木きぬ子, 榎木さの, 榎木マツ, 中島まつえ, 中村コト, 中村皓子, 西村イシ, 橋本庄次, 橋本俊夫, 橋本敏治, 福井長治, 福田文治, 藤木恵美子, 藤木さの, 堀内千代, 森田勝晴, 安田史郎, 安田秀男, 吉田龍太郎

職名は就任当時のものを用い、京都大学の職員に関しては大学名を省略した。

京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学構内遺跡調査会



京大医学部遺跡 A O 18 区調査班

所在地 京都市左京区吉田橋町(図版1-41)
工事名 医学部基礎医学研究室実験室新営
発掘期間 昭昭和52年11月1日～昭和53年2月28日
面積 約1200㎡
調査班長・主任 泉拓良, 吉野治雄
調査員 出田和久, 清水朱美, 田中はる代
調査補助員 9名
作業員 24名

京大理学部遺跡 B E 29 区調査班

所在地 京都市左京区北白川追分町(図版1-54)
工事名 理学部宇宙物理学科等校舎新営
発掘期間 昭和53年8月1日～同10月7日
面積 約500㎡
調査班長・主任 岡田保良, 吉野治雄, 宇野隆夫
調査員 浜崎一志
調査補助員 3名
作業員 17名

京大農学部遺跡 B G 32 区調査班

所在地 京都市左京区北白川追分町(図版1-55)
工事名 農学部農林生物学科硝子温室改築
発掘期間 昭和53年9月1日～9月30日
面積 約100㎡
調査班長・主任 泉拓良, 宇野隆夫
調査員 中掘謙二, 津隈久美子
調査補助員 1名
作業員 6名

京大農学部遺跡 B G 31 区調査班

所在地 京都市左京区北白川追分町(図版1-56)
工事名 理学部物理学科校舎新営
発掘期間 昭和53年11月1日～同12月末日現在実施中
面積 約650㎡
調査班長・主任 泉拓良, 宇野隆夫
調査員 田中はる代

調査補助員 2名

作業員 8名

教養部エレベーター新営予定地試掘調査

所在地 京都市左京区吉田二本松町(図版1-48 a・48 b)

試掘期間 昭和52年12月12日～同12月21日

面積 80㎡(8 m×5 m 2ヶ所)

担当者 宇野隆夫

白河北殿跡比定地 A A 18 区試掘調査

所在地 京都市左京区東竹屋町(図版1-49)

試掘期間 昭和53年2月20日～3月15日

面積 40㎡(2 m×10m 2ヶ所)

担当者 岡田保良

本部構内排水ポンプ新営予定地試掘調査

所在地 京都市左京区吉田本町(図版1-50 a・50 b)

試掘期間 昭和53年2月28日～同3月6日

面積 8㎡(2 m×2 m 2ヶ所)

担当者 宇野隆夫

工学部電気工学科等校舎新営予定地試掘調査

所在地 京都市左京区吉田本町(図版1-51 a～51 d)

試掘期間 昭和53年7月4日～同7月11日

面積 16㎡(2 m×2 m 4ヶ所)

担当者 岡田保良

環境保全センター重金属処理装置室新営予定地試掘調査

所在地 京都市左京区吉田本町(図版1-52 a・52 b)

試掘期間 昭和53年7月12日～同7月14日

面積 8㎡(2 m×2 m 2ヶ所)

担当者 岡田保良

病院西構内電気管理設予定地試掘調査

所在地 京都市左京区吉田下阿達町(図版1-53 a～53 f)

試掘期間 昭和53年7月14日～同7月18日

面積 24㎡(2 m×2 m 6ヶ所)

担当者 宇野隆夫

第5表 京都大学構内遺跡調査の歴史

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会をさす)

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (m ²)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
大正12年	農 学 部	1・2	浜 田 耕 作	表探・試掘			縄文土器, 石器他	梅原23, 島田24	
13年	農 学 部	不明	藤 木 理 三 郎				石 棒	横 山・佐原60	
昭和9年	大阪府阿武山古墳		梅 原 末 治	発 掘			乾漆棺, 玉飾枕他	梅原36	
10年	北白川小倉町		梅 原 末 治				縄文土器, 石器他	梅原36	
31年	農 学 部	3	羽 館 易	採 集			縄文土器		
46年	農 学 部	4	石 田 志 朗	採 集			弥生土器		
47年	農 学 部	5		採 集			石 棒		
	大阪府安瀧		小 野 山 節 都 出 比 呂 志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器, 石器他	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石 田 志 朗 中 村 徹 也	事前発掘	600		弥生土器, 石器他	石 田・中村72	
	教養部	7	藤 岡 謙 二 郎	工事中採集・実測			縄文土器他	藤岡73	
48年	農 学 部	8	中 村 徹 也	事前発掘		瓦 溜	縄文土器, 瓦(平安)他	埋78b	瓦溜埋戻し
	農 学 部	9	中 村 徹 也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器他	中村73	
	農 学 部	10	中 村 徹 也	事前発掘	40		縄文土器他		
	植 物 園	11a	中 村 徹 也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器他	中村74b, 泉 77	甕棺・配石遺構の移築復原を決定
49年	農 学 部	12	中 村 徹 也	事前発掘	800		縄文土器他	中村74b	
	植 物 園	11a~d	中 村 徹 也	追加調査		甕棺・配石遺構	縄文土器他	中村74b	甕棺・配石遺構取上げ
	農 学 部	13	中 村 徹 也	事前発掘	800		縄文土器他	中村75	
50年	教 養 部	14	小 野 山 節 中 村 徹 也	事前発掘	750		縄文土器他		
51年	教 養 部 AL24区	15	泉 拓 良	立 合		瓦溜, 溝	弥生土器, 瓦(平安)他	調77	工事を中断して一部発掘, 遺跡発見届提出

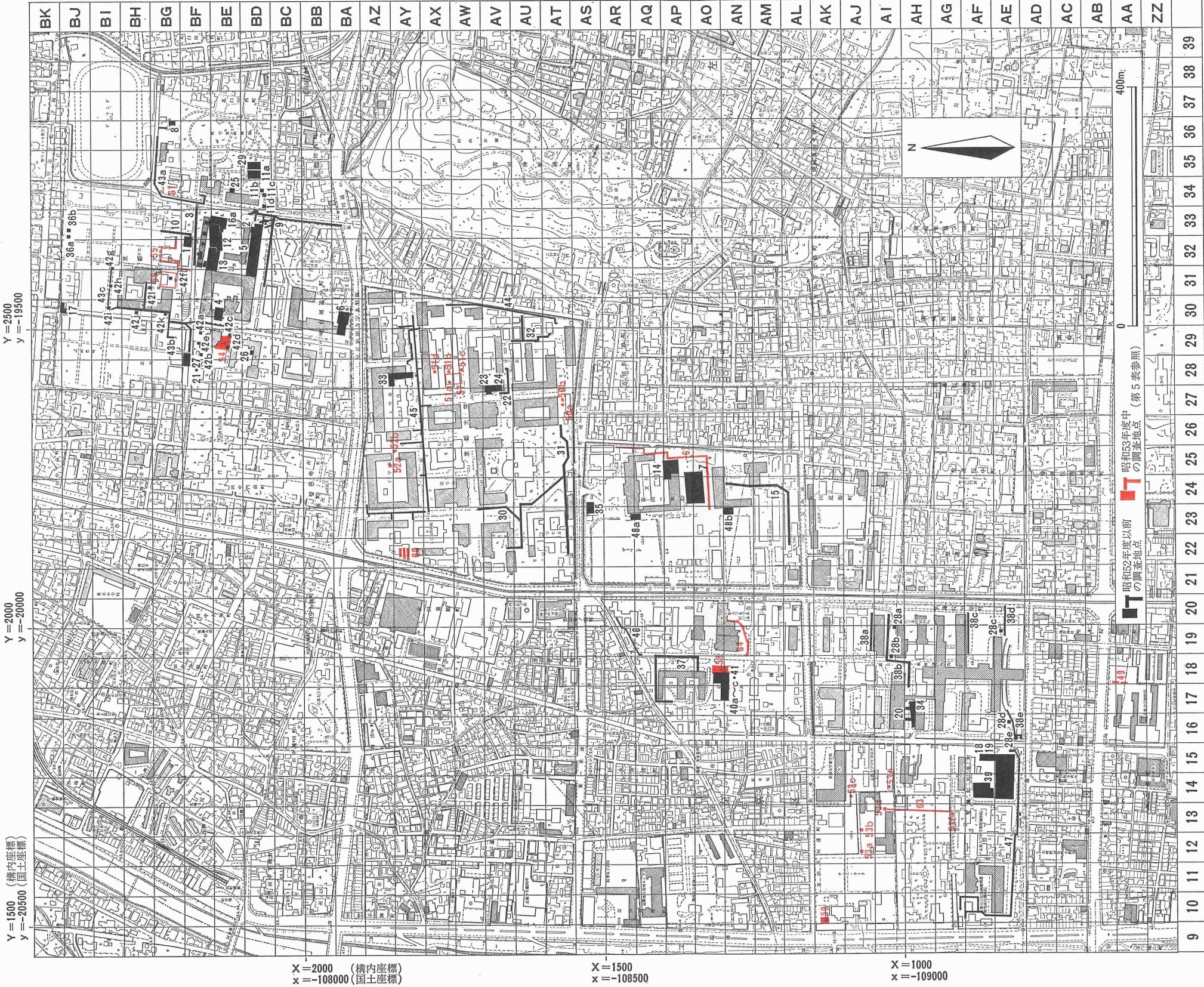
年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
昭和51年	農学部 BE33区	16 a~h	泉 拓良	事前発掘	900	縄文時代 土壙, 不定形 ピット群, 井 戸, 集石 ピット, 溝他	縄文土器, 須恵器, 土 師器, 瓦他	調77	
	北 BK30区	17	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	病 AE15区	18	泉 拓良	試 掘	20	ピット	土師器, 瓦 他	調77	工事中断 遺跡発見届 提出
	病 AE15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	池, 溝, 柱穴, 井 戸, 土器 溜他	土師器, 陶 磁器, 瓦他	調77	
	病 AH17区	20	岡田保良	試 掘			土師器, 瓦 他	調77	工事予定地 の発掘調査 決定
	北 BF28区	21	泉 拓良	試 掘				調77	工事の時に 立合
	本 AV28区	22	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	和歌山県 瀬		中村友博	試 掘			縄文土器, 弥生土器他	調77	工事予定地 の一部発掘 調査決定
	奈良県宇 陀郡大宇 陀町カタ ブキ		大宇陀町 教育委員会	遺跡確認				調77	遺跡ではな い
	本 AV27区	23	泉 拓良	試 掘	30		土師器(鎌 倉以降)他	調77	工事の時に 立合
	本 AV27区	24	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	北 BE34区	25	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	北 BD29区	26	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	北 BF28区	27	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	病 AI18区	28 a~c	泉 拓良	試 掘	30	溝	土師器(平 安以降)他	調77	一部を發 掘, その他 を立合に決 定
	植物園 BD35区	29	吉野治雄	保 存				調77	甕棺・配石 遺構を移築 復原
	本 AV23区	30	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	本 AT25区	31	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	本 AU29区	32	泉 拓良	立 合		ピット	土師器(鎌 倉以降)他	調77	工事続行

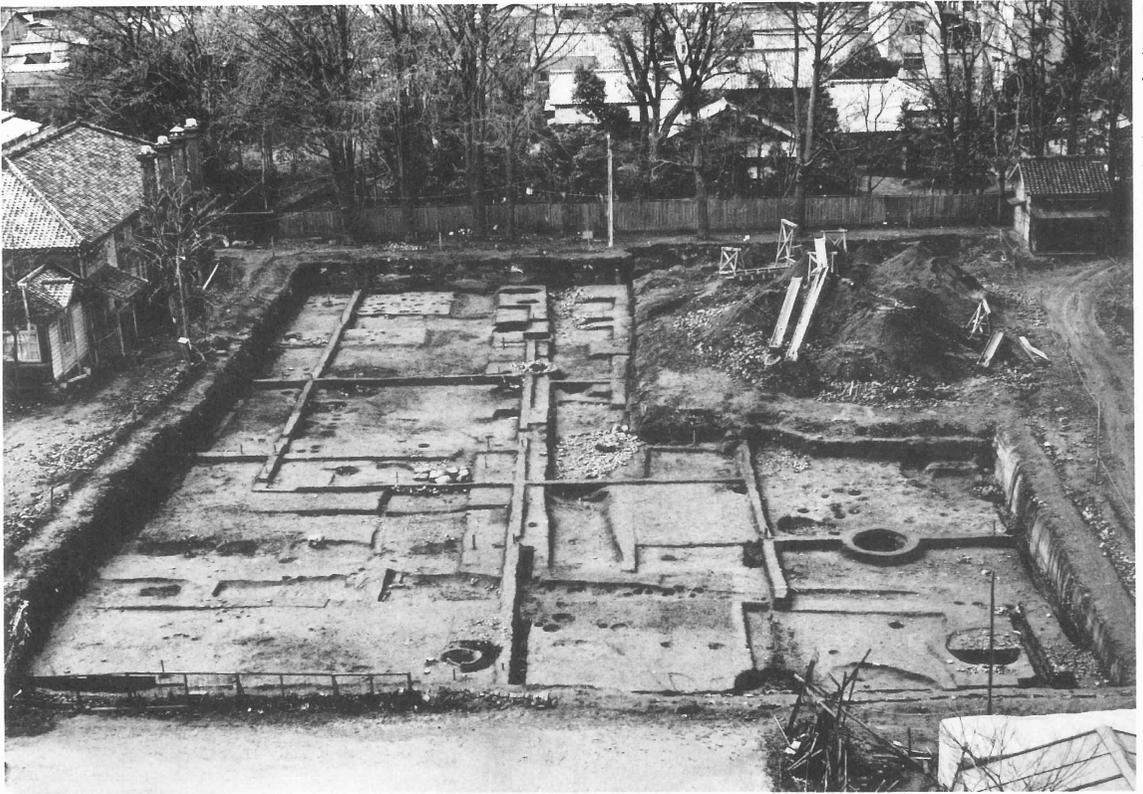
年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (m ²)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和51年	本 部 区 AZ 28	33	泉 拓良	立 合			縄文土器細片		工事続行
	病 院 区 AH17	34	泉 拓良	事前発掘	200	溝, 井戸, 築石, ピット他	土師器, 陶磁器, 瓦(平安以降)他	埋78 a	
	教 養 部 区 AS 23	35	吉野治雄	試 掘	10	溝	縄文土器, 須恵器(奈良)他	埋77	工事の時に立合
	北 部 区 BJ 33	36 a・b	宇野隆夫	試 掘	10		縄文土器	埋77	
	医 学 部 区 AP 18	37	泉 拓良	立 合			土師器(平安以降)他	埋77	工事続行
	病 院 区 AI 18	38 a~c	泉 拓良	立 合		石 敷	土師器(室町以降)他	埋77	一部実測, 工事続行
	和歌山県瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壇他	縄文土器, 石器, 弥生土器他	埋78 a	
昭和52年	病 院 区 AF 14	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	護岸, 井戸, 溝他	土師器, 陶磁器, 瓦他	埋78 a	
	医 学 部 区 AO 18	40 a~c	泉 拓良 吉野治雄	試 掘	10	鎌倉時代土壇	土師器, 陶磁器他	埋78 a	工事予定地の発掘調査を決定
	医 学 部 区 AO 18	41	泉 拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	溝, 井戸, 土器溜他	土師器, 陶磁器, 瓦他	埋78 a	
	北 部 区 BF 29	42 a~f	泉 拓良 吉野治雄	試 掘	50		縄文土器, 植物遺体他	埋78 a	
	北 電 気 部 管	42 g~l	吉野治雄	試 掘	50		須恵器, 土師器他	埋78 a	
	北 電 気 部 管	43 a~c	吉野治雄 宇野隆夫	立 合		溝, ピット	須恵器, 土師器他	埋78 a	実測・遺物採集の後, 工事続行
	本 給 水 部 管	44	宇野隆夫	立 合				埋78 a	工事続行
	本 ガ ス 部 管	45	宇野隆夫	立 合				埋78 a	工事続行
	医 学 部 管 医 ガ ス	46	岡田保良	立 合			土師器他	埋78 a	工事続行
	病 院 給 水 部 管	47	岡田保良	立 合				埋78 a	工事続行
	教 養 部 区 AQ 23・AN 23	48 a・b	宇野隆夫	試 掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦(平安後期)他	埋78 a	

年 度	遺 跡 名	地名	地点	担 当 者	調査の種 類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和53年	白河北殿 比定地区 AA18		49	岡田保良	試 掘	40	溝	瓦, 土師器, 陶磁器	埋79	遺跡確認調査
	本 部 AT27区	a・b	50	宇野隆夫	試 掘	8	道路 (側溝)	須恵器	埋79	工事予定地の 発掘調査決定
	本 部 AW28区	a~d	51	岡田保良	試 掘	16	路面 (白川道)	土師器, 陶 磁器	埋79	工事予定地の 発掘調査決定
	本 部 AY25区	a・b	52	岡田保良	試 掘	8			埋79	
	病 院 電 気 管	a~f	53	宇野隆夫	試 掘	24			埋79	
	理 学 部 BE29区		54	岡田保良 吉野治雄 宇野隆夫	事前発掘	500	方形周溝 墓, 火葬 塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農 学 部 BG32区		55	泉 拓良 宇野隆夫	事前発掘	100	土坑, 溝	縄文土器, 土師器, 陶 磁器, 瓦	埋79	
	農 学 部 BG31区		56	泉 拓良 宇野隆夫	事前発掘	650				現在実施中
	本 部 AW28区		57	岡田保良 吉野治雄	事前発掘	500				実施予定
	医 学 部 AN18区		58	宇野隆夫 岡田保良 吉野治雄	立 合		建物, 井 戸	土師器, 陶 磁器, 瓦	埋79	発掘・実測 の後, 工事 続行
	京 都 府 丹 波 町			岡田保良	立 合				埋79	工事続行
	滋 賀 県 高 島 町			岡田保良 高島町 教育委員会	立 合				埋79	工事続行
	京 都 府 宇 治 市			宇野隆夫	立 合				埋79	工事続行
	京 都 府 東 山 区		59	岡田保良	立 合				埋79	工事続行
	本 部 AY22区		60	泉 拓良	立 合		高野川旧 河道		埋79	実測後, 工 事続行
	北 方 ス 部 管		61	泉 拓良	立 合			石仏, 石塔 婆	埋79	工事続行
	教 養 ス 部 管		62	泉 拓良	立 合				埋79	工事続行
	病 院 電 気 管		63	泉 拓良	立 合				埋79	工事続行
	医 学 部 電 気 管		64	吉野治雄	立 合		井戸, 溝	弥生土器, 土師器, 陶 磁器	埋79	発掘・実測 の後, 工事 続行

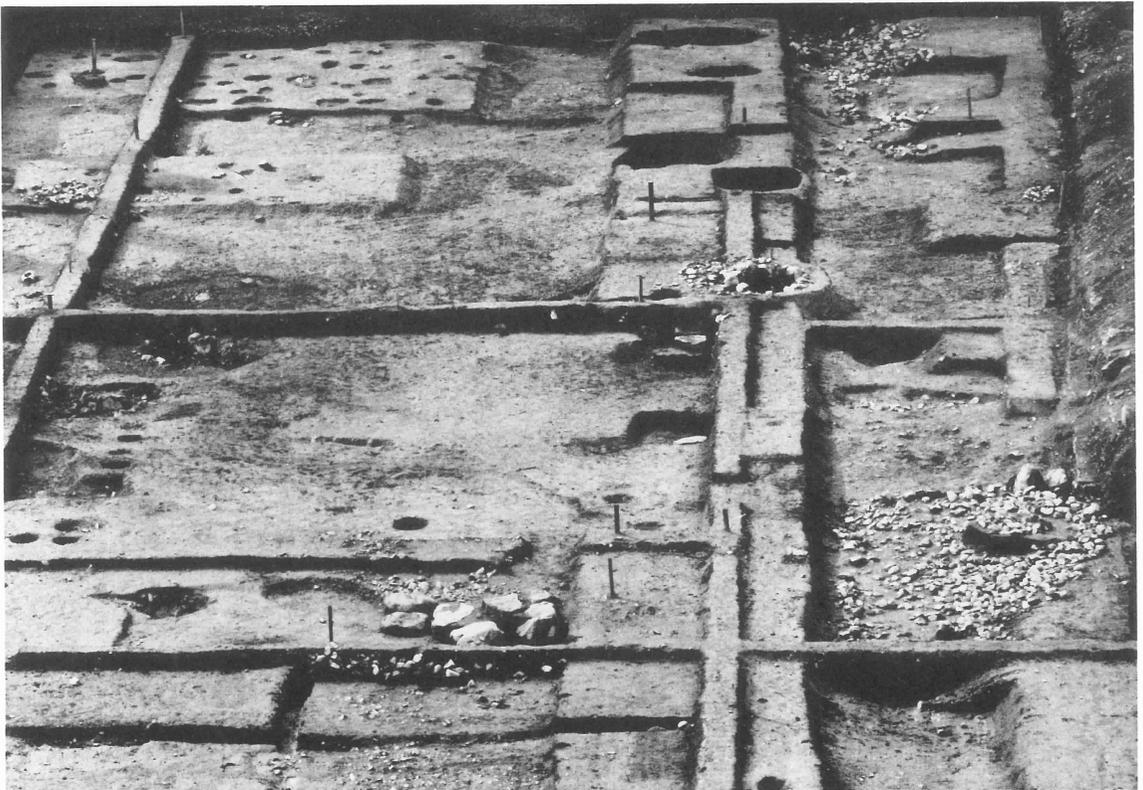
图

版

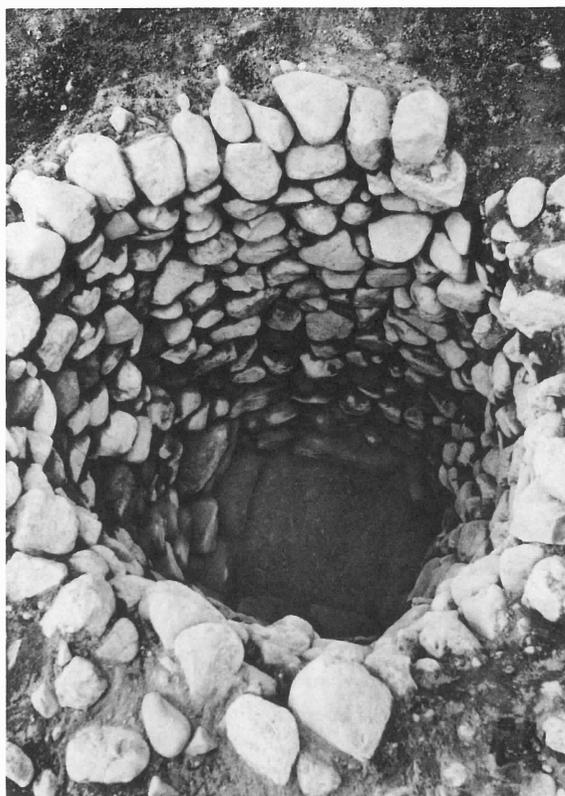




1 第5層発掘後全景



2 土壘状遺構 SA1 と溝 SD1



1 井戸 SE6(東から)



2 井戸 SE 8(南から)



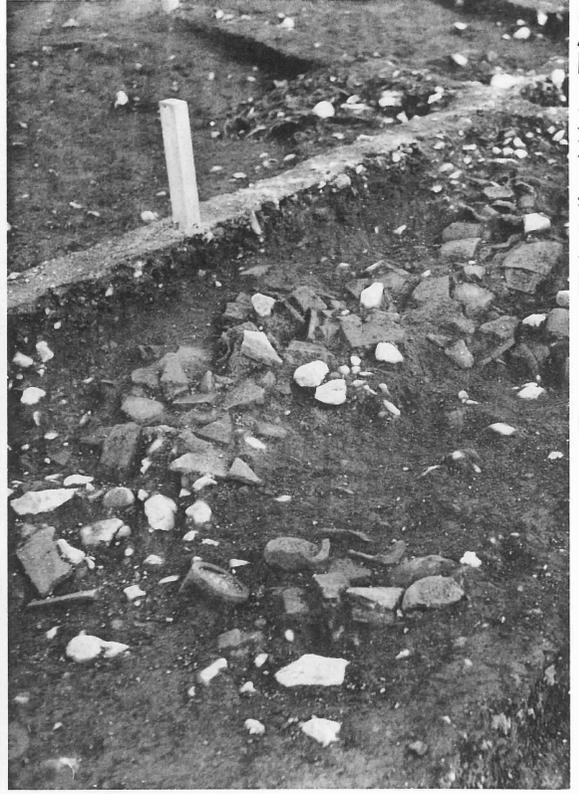
3 土坑 SK11(南から)



4 土器溜 SK15(南から)



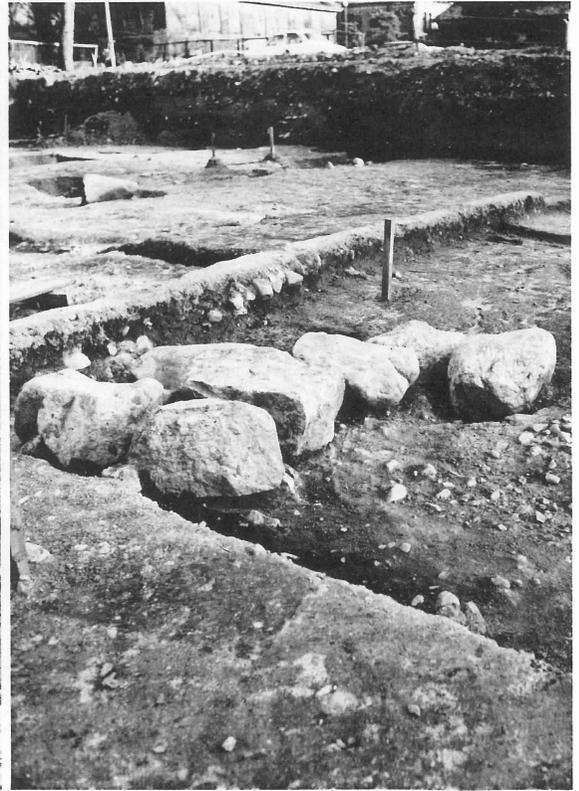
1 土器溜 SK16 (東から)



2 瓦溜 SK12 (北西から)



3 集石 SX2 (南から)



4 石段状遺構 SX3 (北西から)



I 1



I 2



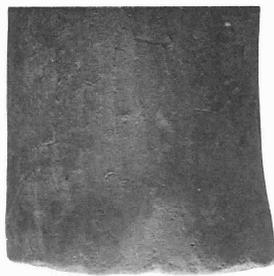
I 3



I 4



I 5



I 53



I 54



I 55



I 56



I 57



I 58

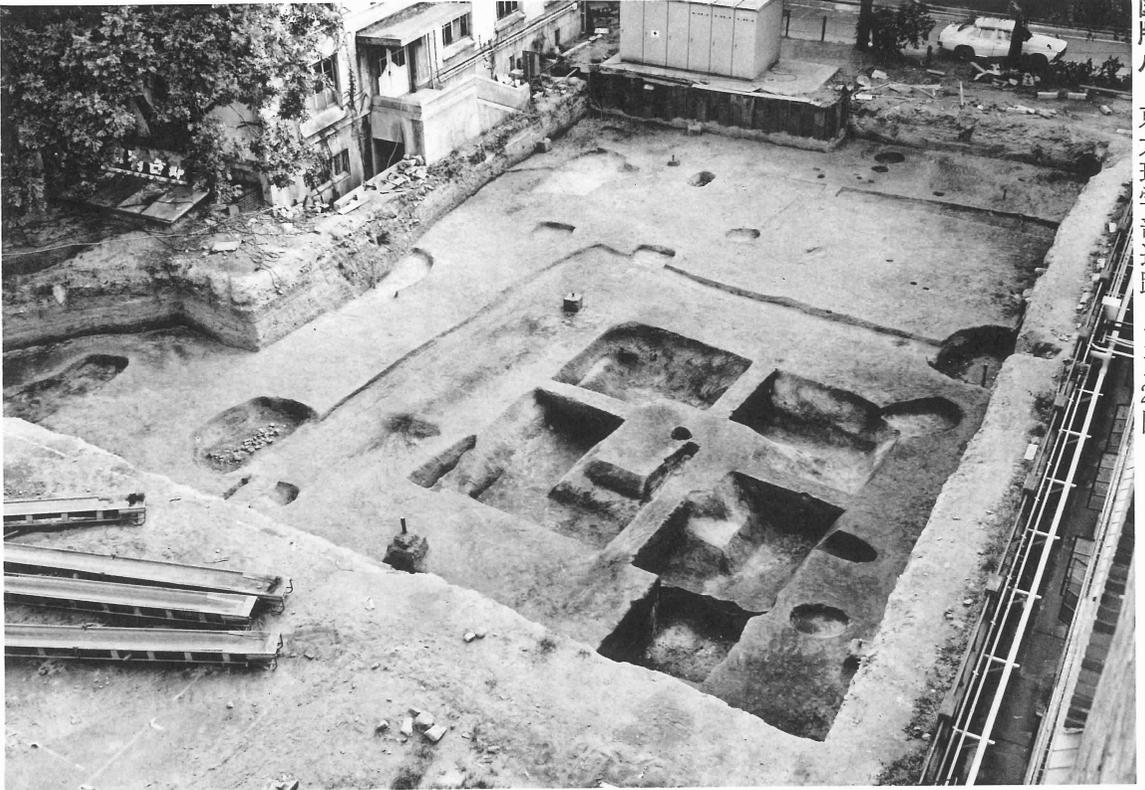




1 発掘前全景



2 第1検出面の遺構全景



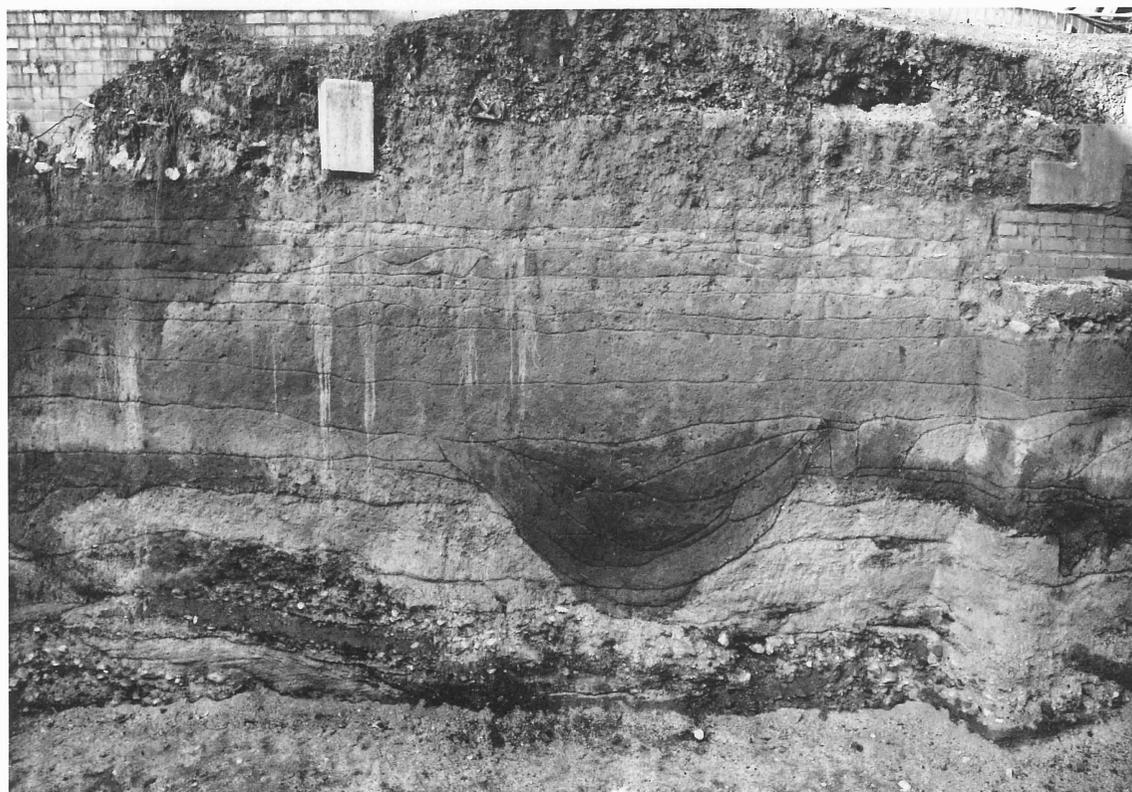
1 第2検出面の遺構全景



2 第3検出面の遺構全景



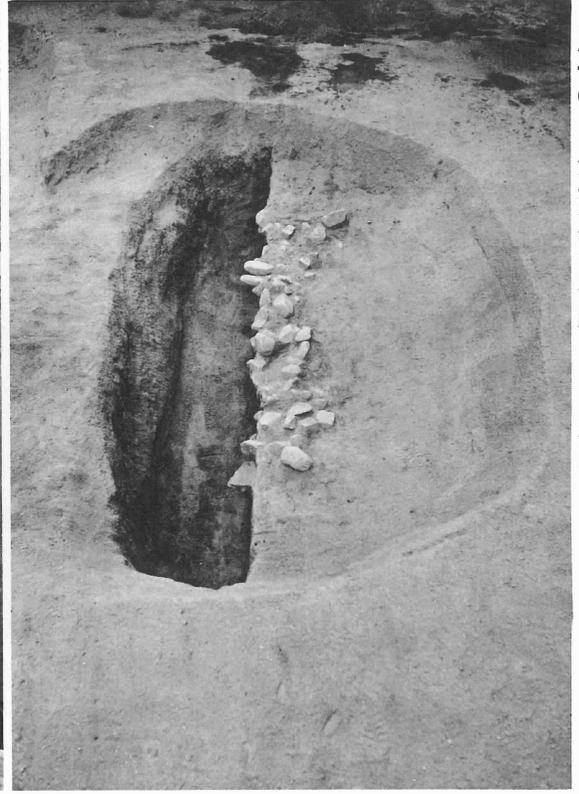
1 南壁東部の層位と方形周溝墓Ⅲ東辺断面



2 北壁西部の層位と方形周溝Ⅰ西辺断面



1 火葬塚 SX1 検出(南から)



2 土坑 SK2 断ち割り(東から)



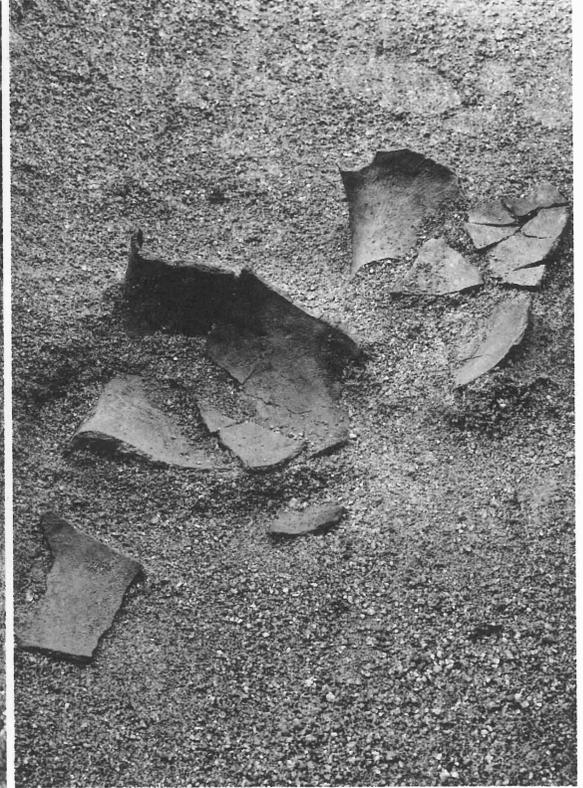
2 火葬塚 SX1(南から)



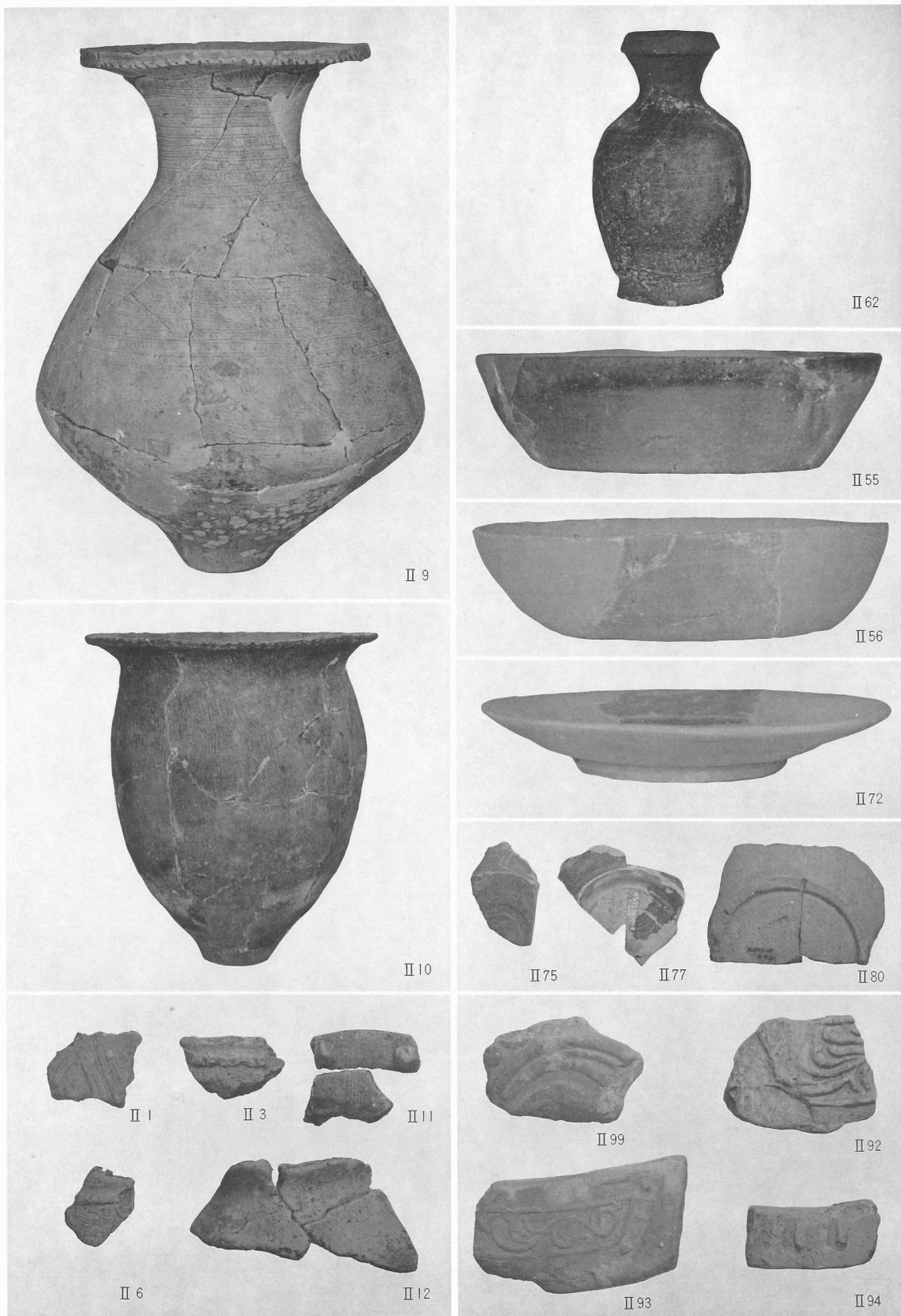
1 方形周溝墓 I, II, III(南から)



2 方形周溝墓 I 南周溝内の土器



3 方形周溝墓 III 東周溝内の土器



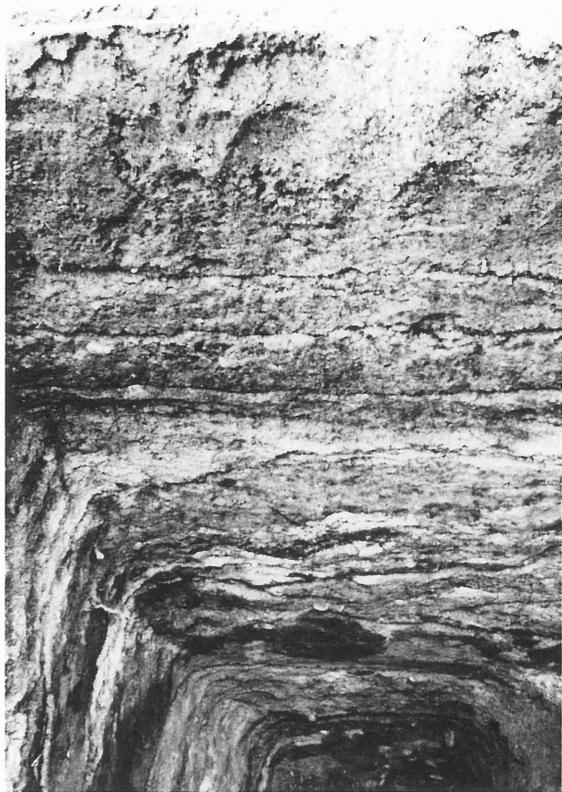
II 9・10・6・11・12 弥生土器, II 1・3 縄文土器, II 62・55・56 須恵器, II 72 灰釉陶器,
II 75・77・80 緑釉陶器, II 99・92~94 瓦



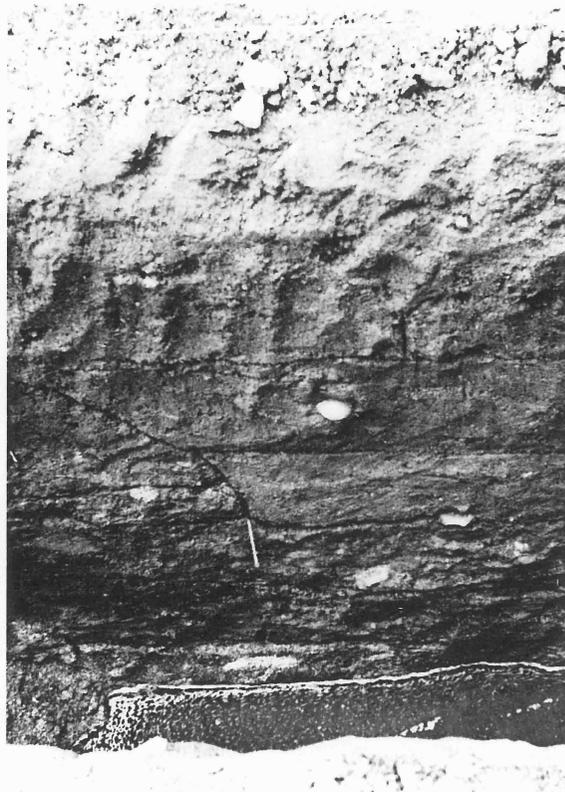
1 土坑 SK1 と溝 SD1 (南から)



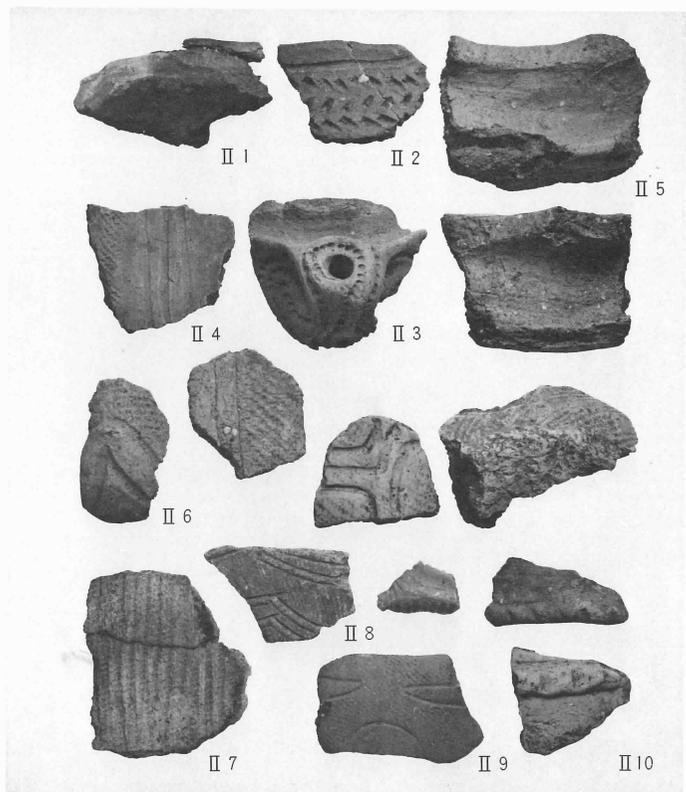
2 B区西壁 a 地点の層位



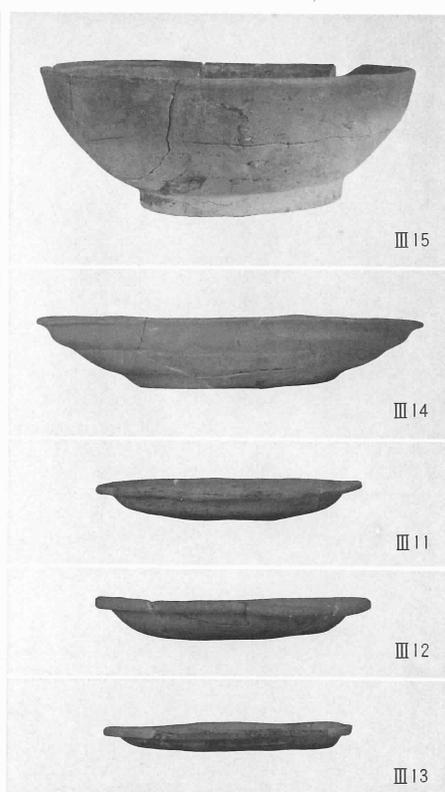
1 C区東端南壁の層位



2 C区西部南壁の層位



3 縄文土器



4 III15黑色土器, III14・11~13土師器



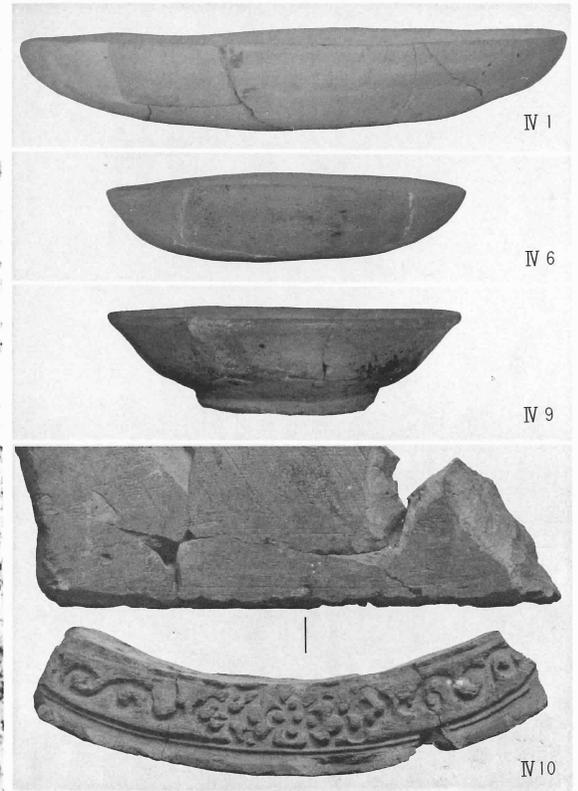
1 調査地全景(南から)



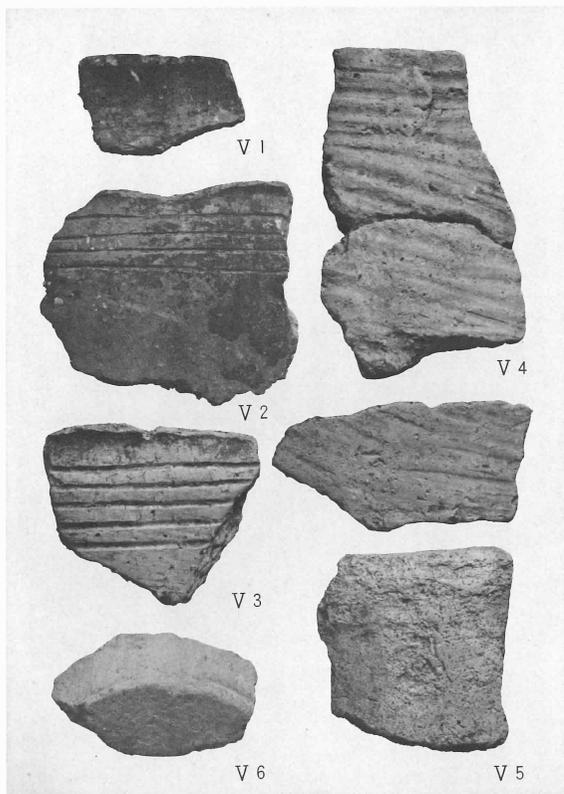
2 南トレンチ南壁層位



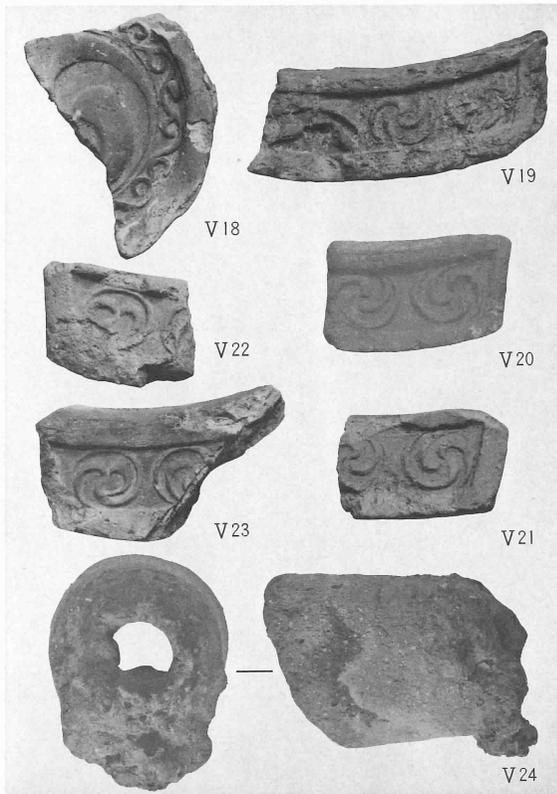
3 南トレンチの遺構(南から)



4 IV1・6土師器, IV9灰釉系陶器, IV10軒平瓦



1 教養部 AQ23 区 TP1 第10層出土の弥生土器



2 教養部 AN23 区 TP2 溝 SD1 出土の瓦と羽口



3 本部構内 AT27 区出土の須恵器，陶磁器，土師器



4 工学部 AW28 区 TP3 西壁の道路断面

昭和54年3月25日印刷

昭和54年3月31日発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和53年度

編 集 行 京都大学埋蔵文化財研究センター

印 刷 本 中 西 印 刷 株 式 会 社
京都市上京区下立売通り小川東入